

# 上代裂に見られる色彩の系統色名

——国立歴史民俗博物館収蔵資料上代裂帳について——

神 庭 信 幸

- 
- |                   |             |
|-------------------|-------------|
| 1. はじめに           | 4. 測定結果     |
| 2. 色材の分光スペクトル測定   | 5. 各色彩の系統色名 |
| 3. 測定対象となった上代裂の種類 | 6. ま と め    |
- 

## 論文要旨

国立歴史民俗博物館が所蔵する上代裂に関して、裂に残る色彩の分光スペクトル測定により、各色彩の系統色名による分類を試みた。各色彩は Brown（黄赤）、Olive（黄緑）の基本色名によってほとんどが表示される。青色に関しては、1点を除き Gray（灰）の基本色名が対応する結果が得られた。肉眼では明らかに青色を示しているため、測定系に何らかの問題がある可能性もあり、今後検討を要する。

上代裂の色彩は、総じて黄みを帯びた色彩であることが系統色名による分類で明らかである。染色後千年以上の歳月が経過しているため、染料および繊維には相当の劣化が進行していると考えられ、それに伴う変退色も十分に想像できる。したがって、色彩が示す黄みは、この劣化現象による変退色の結果であると考えられる。

当初の色彩をどのように想像するかは人によって異なる。したがって、同じ伝統色名を用いても実際の色彩が異なる場合は当然生じ得る。現在使用される様々な伝統色名によって表現される色彩が、実際の上代裂の色彩と比較してどのような関係にあるのかは今回の測定のみでは十分論じることにはできない。上代裂の色彩は全体に黄みを帯びた色彩であり、例えば現代において臙脂、蘇芳、茜などの伝統色名によって示される色彩はもう少し黄色みのあるものであったかもしれない。時間を遡って色彩を推定するには、今後多くの検討を要する。

## 1. はじめに

国立歴史民俗博物館が所蔵する上代裂帳には、正倉院裂や法隆寺裂などの上代裂20点が収められている。上代裂は、飛鳥時代から奈良時代の7～8世紀にかけて製作された染織資料であり、その多くは正倉院裂と法隆寺裂によって占められている。上代裂の多くは、千年近くの時を経ているにもかかわらず、当初の色彩に近いと思われる状態で染色が保存されている。これは、貴重な資料であるが故にほとんど光が当たらないように保存されてきた結果であろう。こうした上代裂に残された鮮やかな色彩は、飛鳥・奈良時代において嗜好された色彩感覚を辿る上で重要な手がかりを提供するものであることは確かである。

バーリンとケイらによる色彩語の調査では、White, Black, Red, Green, Yellow, Blue, Brown, Purple, Pink, Orange, Gray の11種の色彩語で色を分けている人種は、インドネシア、ブルガリア、中国、スペイン、アメリカ、ハンガリー、韓国、ソビエト、メキシコ、フィリピン、タイ、インド、日本他20カ国の人種にみられると述べている。この中で、ハンガリー語では赤に2種類の用語があり、ロシア語では青に2種類の用語があると報告されている。7, 8世紀の頃の日本人は位階と結び付いた服色制度により、紫、青(緑)、赤、黄、白、黒を各位階に当てはめて使用している。

現在、わが国には蘇芳(すほう)、韓紅花(からくれなる)、真緋(まひ)などといった古代色名あるいは伝統色名と称される色彩を示す名称が数多く存在している。例に挙げた3種の色名が指す色彩はいずれも赤味を帯びた色であるが、その色相、彩度、明るさを系統的に示した系統色(註)[1]名によって表現されるのではなく、個々の色彩を作り出す染料や染料の由来などそれぞれの特色を表した固有色名として表現されている。固有色名による色彩表現は、色彩自体を固有色名を伴って経験した人間だけが共有できる感覚表現である。ところが、同じ名前前の伝統色名(この場合固有色名)で表現される色彩が、色彩を数量的に表現するために用いられる表色系空間で異なる点に位置することがある。例えば、蘇芳については、それが掲載された資料によってマンセル空間における位置は次のように異なる。日本伝統色名事典では 8.4RP4.5/6.7, JIS Z 8102(物体色[2]の色名)では 4R4/7, 色彩科学ハンドブックでは 2.5R3/3 [3][4] となっている。この主たる原因は、蘇芳色に染色された布の色彩が、実際に布を染色した人間の個人的な感覚に依存するものであり、各資料に掲載された値は誰が染色した蘇芳色を用いているかで異なるのである。

本稿では、国立歴史民俗博物館所蔵の上代裂を用いて、そこに現れる色彩の分光スペクトルを実際に測定することにより、それぞれの色彩の物体色名をマンセル表色系に基づいた ISCC—NBS 色名あるいは JIS 色名を用いて表示する。これによって上代裂の色彩を現代の系統色名に対応させ、古代色名とそれが指し示す色彩の関係をより明確なものにすることが目的である。

## 2. 色材の分光スペクトル測定

貴重な歴史資料を損なうことなく、意図とした科学的計測を行うために、実体顕微鏡と分光分析装置をガラスファイバーで接続した装置を用いた。上代裂は製作後千年近くの歳月が経過しているため、絹の劣化が進み極度に脆弱な状態にある。また、染料は保存状態が良好であるので高い彩度を維持しているが、強い光の照射あるいは弱くても長時間の光照射によって容易に退色が進むことが十分に考えられる。よって、色彩の測定のためには資料に対して非接触であり、短時間で分光スペクトル測定が可能な装置が必要である。

測定に用いた装置は、ガラスファイバーで導いた可視光線を含んだ照射光をウィルド製倒立型実体顕微鏡(M-8)を通して被測定物に照射し、反射光を同じ実体顕微鏡を通して、別のガラスファイバーで大塚電子製の分光スペクトル装置(MCPD-110A)に送り分光する。この装置の利点は、実体顕微鏡を用いて光照射および受光を行うために、どのような形状の資料にも適用できることと、顕微鏡の倍率を変化させることによって目的に応じた照射光の面積を得られることである。また、レンズによって収光されるため、比較的弱い光でも測定が可能であることである。

測定条件は、500msecのサンプリングタイムで、20回の積算を行った。従って、光の照射時間は10秒である。光の照射部分は直径3mmの円形とした。スペクトルは400~700nmの波長域で分光し、観測視野2°に基づくXYZ表色系で表した。

## 3. 測定対象となった上代裂の種類

折本形式の上代裂帳には20種の裂が収められているが、この内18種が上代裂と見なされている。それぞれ(1)赤地広東裂(写真1, 2), (2)紅地亀甲花葉文錦裂(写真3, 4), (3)淡茶地夾纈羅裂(写真5, 6, 7), (4)赤地格子蓮花文錦裂(写真8, 9), (5)経錦裂(裏面)(写真10, 11, 12, 13, 14), (6)淡茶地夾纈羅裂(写真15, 16, 17), (7)深茶地朽木形文広東錦裂(写真18, 19), (8)紫地絨裂(写真20, 21), (9)紫地平絹裂(写真22, 23), (10)紫地花唐草文錦裂(写真24, 25), (11)茶地錦裂(裏面)(写真26, 27), (12)青地綾裂(写真28, 29), (13)萌葱地綾裂(写真28, 29), (14)黄地平絹裂(写真30, 31), (15)紫地綾裂(写真32, 33), (16)緑地緯錦裂(写真34, 35), (17)茶地錦裂(写真36, 37), (18)赤地葡萄唐草文綾裂(写真38, 39)である。

各裂には数色の染料が使用されており、それぞれの裂について以下の色彩を持つ糸を確認し、それらに関して分光スペクトルの測定を行った。

(1)赤地広東裂では赤(R)(写真40)、緑(G)(写真41)、黄(Y)(写真42)、青(BI)(写真43)、濃紺、白

- (2)紅地亀甲花葉文錦裂では赤(R) (写真44), 青(BI) (写真45), 白
- (3)淡茶地夾纈羅裂では茶(Br) (写真46), 緑(G) (写真47)
- (4)赤地格子蓮花文錦裂では赤(R) (写真48), 緑(G) (写真49), 黄(Y) (写真50), 青(BI) (写真51), 白
- (5)経錦裂 (裏面) では赤(R) (写真52), 緑(G) (写真53), 黄(Y) (写真54), 青 (BI) (写真55)
- (6)淡茶地夾纈羅裂では茶(Br) (写真56), 緑(G) (写真57)
- (7)深茶地朽木形文広東錦裂では赤(R) (写真58), 茶(Br) (写真59)
- (8)紫地絨裂では茶(Br) (写真60)
- (9)紫地平絹裂では茶(Br) (写真61)
- (10)紫地花唐草文錦裂では緑(G) (写真62), 青, 紫
- (11)茶地錦裂 (裏面) では茶(Br) (写真63), 黄(Y) (写真64), 白
- (12)青地綾裂では青(BI) (写真65)
- (13)萌葱地綾裂では緑(G) (写真66)
- (14)黄地平絹裂では黄(Y) (写真67)
- (15)紫地綾裂では茶(Br) (写真68)
- (16)緑地緯錦裂では緑(G) (写真69), 黄(Y) (写真70)
- (17)茶地錦裂では茶(Br) (写真71), 緑(G) (写真72), 黄, 緑, 青
- (18)赤地葡萄唐草文綾裂では赤(R) (写真73)

#### 4. 測定結果

各色彩の分光スペクトル (図1), XYZ 表色系による XYZ および xy の値 (表1), XYZ 表色系による色度図上での位置 (図2) を示す。

表1 上代裂に見られる色彩の XYZ 表色系における X, Y, Z, x, y の値

裂 名 称	色彩	X	Y	Z	x	y
(1) 赤地広東裂	赤	10.281	7.721	4.222	0.4626	0.3474
	緑	5.468	5.509	3.877	0.3681	0.3709
	黄	15.042	13.286	5.694	0.4421	0.3905
	青	6.684	6.981	7.068	0.3224	0.3367
(2) 紅地亀甲花葉文錦裂	赤	12.377	8.836	4.574	0.4799	0.3427
	青	6.683	7.005	7.356	0.3228	0.3383
(3) 淡茶地夾纈羅裂	茶	21.597	19.920	11.512	0.4073	0.3756
	緑	16.256	17.472	11.071	0.3629	0.3900
(4) 赤地格子蓮花文錦裂	赤	12.878	9.622	5.394	0.4617	0.3450
	緑	9.476	9.906	6.671	0.3637	0.3802
	黄	18.096	16.538	6.545	0.4392	0.4016
	青	8.286	8.648	7.356	0.3411	0.3560



裂 名 称	色彩	X	Y	Z	x	y
(5) 経錦裂（裏面）	赤	21.029	18.486	8.357	0.4393	0.3862
	緑	20.779	22.376	12.920	0.3706	0.3990
	黄	26.475	27.258	9.828	0.4165	0.4289
	青	14.730	16.175	12.693	0.3379	0.3710
(6) 淡茶地夾纈羅裂	茶	15.591	13.343	6.384	0.4415	0.3778
	緑	21.402	22.863	10.698	0.3894	0.4160
(7) 深茶地朽木形文広東錦裂	赤	11.009	8.845	8.845	0.4856	0.3901
	茶	4.051	3.793	3.793	0.4065	0.3807
(8) 紫地皺裂	紫	5.741	4.489	2.449	0.4528	0.3540
(9) 紫地平絹裂	紫	6.510	5.607	2.609	0.4421	0.3808
(10) 紫地花草文錦裂	緑	16.049	16.801	6.454	0.4083	0.4275
(11) 茶地錦裂（裏面）	茶	8.048	7.046	3.450	0.4340	0.3800
	黄	21.115	20.293	7.360	0.4330	0.4161
(12) 青地綾裂	青	6.195	7.208	9.530	0.2701	0.3143
(13) 萌葱地綾裂	緑	16.049	18.692	6.890	0.3855	0.4490
(14) 黄地平絹裂	黄	21.930	20.951	6.286	0.4460	0.4261
(15) 紫地綾裂	紫	6.191	5.542	3.587	0.4041	0.3618
(16) 緑地緯錦裂	緑	13.175	15.160	7.563	0.3670	0.4223
	黄	20.768	21.386	7.168	0.4211	0.4336
(17) 茶地錦裂	緑	10.361	10.447	4.121	0.4156	0.4191
	紫	6.676	6.197	3.165	0.4163	0.3864
(18) 赤地葡萄唐草文綾裂	赤	10.278	7.232	2.489	0.5139	0.3616

## 5. 各色彩の系統色名

物体の色は物体から反射される光の色である。この反射光は心理物理色であり、その分光スペクトルを測定すれば、CIE 表色値（XYZ 表色系）として視感反射率（Y）と色度座標（x, y）とによって表すことができる。ただし、物体の表面は光沢のないものであるとする（拡散性反射物体）。一方、物体の表面を直接肉眼で観察する場合には、物体の色は知覚色として捉えられる。知覚色とは、脳の知覚中枢における反応としての色である。この知覚色には人間の経験を通じた色名が付けられている。

心理物理色は、マンセル色票系によって知覚色と関連づけられているため、色度座標（x, y）上で知覚色としての色とそれに対応する色度の領域を示すことができる。図3はY=6.555%（明度V=3）の場合の色名と色度図との関連を示したものである。色彩の明度が変化すれば知覚色は著しく変化するため、色度座標が同じであっても、明度によって色度図上の色名は変化する。図で用いた色名はISCC—NBS色名（米国 Inter-Society of Colour Council と National Bureau of Standard）であり、マンセル色票集に基づいて検討されたものである。

色名は、基本色名として White, Black, Red, Green, Yellow, Blue, Brown, Purple, Pink,

表2 上代製に見られる色彩の ISCC—NBS 色名と JIS 物体色名

色 彩	裂 名 称	ISCC—NBS 色名	JIS 物体色
赤	(1) 赤地広東裂	moderate reddish Brown	くすんだ 暗い こい } 黄赤
	(2) 紅地亀甲花葉文錦裂	moderate reddish Brown	
	(4) 赤地格子蓮花文錦裂	moderate reddish Brown	
	(5) 経錦裂(裏面)	moderate Brown	
	(7) 深茶地朽木形文広東錦裂	moderate Brown	
	(18) 赤地葡萄唐草文綾裂	moderate reddish Brown	
茶	(3) 淡茶地夾纈羅裂	moderate yellowish Brown	くすんだ 暗い こい } 黄赤
	(6) 淡茶地夾纈羅裂	moderate Brown	
	(7) 深茶地朽木形文広東錦裂	dusky Brown	
	(8) 紫地緞裂	dark Brown	
	(9) 紫地平絹裂	dark Brown	
	(11) 茶地錦裂(裏面)	moderate Brown	
	(15) 紫地綾裂	dusky Brown	
緑	(1) 赤地広東裂	dusky olive Green	くすんだ 暗い } 黄緑
	(3) 淡茶地夾纈羅裂	weak olive Green	
	(4) 赤地格子蓮花文錦裂	weak olive Green	
	(5) 経錦裂(裏面)	light Olive	
	(6) 淡茶地夾纈羅裂	light Olive	
	(10) 紫地花唐草文錦裂	moderate Olive	
	(13) 萌葱地綾裂	moderate Olive	
	(16) 緑地緯錦裂	moderate olive Green	
	(17) 茶地錦裂	moderate Olive	
黄	(1) 赤地広東裂	moderate yellowish Brown	こい赤みの こい } 黄
	(4) 赤地格子蓮花文錦裂	moderate yellowish Brown	
	(5) 経錦裂(裏面)	light olive Brown	
	(11) 茶地錦裂(裏面)	moderate olive Brown	
	(14) 黄地平絹裂	moderate olive Brown	
	(16) 緑地緯錦裂	light olive Brown	
青	(1) 赤地広東裂	olive Gray	
	(2) 紅地亀甲花葉文錦裂	olive Gray	
	(4) 赤地格子蓮花文錦裂	olive Gray	
	(5) 経錦裂(裏面)	weak olive Green	
	(12) 青地綾裂	dusky Blue Green	

Orange, Gray, Olive, 修飾語として light, pinkish, bluish, medium, moderate, reddish, strong, brownish, orange, very, dusky, vivid, dark, olive, weak, greenish, purplish, yellowishが用いられる。スペクトル測定から得られた各色のY値および(x, y)座標値に対応する ISCC—NBS 色名はおおよそ表2のようになる。

青色に関して、(12)青地綾裂が dusky Blue Green という系統色名になる以外は、(1)赤地広東裂、(2)紅地亀甲花葉文錦裂、(4)赤地格子蓮花文錦裂、(5)経錦裂(裏面)など総てが olive Gray という色名となり、青色を感じさせない名称となる。実際の肉眼観察では青色に感じる部分であ

り、把握される色彩感覚とは異なる系統色名が得られた。赤色に関しては、比較的鮮やかな赤として観察される(1)赤地広東裂、(2)紅地亀甲花葉文錦裂、(4)赤地格子蓮花文錦裂、(13)赤地葡萄唐草文綾裂は **moderate reddish Brown** という系統色名であり、やや茶色が強く感じられる(5)経錦裂(裏面)、(7)深茶地朽木形文広東錦裂は **moderate Brown** という系統色名になる。茶色の中でも比較色赤紫に感じられた(8)紫地緞裂、(9)紫地平絹裂、(13)紫地綾裂、(17)茶地錦裂は **dark Brown, dusky Brown** という比較的暗い茶色系の系統色名となり、紫を帯びない茶色に観察される(3)淡茶地夾纈羅裂、(6)淡茶地夾纈羅裂、(7)深茶地朽木形文広東錦裂、(11)茶地錦裂(裏面)は **moderate yellowish Brown, moderate Brown, dusky Brown** となり、紫を帯びた茶と変わらない。緑色については **olive Green** あるいは **Olive** といった色彩に集中している。黄色は **yellowish Brown** と **olive Brown** である。

JIS が規定する物体色名に対応させた系統色名も表 2 に示した。物体色名が示す領域をマンセル表色系において表すと図 4 のようになる。楕円で表示された伝統色名は、それが示すおよその位置である。斜線で表示した領域が本測定によって、上代裂の色彩が示すおよその領域である。

## 6. ま と め

上代裂に残る色彩の分光スペクトル測定により、各色彩の系統色名による分類を試みた。各色彩は **Brown** (黄赤)、**Olive** (黄緑) の基本色名によってほとんどが表示される。青色に関しては、1 点を除き **Gray** (灰) の基本色名が対応する。肉眼では明らかな青色を示しているため、測定系に何らかの問題がある可能性もあり、今後検討を要する。

上代裂の色彩は、総じて黄色みを帯びた色彩であることが系統色名による分類で明らかである。染色後千年以上の歳月が経過しているため、染料および繊維には相当の劣化が進行していると考えられ、それに伴う変退色も十分に想像できる。したがって、色彩が示す黄色みは、この劣化現象による変退色の結果であると考えられる。

当初の色彩をどのように想像するかは人によって異なる。したがって、同じ伝統色名を用いて表示してもその色彩が異なる場合は当然生じ得る。現在使用される様々な伝統色名によって表現される色彩が、実際の上代裂の色彩と比較してどのような関係にあるのかは今回の測定のみでは十分なことは論じられない。なぜなら、時間の経過による劣化現象が存在しているため、色彩の復元が困難であるからである。上代裂の色彩は全体に黄色みを帯びた色彩であり、現代において麝脂、蘇芳、茜などによって示される色彩はもう少し黄色みのあるものであったかもしれない。今後多くの検討を要する。

## 註 色名についての解説

〔色名小事典（日本色彩研究所監修，日本色研事業株式会社＜1981＞）より抜粋〕

### 1 色名の使われ方

#### (1) 色名による色彩の指定

色彩の表現では，色をいくつかのブロックとしてまとめてとらえる習慣がある。色を言い表す言葉を探し，それによって，群としてとらえる色を言い分けている。

色彩語がどのように発達してきたかを人類学の立場から，各人種のもっている色彩語を調べ，それと文化の発達程度などに対比してみせた研究がある。それは人類学者のバーリンとケイらが世界中の98種の人種言語について調べた結果，色彩語の発達の過程は次のようになっているという。

			Purple
Black	→ Green → Yellow →		Pink
	→ Red	Blue → Brown →	
White	→ Yellow → Green →		Orange
			Gray

ニューギニアや，アフリカの土着の住民など21種の人種では，White, Black, Redにあたる言葉しかもっていない。

ではこれらの人種は色盲かというそうではなく，彼らの装飾を見ればよくわかる。ただ色を言い分ける言葉をもっていないだけである。彼らの生活環境では色を言い分ける必要が余りなかったのであろう。

つぎに Green, Yellow, Blue, Brown にあたる言葉が加わって，7種の色彩語をもっている人種はジャワ，スマトラなどの土着の住民にみられる。もっと文化程度の高い人種では，さらに Purple, Pink, Orange, Gray にあたる色彩語が加わり11種の色彩語で色を分けている。この程度の色彩語を一般に用いている人種はインドネシア，ブルガリア，中国，スペイン，アメリカ，ハンガリー，韓国，ソビエト，メキシコ，フィリピン，タイ，インド，日本他20カ国の人種にみられる。この中で，ハンガリー語では赤に2種類の用語があり，ロシア語では青に2種類の用語があると報告されている。

これらは普通一般の人々を対象に調べたものであって，一般的にみてこの程度の言葉で色を分けているという実体を示している。使う色名は生活環境によって違って来るもので，エスキモーは白についていくつかの言葉で言い分けできるという。色彩に関係する仕事をする人や，色彩に特に関心をもっている人なら，もっと多くの色名をもっていることは言うまでもない。日本では古くから染色に紅や藍が用いられていたから，紅と赤，藍と青を言い分ける人も多い。

「ISCC—NBS」(Inter-Society of Colour Council と National Bureau of Standard) の色名分類の方法では，英語人種が用いる基本的色名としては，バーリン，ケイらがあげた11種の色名の他に，Olive と Violet を加えて13種としている。この基本的色名は色を類概念としてとらえる場合の色名である。

われわれが，観察の最適条件のもとで，見分けることが出来る光の色の数は，約10,000,000程度であるといわれているが，物体の色はこれよりもはるかに少ない。実用的には数百種ほどの色名によって，色を区別することができれば十分であると考えられている。ISCC—NBS の色名は物体色の色名を，約300のブロックに分割して，それぞれのブロックに色名をあてはめたものである。

			Purple
Black	→ Green → Yellow →		Pink
	→ Red	Blue → Brown →	
White	→ Yellow → Green →		Orange
			Gray
			Olive
			Violet

#### (2) 色の形容

色を形容するのに赤い，青い，黄いろいとは言いが，“緑い”，“紫い”などとは言わず，“緑っぽい”，“紫っぽい”または“緑みの”，“紫みの”である。英語なら reddish, yellowish, greenish, bluish, purplish, pinkish, brownish と形容する。基本的色名は色相の形容詞に派生して使われることが多い。

色を細かく言い表そうとするときは，色相の形容詞とトーンの形容詞を基本的色名につけて色を言い表

すことを、人々は日常の会話の中でも行っている。例えば黄みの赤、緑みの黄色、濃い紫、うすい緑、明るい赤みの青などという言い方をすれば、多くの色名を知らなくとも色を相手に伝えることが可能である。類概念としての色の伝達を細かくするために、このように基本的色名に色相の形容詞とトーンの形容詞をつけて呼ぶ呼び方によれば、色の系統に基づいて色をシステムティックに呼び分けることができるもので、この種の色名を系統色名 (systematic colour names) という。

### (3) 個々の色を呼ぶ色名

色を類概念としてではなく、個々の色としてとらえることもある。顔料、染料などの着色材に関係ある分野では、着色材料からきた色が多く用いられる。日本の色名には、草木染の伝統から、その材料となった植物のなかから来た色名が多く、また岩絵具などの顔料からきた色名もある。

無機化学や有機化学合成によって作られる今日の色料には、その成分を表す名がつけられているものがあるが、それらは色名というよりは成分名であるから、一般の人にはその名を聞いても色が想像できにくい。

それに対して、植物、動物、鉱物の状態色や自然現象の色からきた色名や生活の中の人工物の名からきた色名が多く用いられるのは、それらが多くの人の目に親しまれていて、その名から色が想像しやすいからである。また人物名や地名や抽象的な名をつけた色名もある。これらの色名はいろいろな物の名を借り、またいろいろな言葉を用いて、その連想によって色のイメージを伝えようとするもので、それらが人々の間で慣用されているうちに、あたかもその色の固有の名であるかのように、色と色名とが密着してきているものを固有色名 (individual colour names) という。

## 2 色名の2つの役割

私たちは情報をとらえ、伝えるための手段として言葉や文字を用いることを知っている。色彩のような感覚的な事柄の伝達は言葉や文字では正確に伝えるににくいこともあるので、直接視覚に訴えかけるのがよい訳であるが、それができにくいときには、言葉や文字を用いる。直接色で見せるときでも、色名をつけることによって色のイメージ内容をはっきりと相手に伝えることができる。色は主観的に受けとられ易いものなので、色単独では感覚的情報内容を的確に伝えるににくい、色が造形と結びついたり、色が言葉と結びついたりするとき、その情報内容はある程度限定されてくるので、情報伝達の機能を持つようになる。

色名は情報の伝達機能上からいって2つの主な役割をもっていると考えられる。1つは色の分類指示 (系統色名) ということと、他の1つは色のイメージ内容の伝達 (固有色名) ということである。

### (1) 色名の組立て

各種の色名をその組立ての上からみると、多くは次のような語形になっている。

#### ① トーンの形容詞あるいは色相の形容詞

+

#### ② イメージ連想語

+

#### ③ 基本的色名 (黒、白、赤、黄、緑、青、茶、紫、桃色、橙色、灰色)

例えば bright peacock green, deep amaranth purple の色名で、後段の③にあたる green や purple の語は基本的色名であり、前段の①にあたる bright や deep の語はトーンの形容詞であり、中段の②にあたる語は色のイメージを引き出す連想語ということができる。これら①②③の語が組合され各種の色名ができていく。③の基本的色名と①の形容詞との組合せからなっている色名、例えば bright green, deep purple は系統色名であり、②のイメージ連想語が抜けた形になっていて、それだけに無味乾燥な名となっているけれども、色の分類指示という点では、これらの名は色の系統を確実に差し示すことができ有効である。

②のイメージ連想語が主となる色名が固有色名である。例えば、ruby, apricot, 青磁色、鳶色 (茶)、鼠色、狐色、鶯色、鶺鴒など②の語だけでそのまま色名となっているものもあるし、①+②のかたちで light apricot, さび青磁などと呼ぶこともある。②+③の語形をなしているものもある。peacock とだけいっても孔雀の羽根はいろいろな色を呈するから green とか blue をつけないとわからないという場合に②+③のかたちをとる。さらに①+②+③のかたちをとるものもある。amaranth は伝説中の仮想の花で、一年中枯れることのない赤紫の花をいうが、その語だけではどのような色をいうのかわからないので、トーンの形容と基本色名とを組合せているわけである。

### (2) イメージ伝達のための色名

例えば同じような色を、チャコールグレイといった場合と、どぶ鼠色といった場合とでは受け取られる

イメージは大変に違ってくる。色を見てそれから受け取れるイメージは様々で、それは人によって異なるだろうし、また時と場合によっても異なるだろう。それを固有色名のイメージ連想語によって、その色のイメージ内容のある程度限定して伝えることができるわけである。

固有色名は個々の色を指示するという役割もちろんあるが、その名前から色のイメージが伝えられてくるところに、固有色名としての捨て難い役割がある。

ファッション関係の分野ではなるべく目新しい名を望むことから、空想物の名やフィーリングを表現するような抽象語を色名としたものが用いられることがある。例えば、abstract blue, aesthetic blue, classic blue, dream blue などみな blue で、どのような blue であるかということはさして問題ではなくて、その言葉の持つフィーリングを前に押し出している色名である。

日本の色名にはこういう抽象語や空想的なものからきた色名は少ないが、その代わりに色名をイメージシンボルとして用いる独特な用い方があった。それは平安時代に現れた「襲の色目」(かさねのいろめ)の名称である。

平安中期から貴族女性の服装には襲装束という形式が用いられ、重ね着の襟や広袖や裾にみられる重ねの配色に美しさを競い合い、その配色にいろいろな名をつけて、その配色のイメージを伝えているのが襲の色目の名称である。

これらの名は、和歌の発想と同じく、花や草木や自然現象の名を季節と結びつけて用いたもので、この名称は日本の伝統色名の中に引き継がれて残っている。

### (3) 系統色名のシステム

色名には系統色名と固有色名とがあることと、それぞれの主な役割について触れてきたが、系統色名は、数少ない基本的色名を基にして数多くの呼びかたができるように、システムティックに組立てられた色名である。

色の表示の方法は、各種の色彩体系によって考えられており、表色体系の色記号で表示すれば、色の世界は約1000種から5000種くらいに細かく分けて表示することができる。しかし、人々は日常そんなに細かい色のとらえかたをしているわけではなく、もっと大まかなとらえかたで色を伝達し合っているものだから、大まかでもそれなりに確実な色の伝達ができればよいわけである。そこで系統色名による色の分類表示の方法が考えられる。例えば企業内でマーチャンダイザーとセールスマンとの間の色の伝達や、セールスマンと顧客との間の伝達には、専門的な色記号表示では通じにくいので、誰にもわかりやすい色名レベルでの伝達が必要となる。

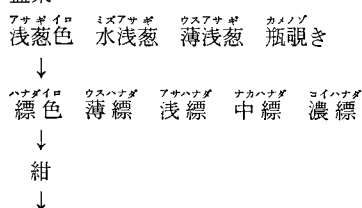
色彩の活用が盛んになるにつれて、各企業では、色彩傾向全体の移り変わりや各商品別の色彩傾向や、色の好みに関しての実体を調査し、そのデータを基にして商品色彩計画を立てることになる。その場合に、どのように色をブロック別にまとめて、調査、集計、分析をし、その結果をどのように伝達するかということが問題になるが、それには系統色名による分類方法が一番適当であるという考えから、系統色名システムが調査用に利用されるようになった。色名の呼びかたにもシステム化が考えられるはずだが、系統色名システムはそれを実現させた。色記号や数値で色を表示するものをハードなカラーシステムとすれば、これはソフトなカラーシステムといえる。

### 3 固有色名の解説について

固有色名はいろいろな分野から色々な機会に発生してきているから、全体としては必ずしも脈絡のあるものではないが、しかし全くばらばらなものでもなく、色名と色名との間にはおのずから相互関係がみられる。

例えば、藍染で薄く染めると色相は緑みに傾いて、浅葱色と呼ばれ、その中でもトーンの違いによって水浅葱、薄浅葱、瓶覗という名で呼ばれる。濃く染めると色相は紫みに傾き、紺、濃紺、と呼ばれる。その中間の位置に縹色(はなだいろう)があるわけで、これもトーンの違いによって薄縹、浅縹、中縹、濃縹などの名で呼ばれる。

#### 藍染



濃紺

紅染め

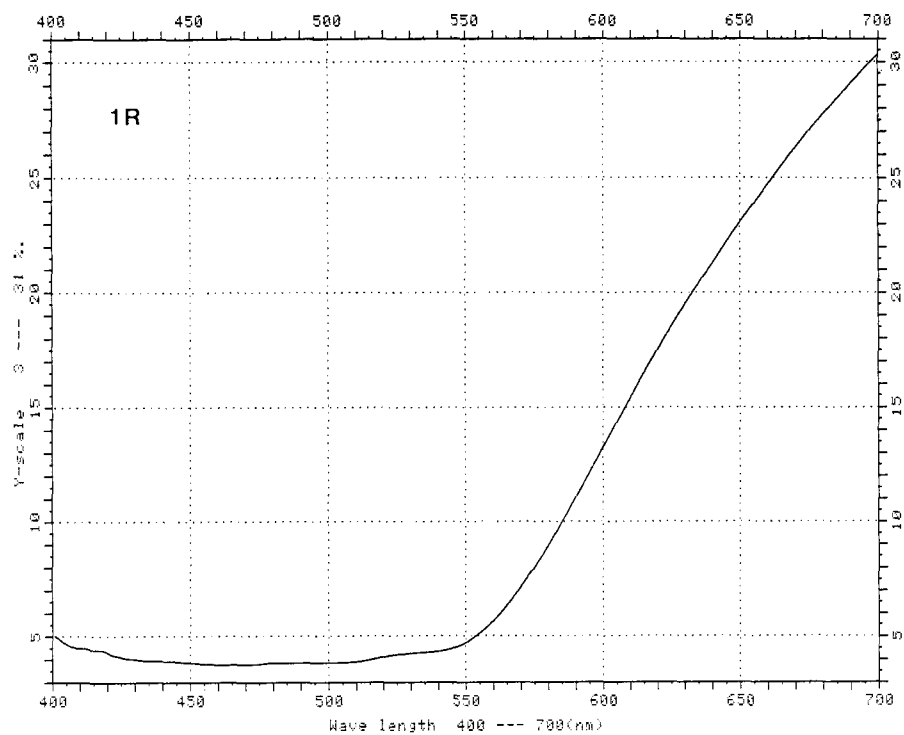
ロイベニ ベニイロ コウバイイロ ウスコウバイ ウスベニ イッコソゾメ サクライロ  
濃紅 紅色 紅梅色 薄紅梅 薄紅 一斤染 桜色

#### 参考文献

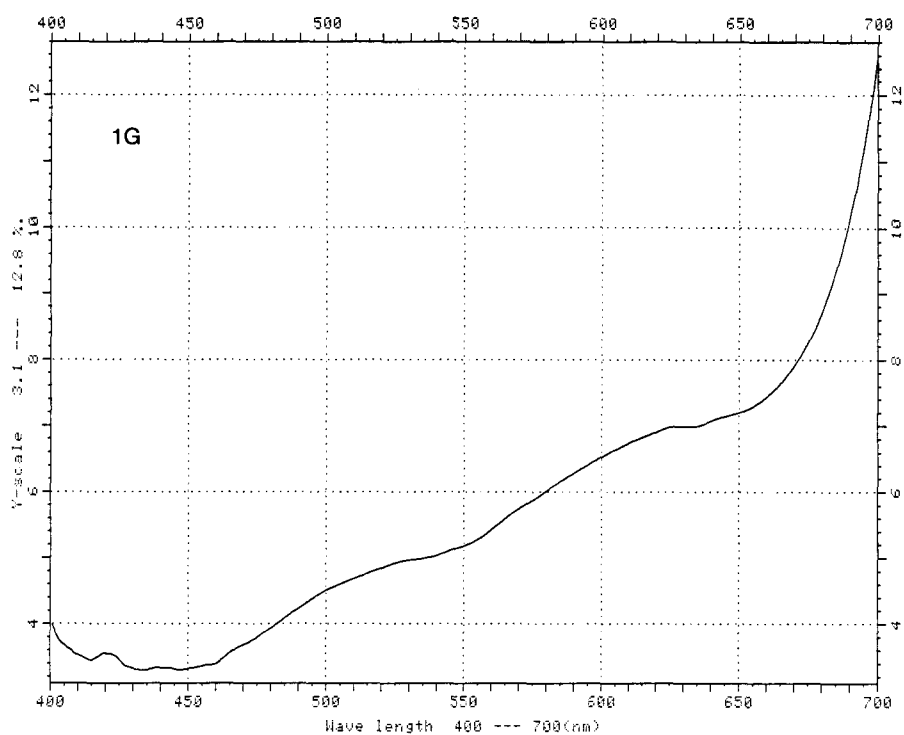
- 〔1〕 日本色彩研究所監修：色名小事典，日本色研事業株式会社（1981）
- 〔2〕 日本流行色協会監修：日本伝統色名事典，日本色研事業株式会社（1984）
- 〔3〕 JIS Z 8102：物体色の色名，日本規格協会（1985）
- 〔4〕 日本色彩学会編：色彩科学ハンドブック，南江堂（1962）

（国立歴史民俗博物館情報資料研究部）

図1 上代裂に見られる各色彩の分光スペクトル

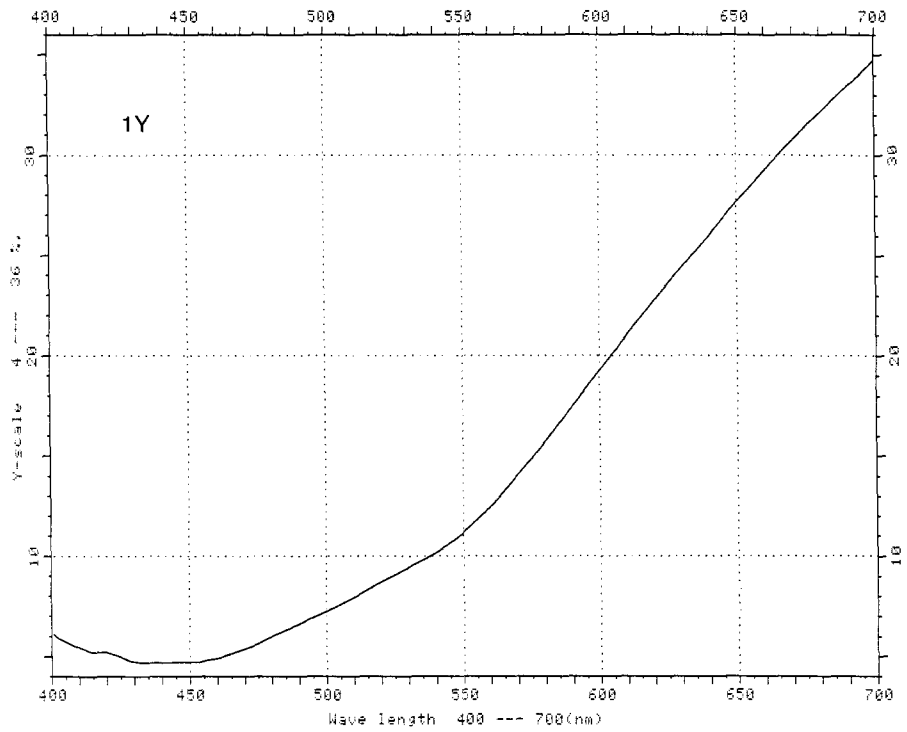


1-1 (1)赤地広東裂の赤 (1R)

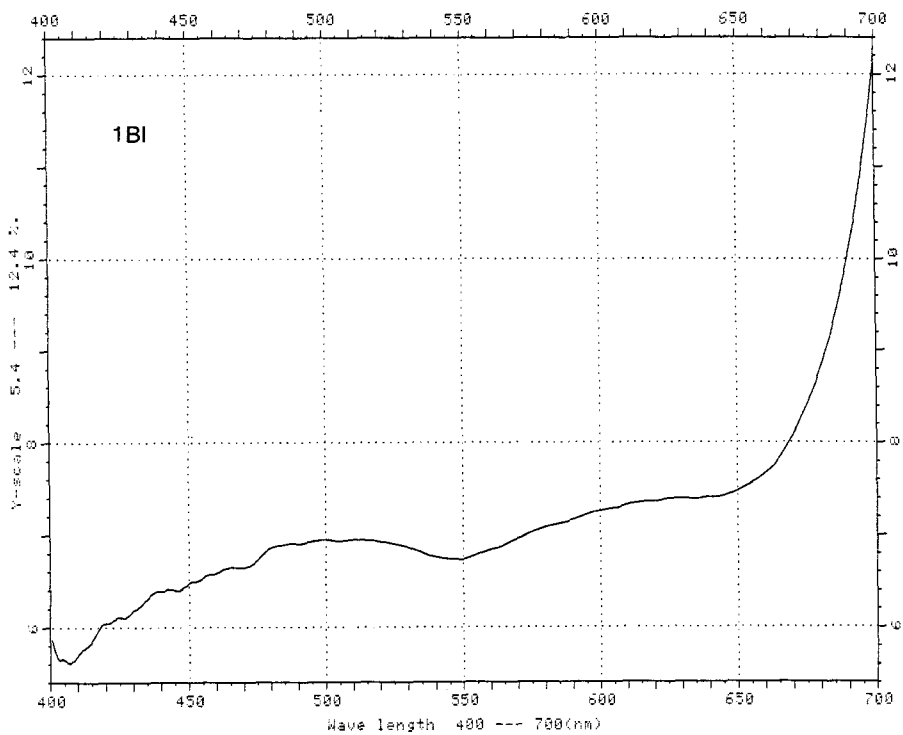


1-2 (1)赤地広東裂の緑 (1G)

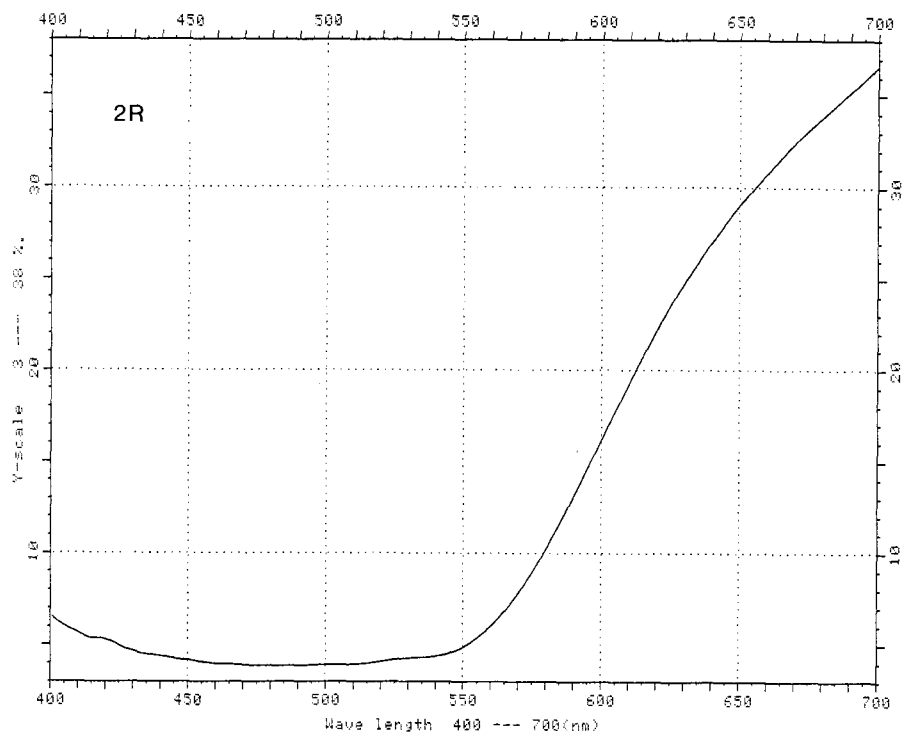




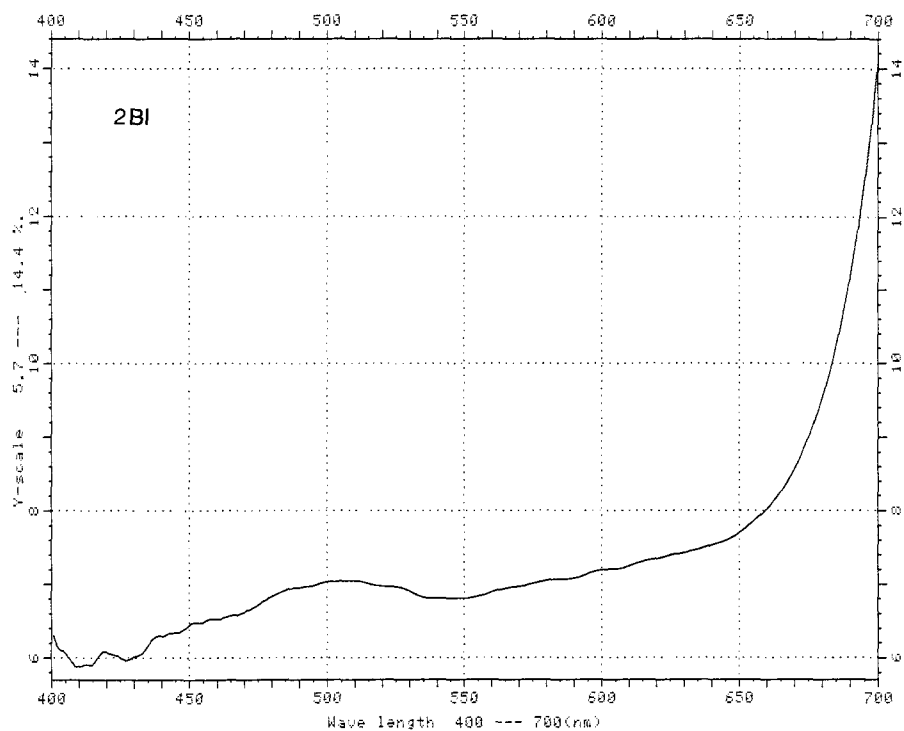
1—3 (1)赤地広東裂の黄 (1Y)



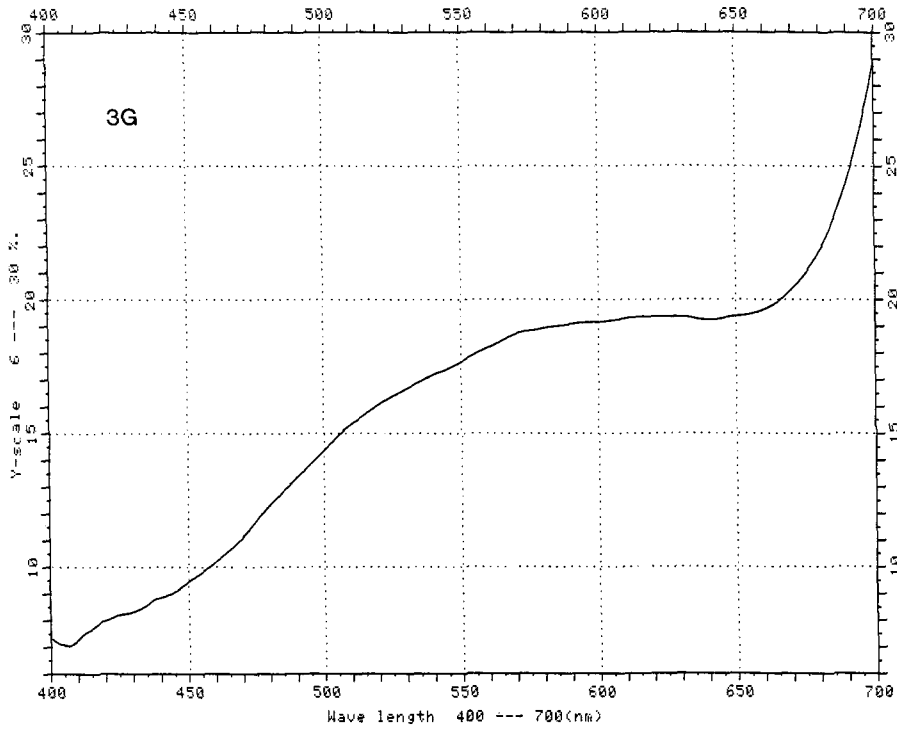
1—4 (1)赤地広東裂の青 (1Bl)



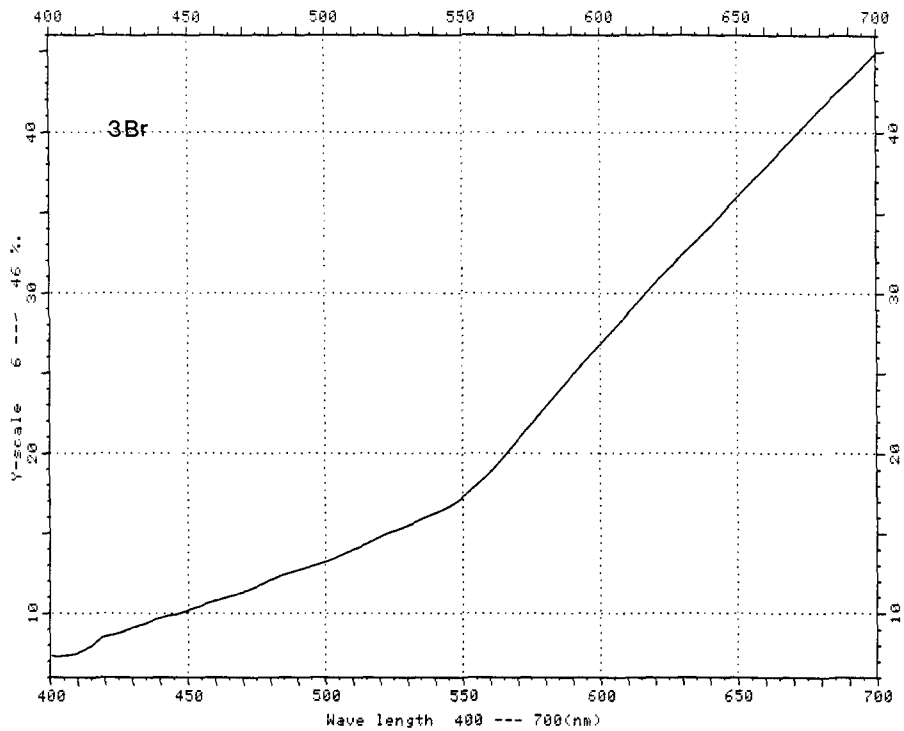
1—5 (2)紅地亀甲花葉文錦裂の赤 (2R)



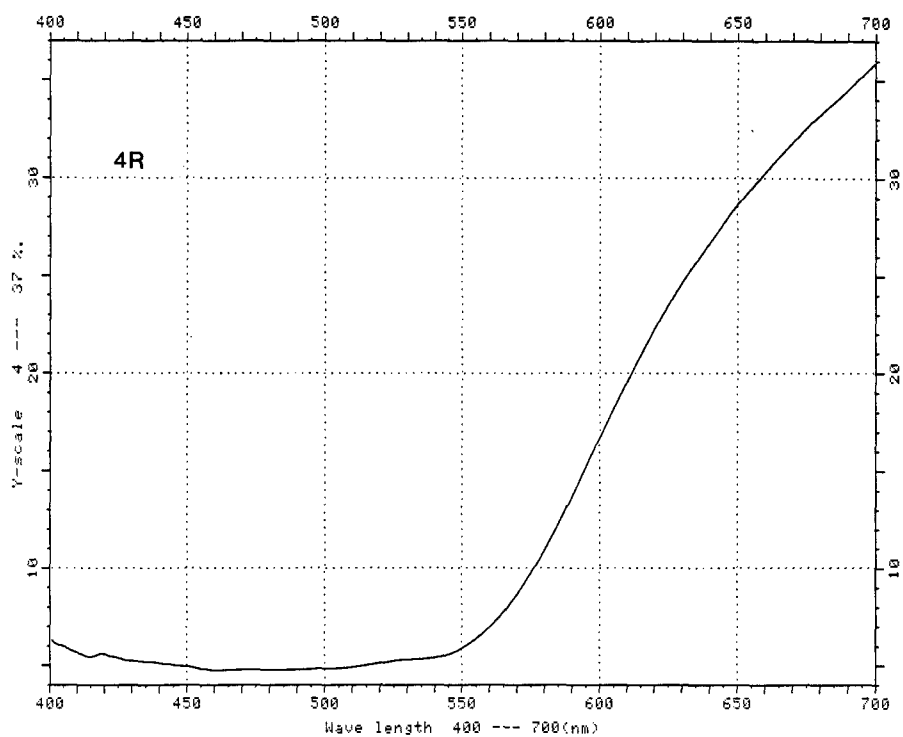
1—6 (2)紅地亀甲花葉文錦裂の青 (2BI)



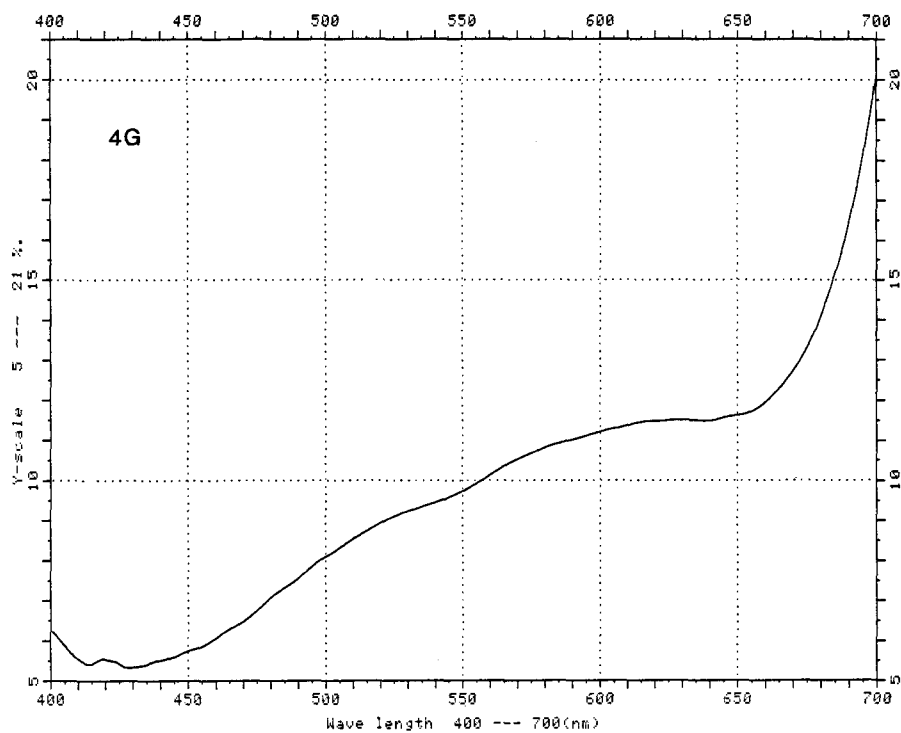
1—7 (3)淡茶地夾纈羅裂の緑 (3G)



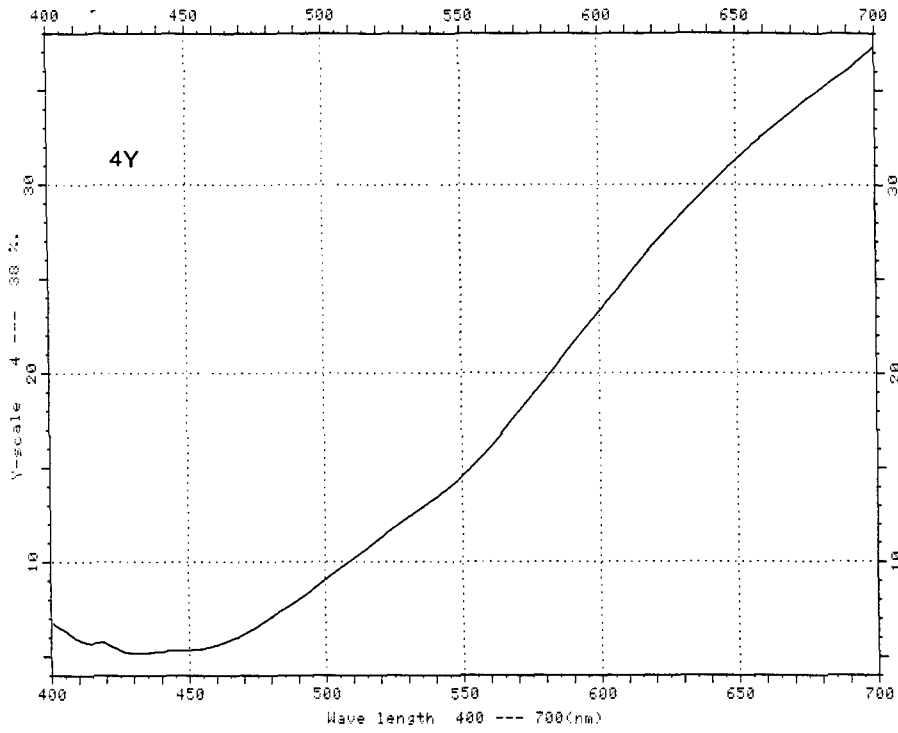
1—8 (3)淡茶地夾纈羅裂の茶 (3Br)



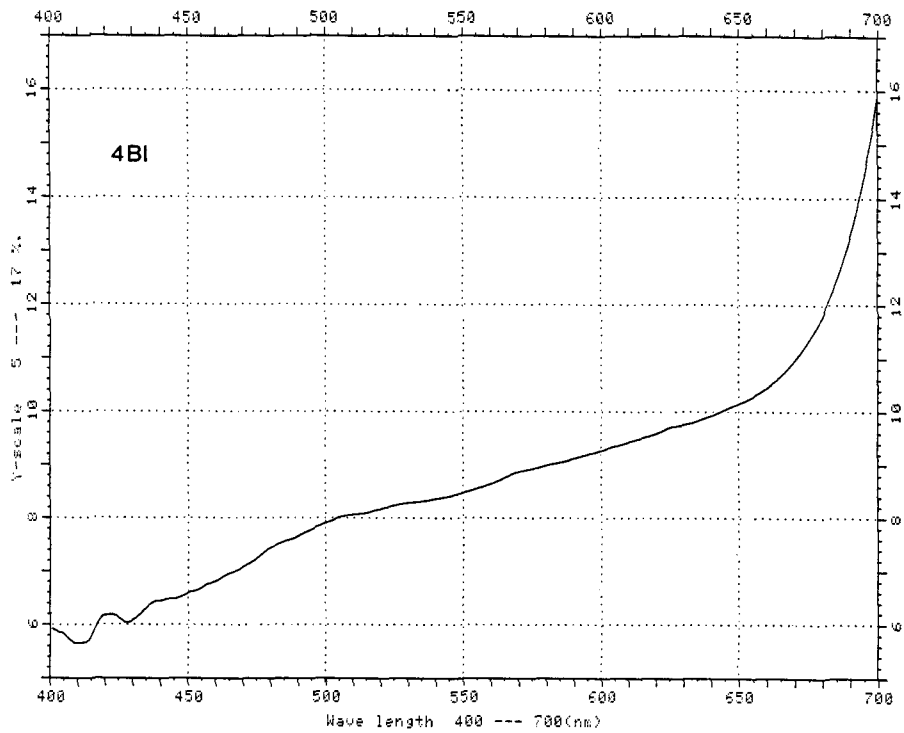
1-9 (4)赤地格子蓮花文錦裂の赤 (4R)



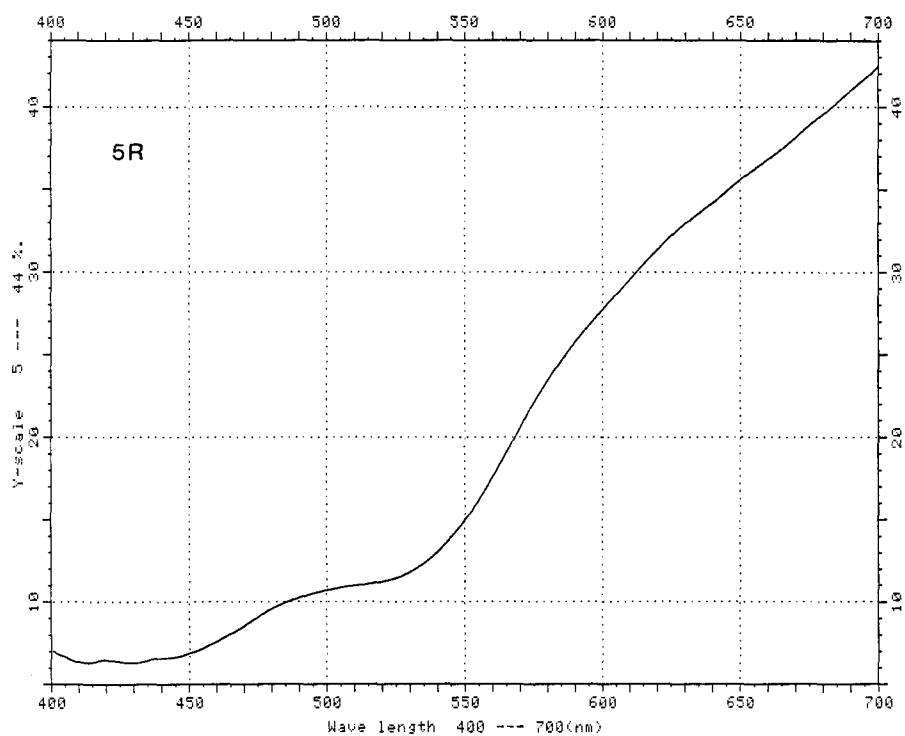
1-10 (4)赤地格子蓮花文錦裂の緑 (4G)



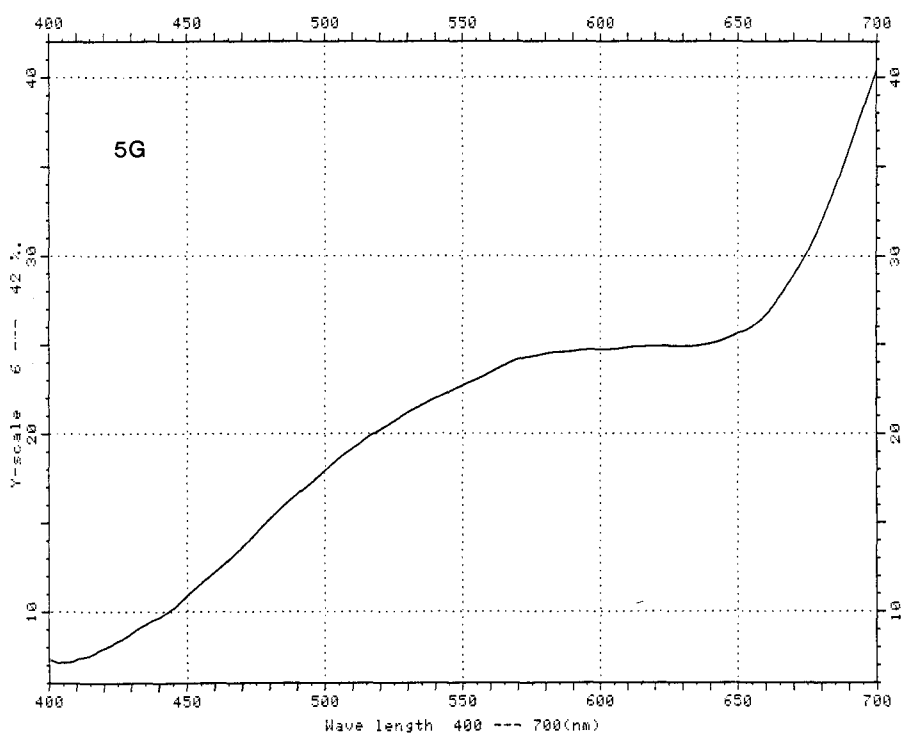
1-11 (4)赤地格子蓮花文錦裂の黄 (4Y)



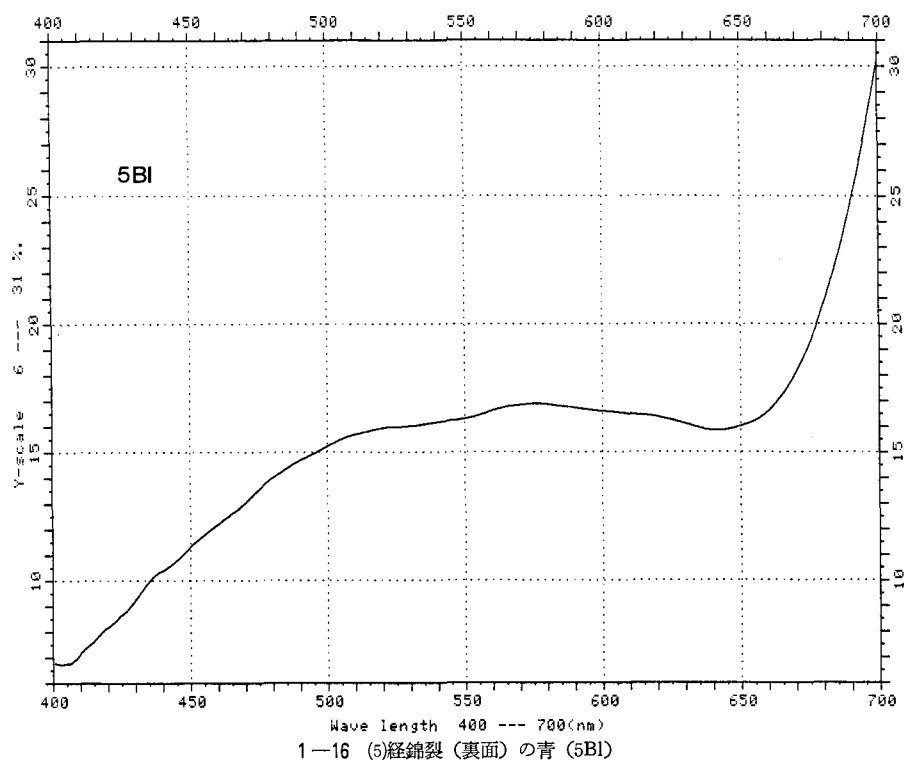
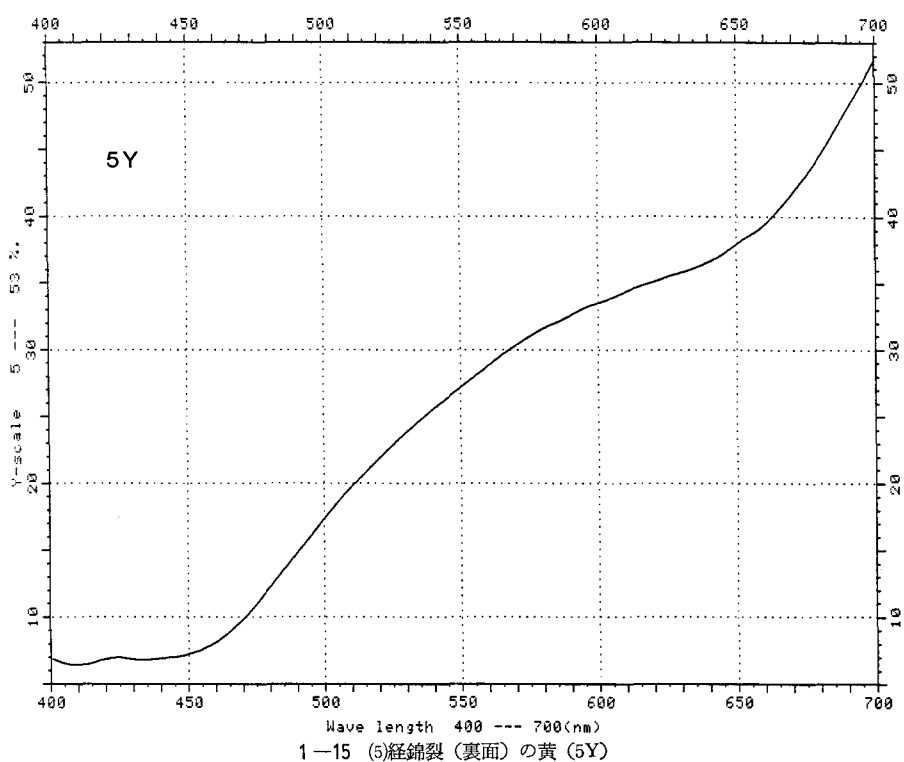
1-12 (4)赤地格子蓮花文錦裂の青 (4BI)

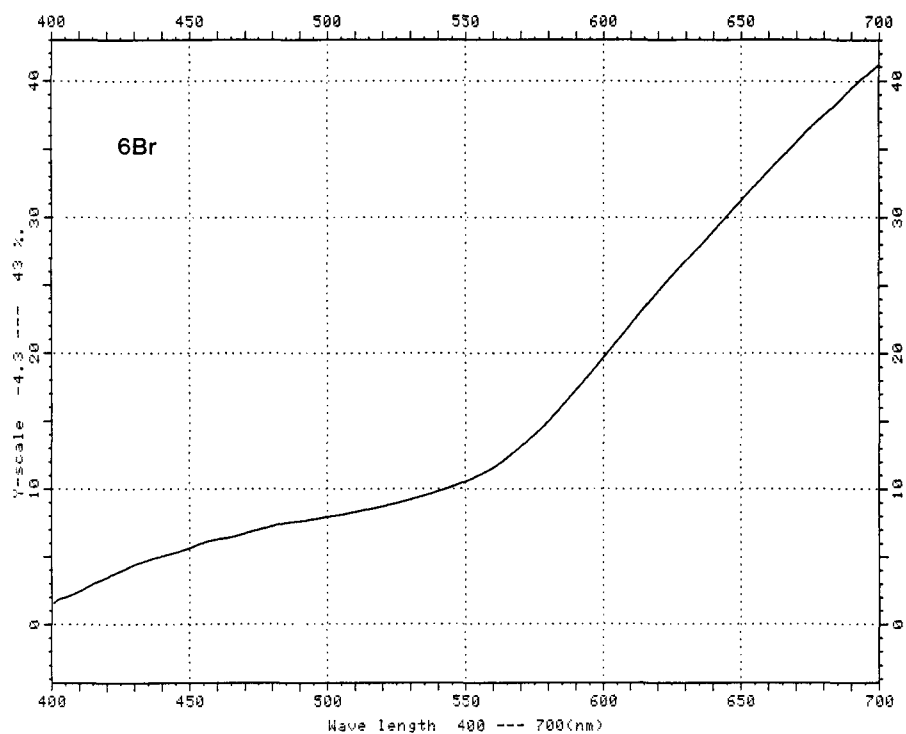


1-13 (5)経錦裂(裏面)の赤 (5R)

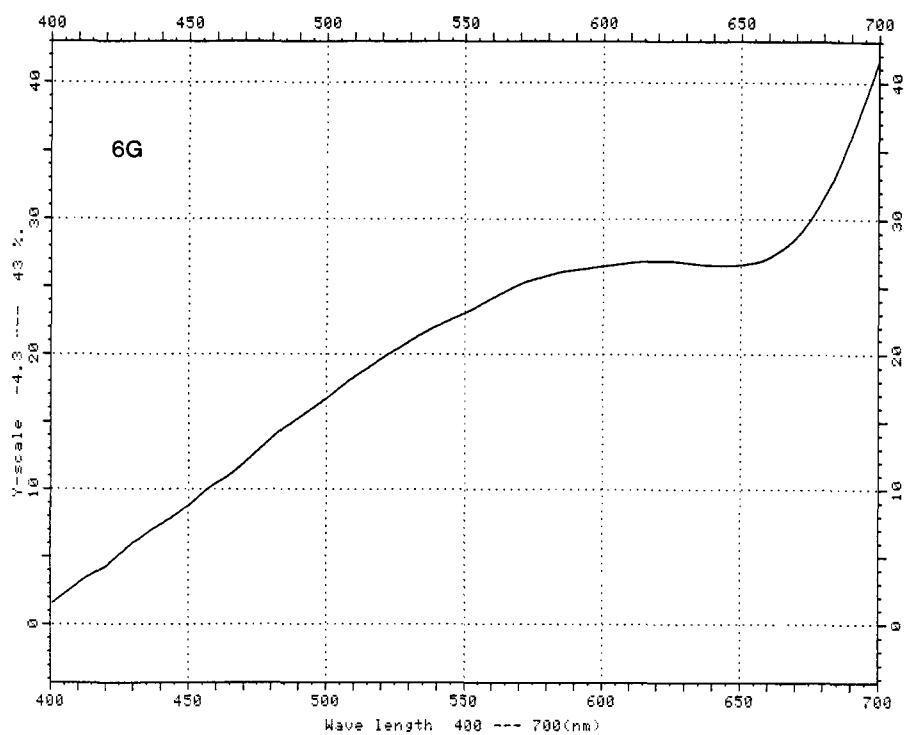


1-14 (5)経錦裂(裏面)の緑 (5G)



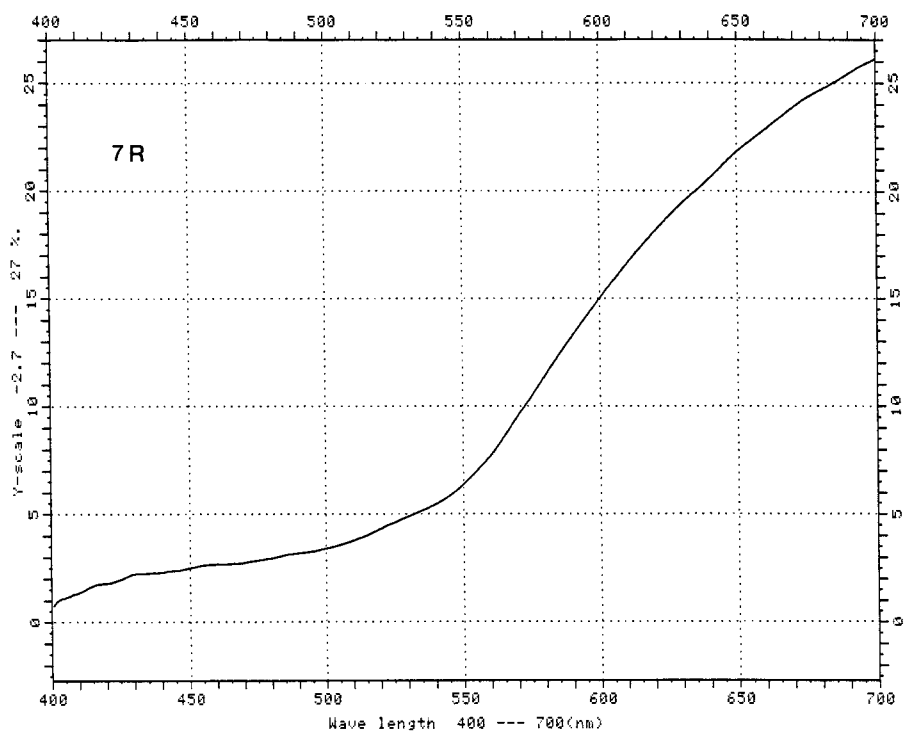


1-17 (6)淡茶地夾縹羅裂の茶 (6Br)

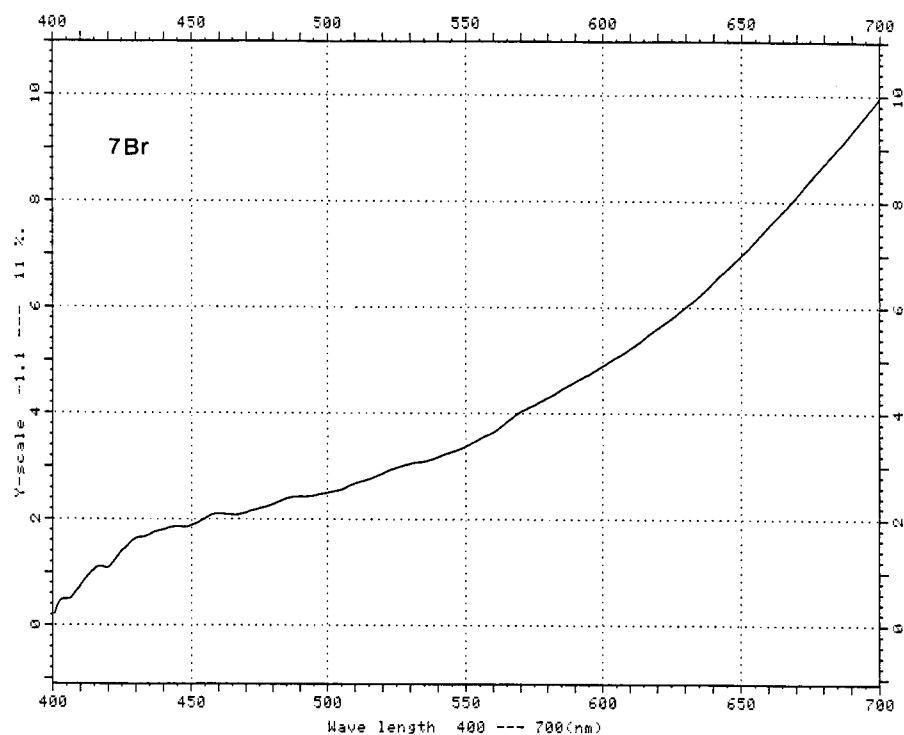


1-18 (6)淡茶地夾縹羅裂の緑 (6G)

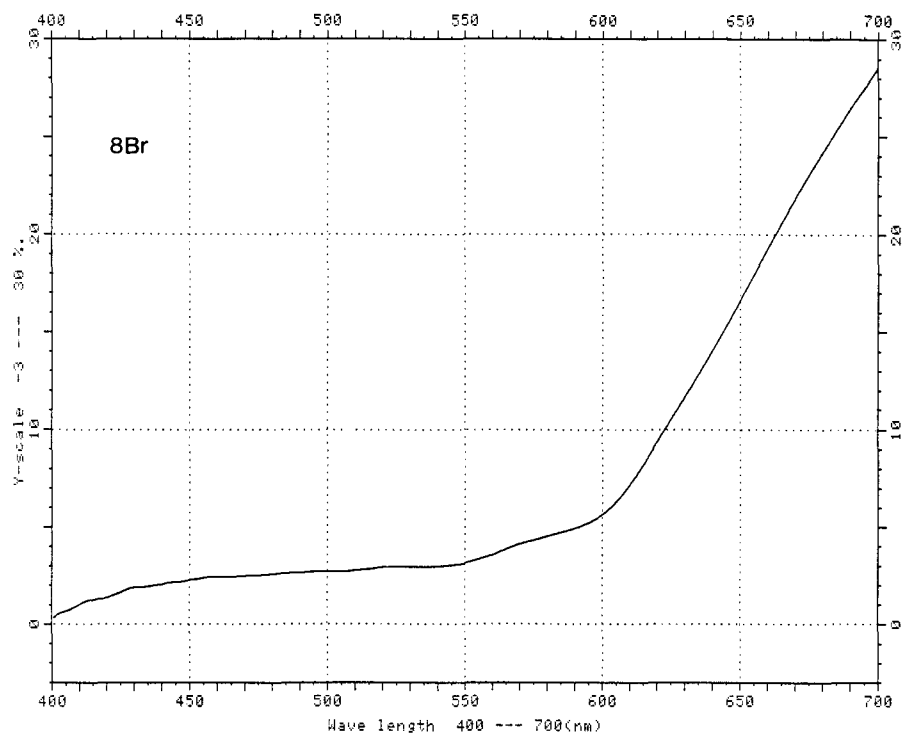




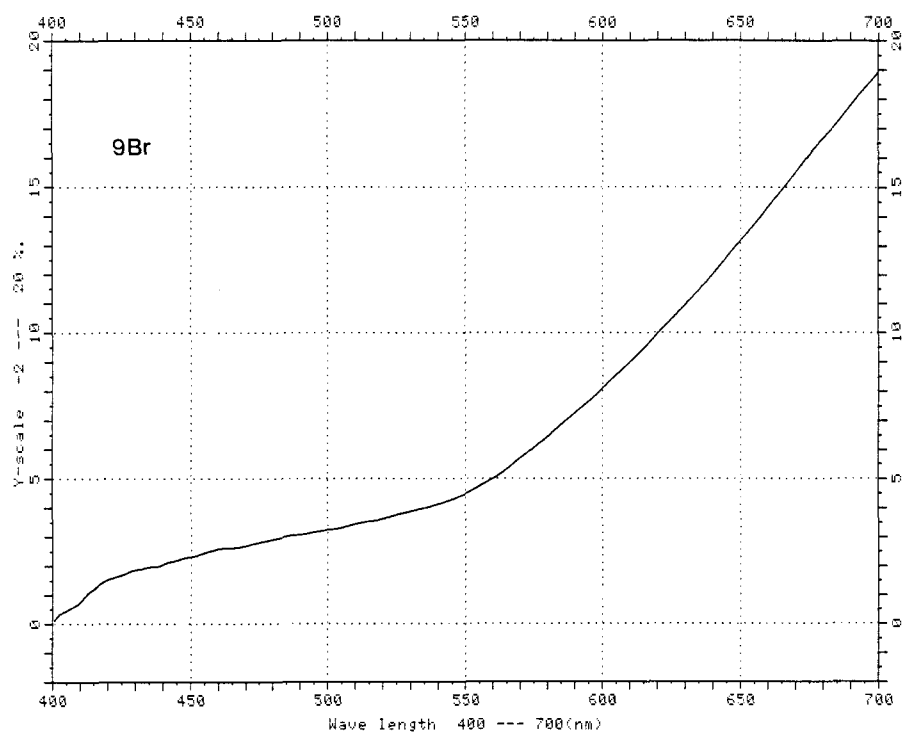
1—19 (7)深茶地朽木形文広東錦裂の赤 (7R)



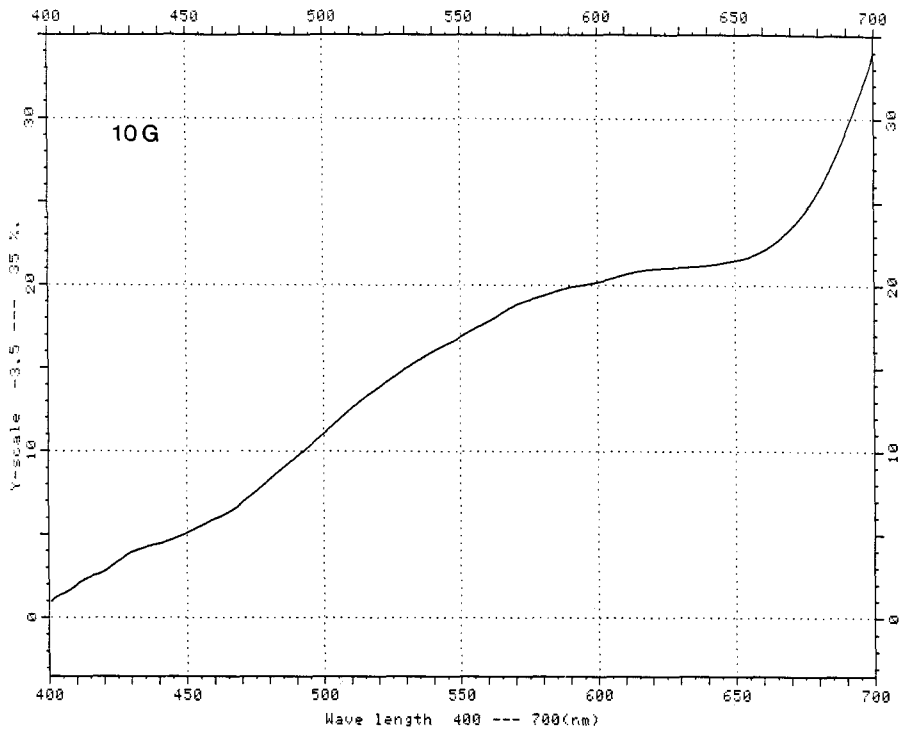
1—20 (7)深茶地朽木形文広東錦裂の茶 (7Br)



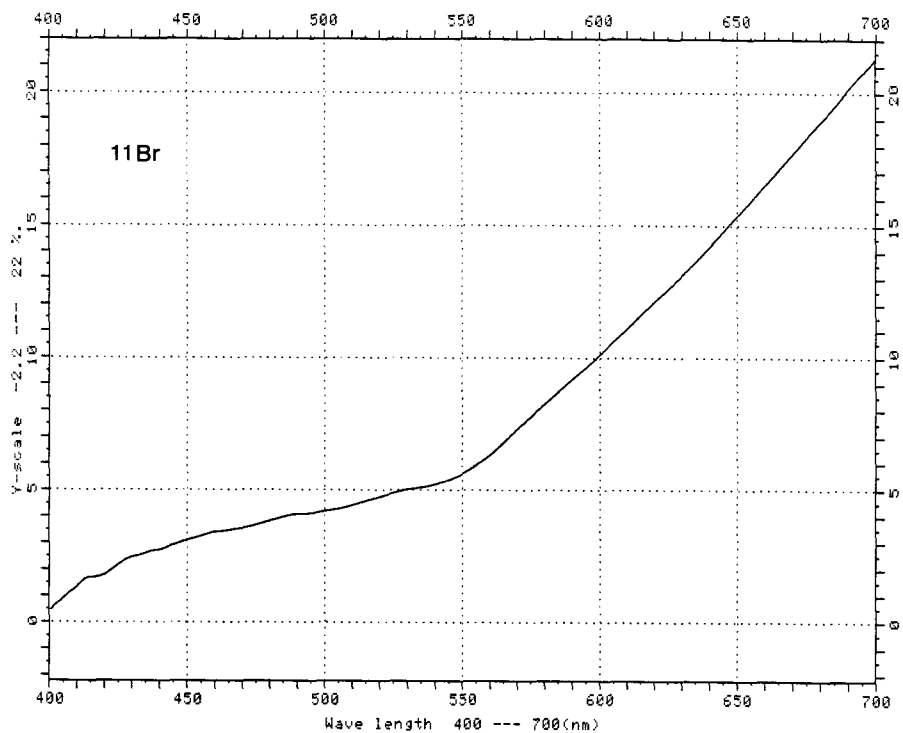
1—21 (8)紫地皺裂の茶 (8Br)



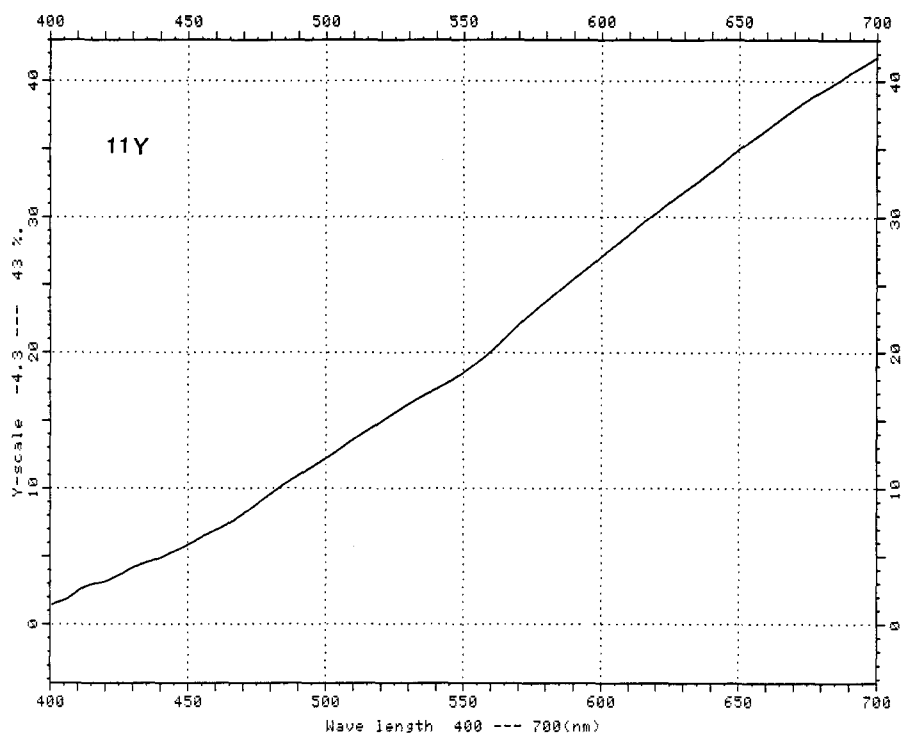
1—22 (9)紫地平絹裂の茶 (9Br)



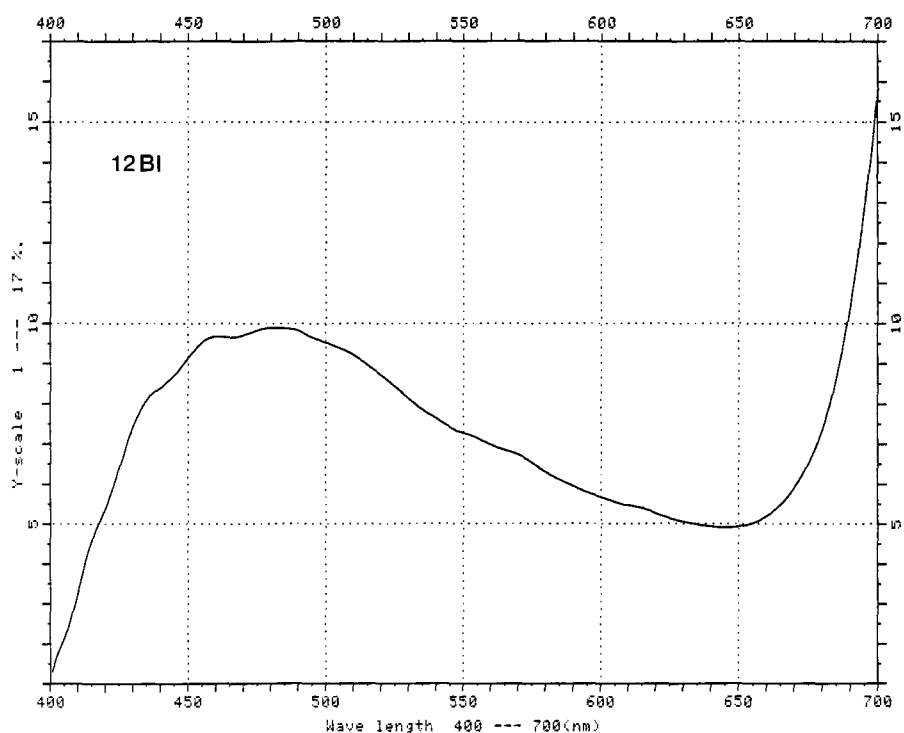
1—23 10紫地花唐草文錦裂の緑 (10G)



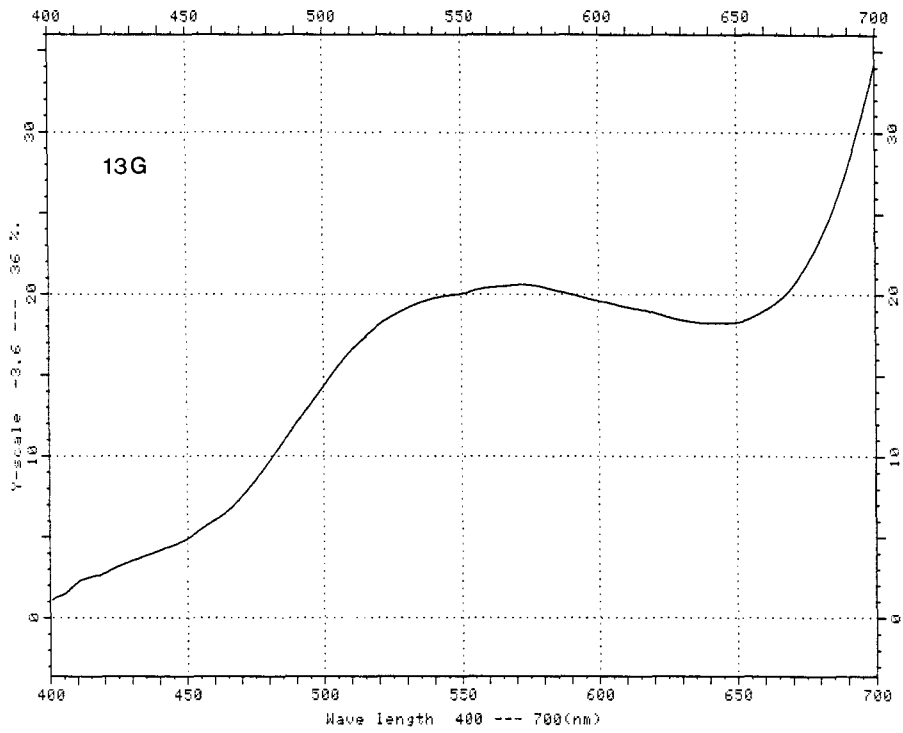
1—24 11茶地錦裂 (裏面) の茶 (11Br)



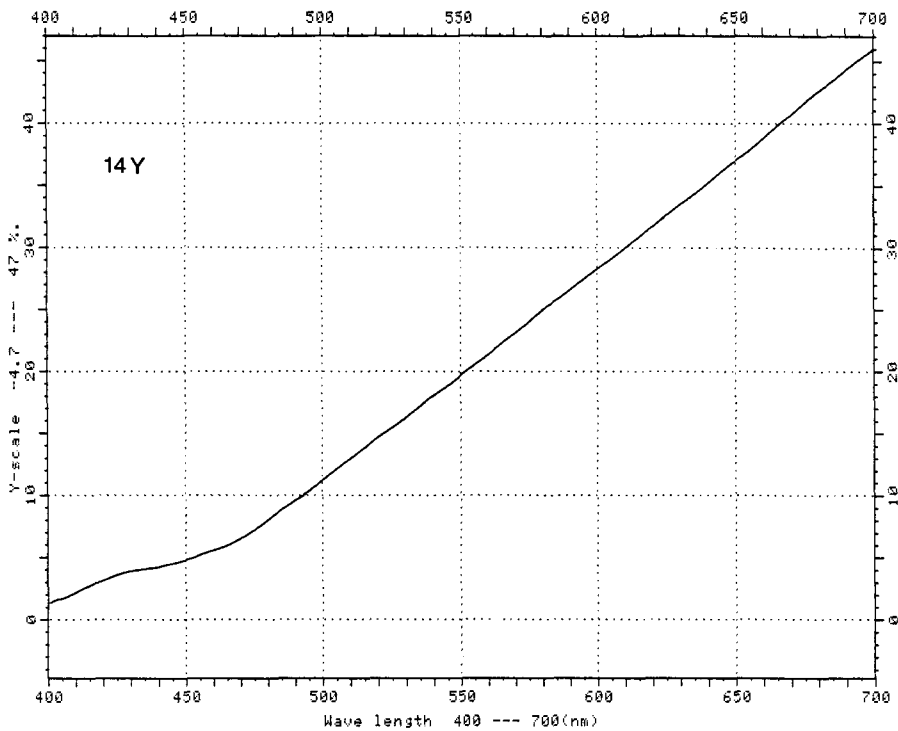
1—25 (11)茶地錦裂(裏面)の黄(11Y)



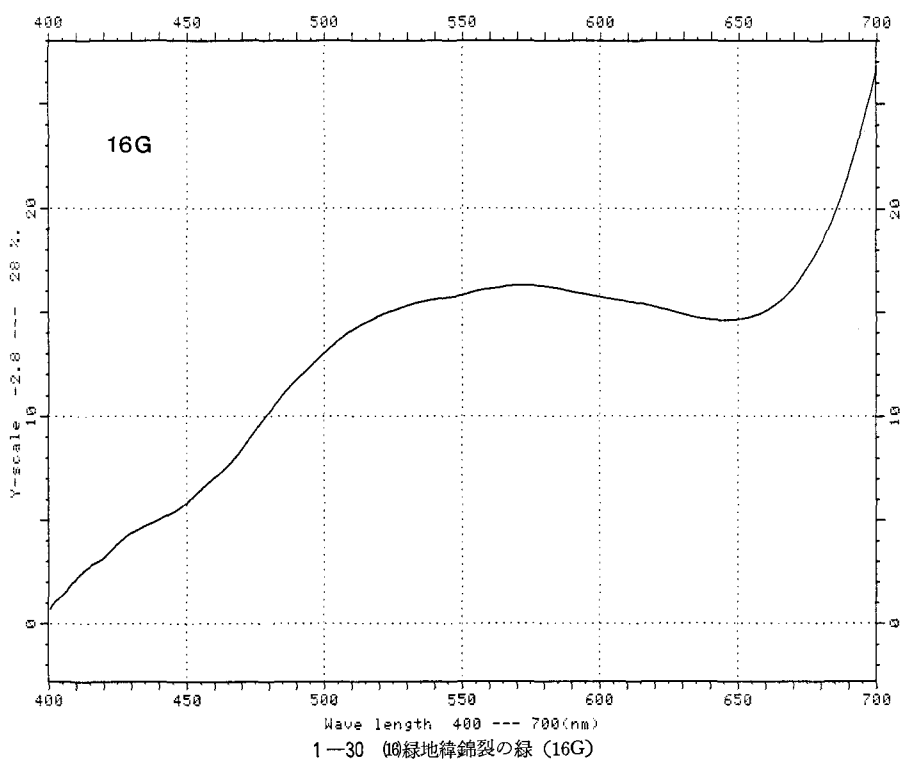
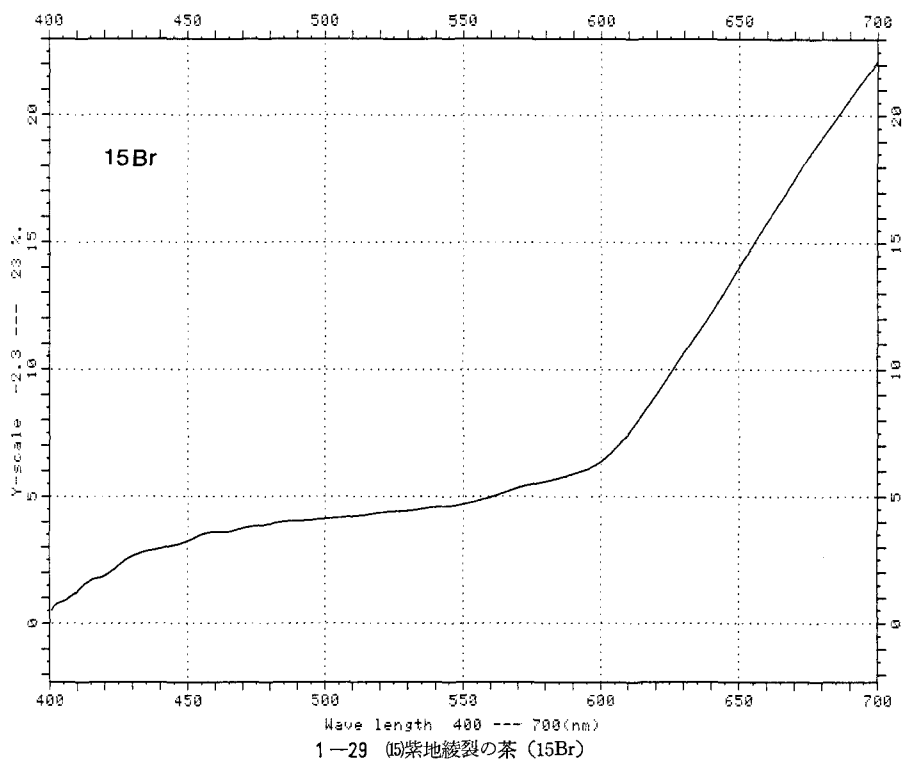
1—26 (12)青地綾裂の青(12BI)

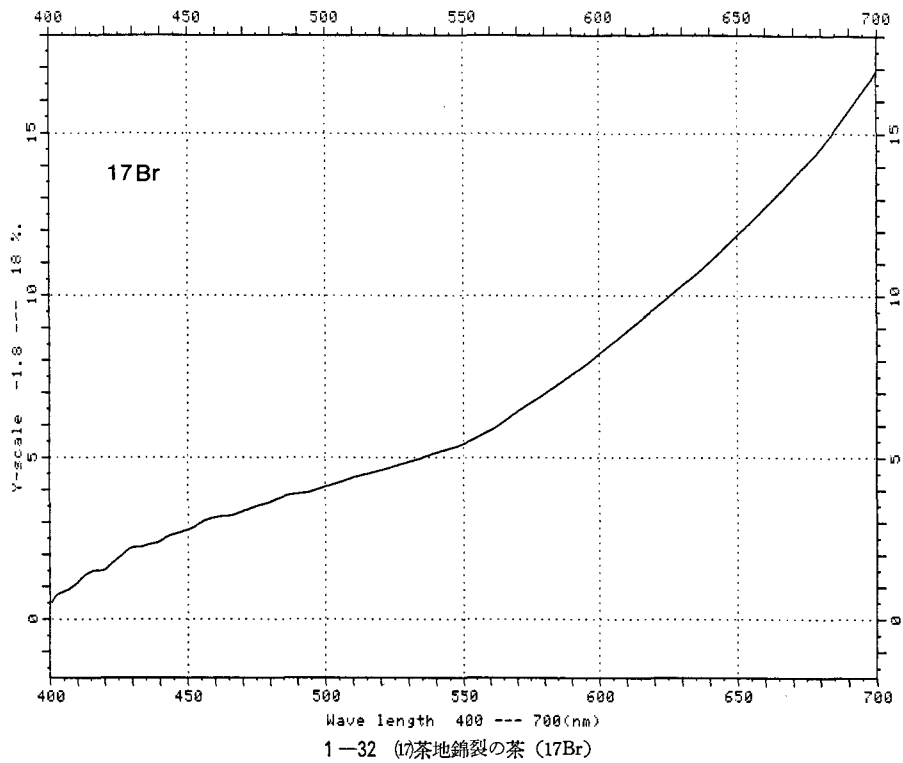
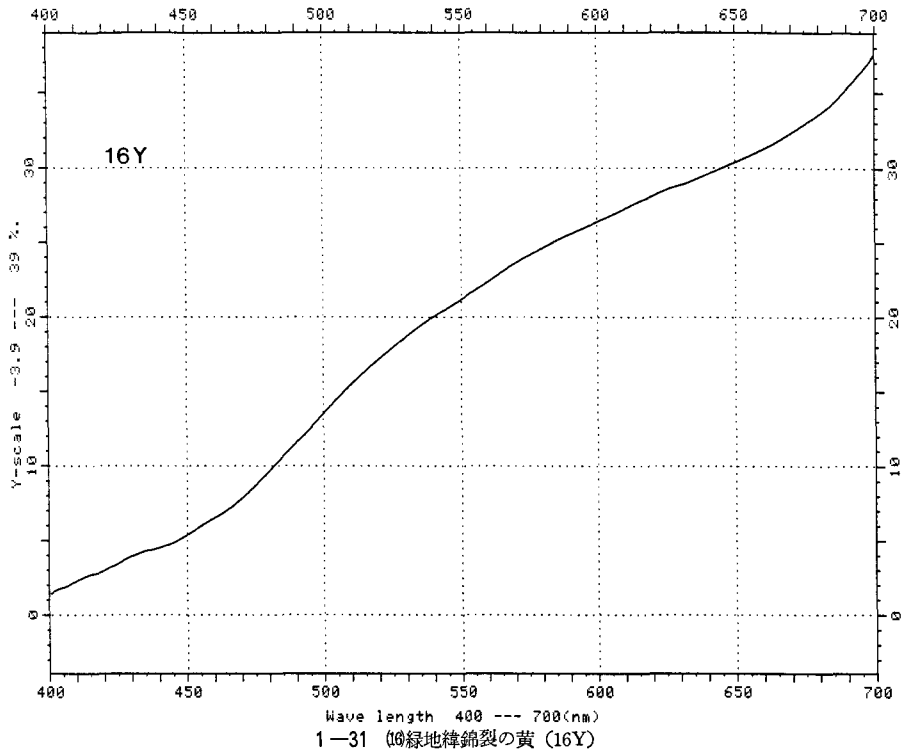


1—27 (13)萌葱地綾裂の緑 (13G)



1—28 (14)黄地平絹裂の黄 (14Y)





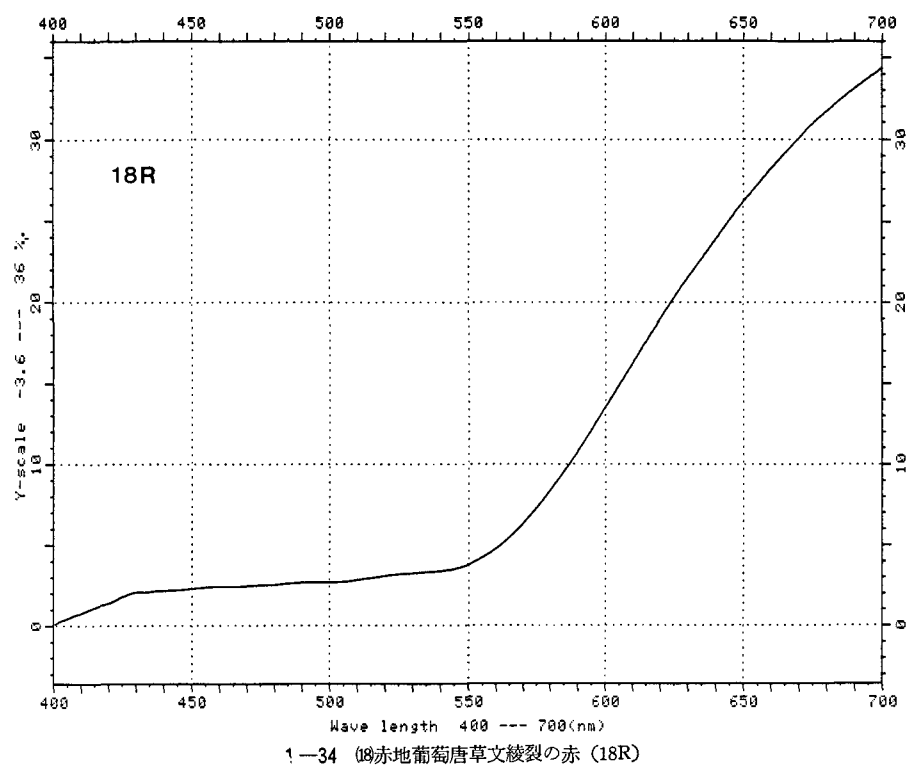
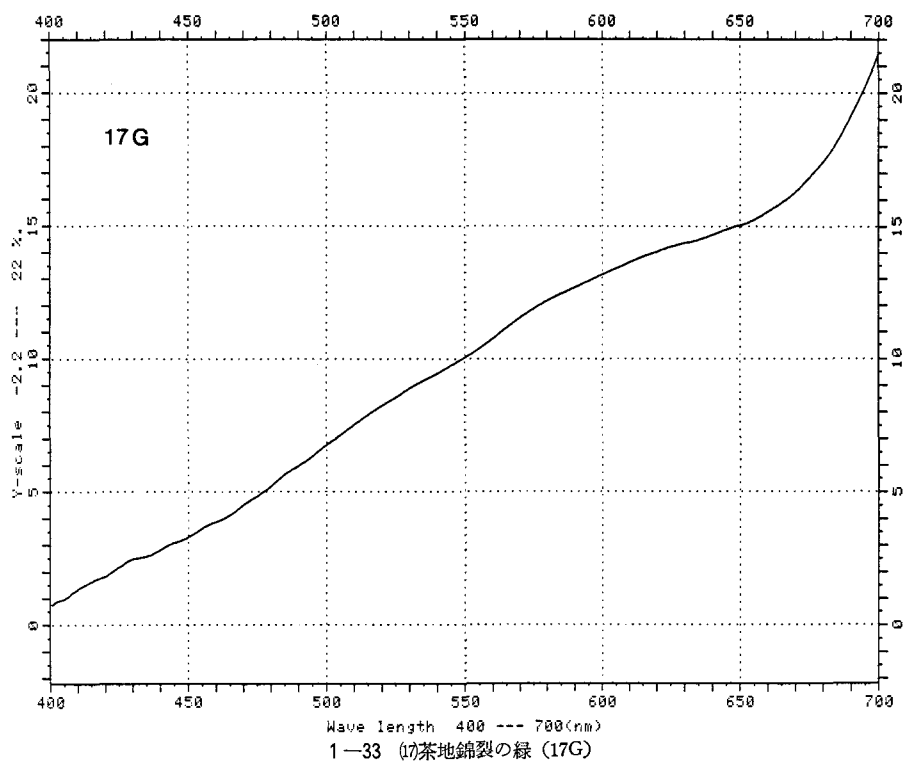
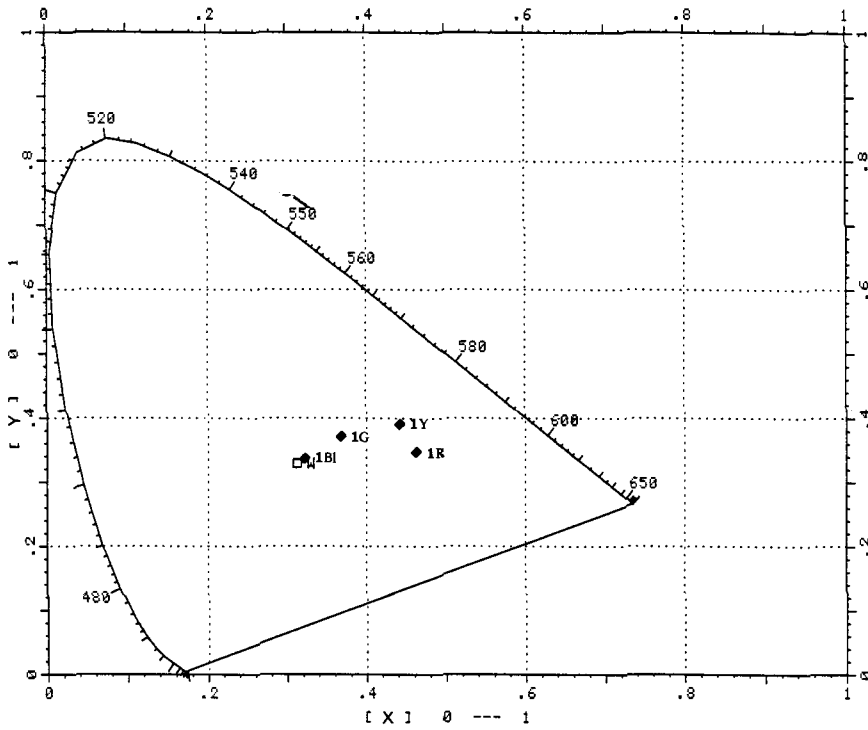
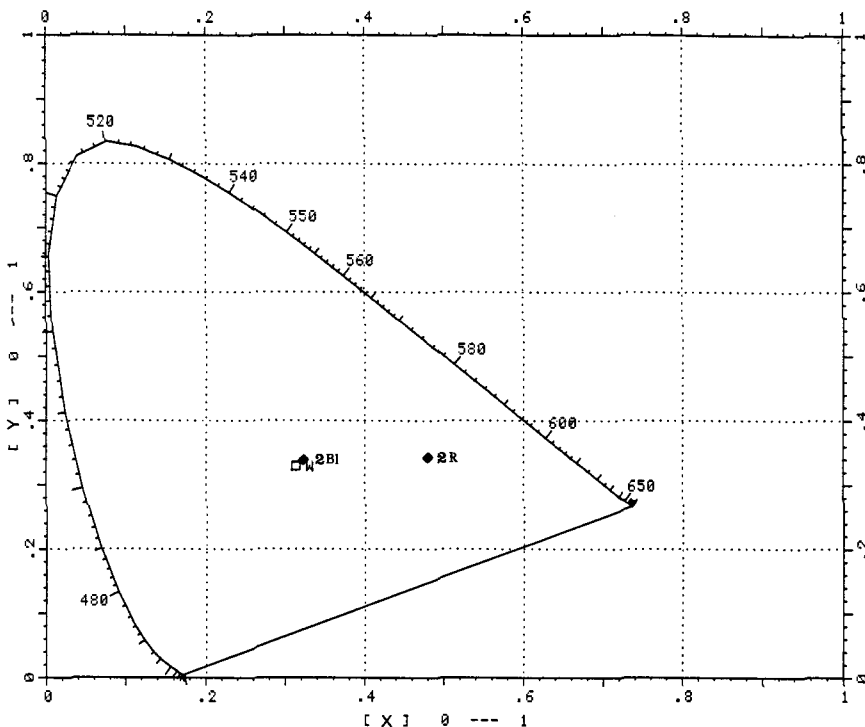




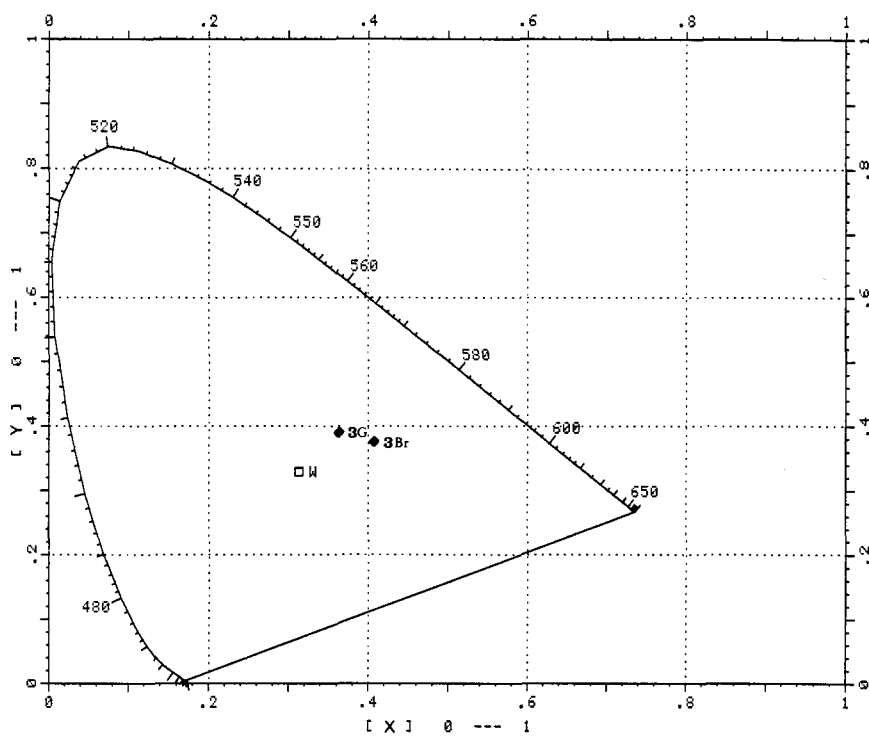
図2 XYZ表色系による色度図上での位置



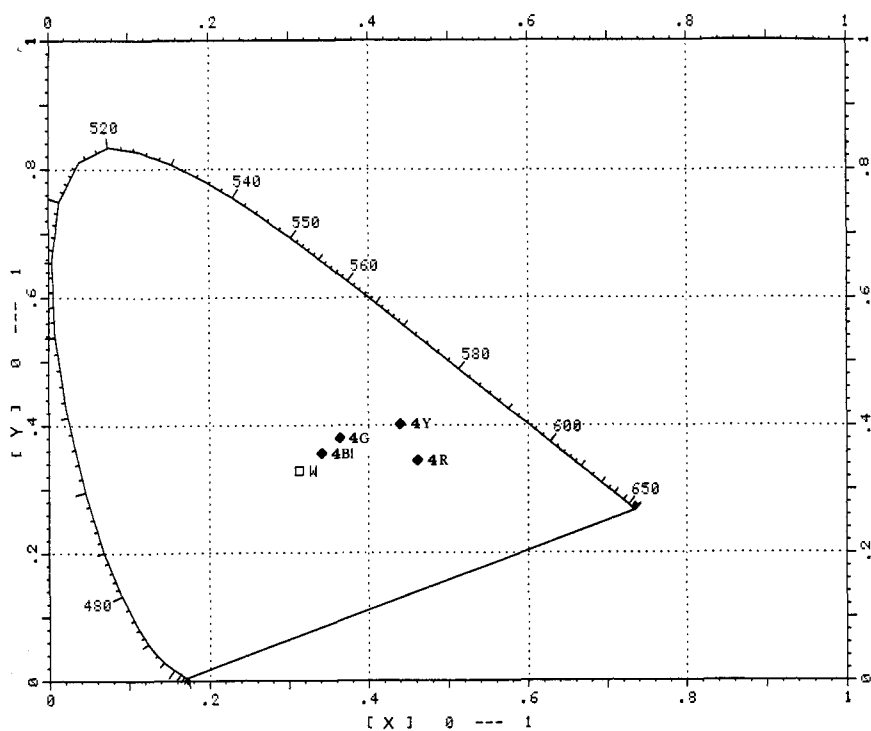
2-1 (1)赤地広東裂の赤 (1R), 黄 (1Y), 緑 (1G), 青 (1Bl)



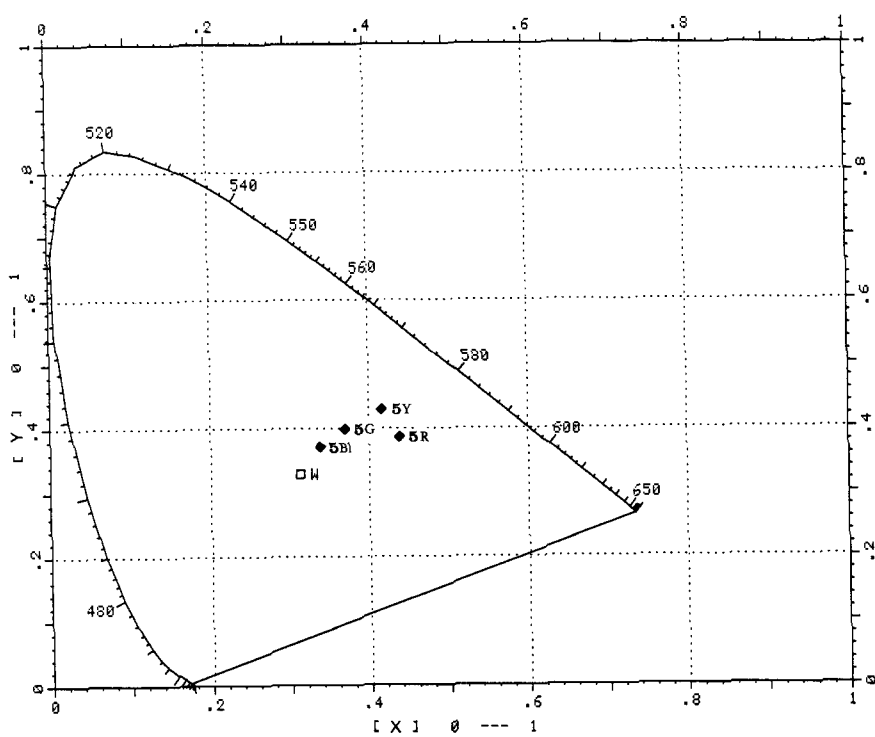
2-2 (2)紅地亀甲花葉文錦裂の赤 (2R), 青 (2Bl)



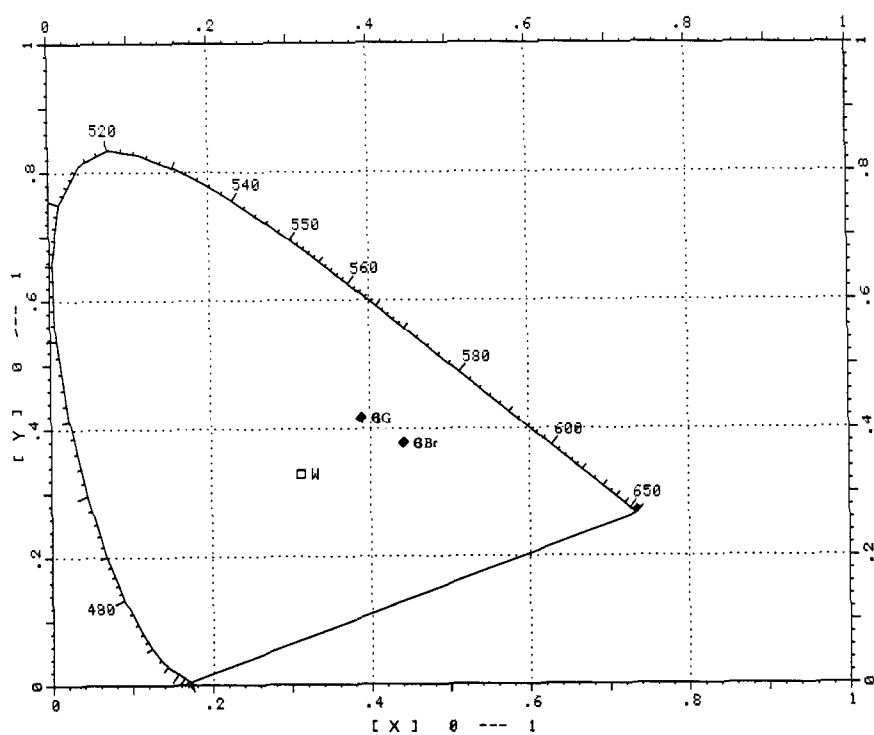
2-3 (3)淡茶地夾纈羅裂の緑 (3G), 青 (3Bl)



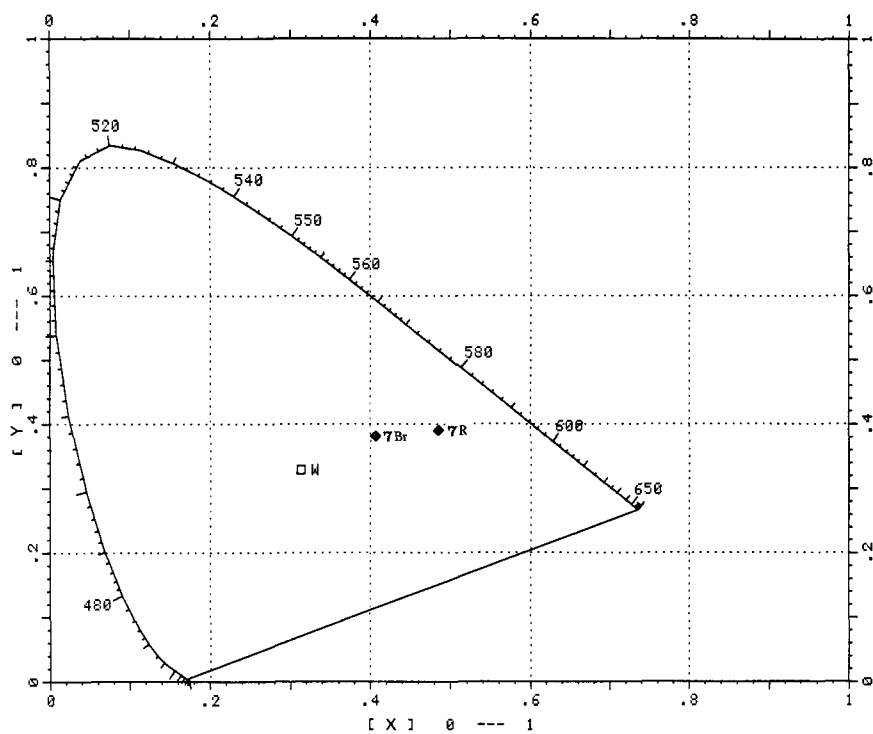
2-4 (4)赤地格子蓮花文錦裂の赤 (4R), 黄 (4Y), 緑 (4G), 青 (4Bl)



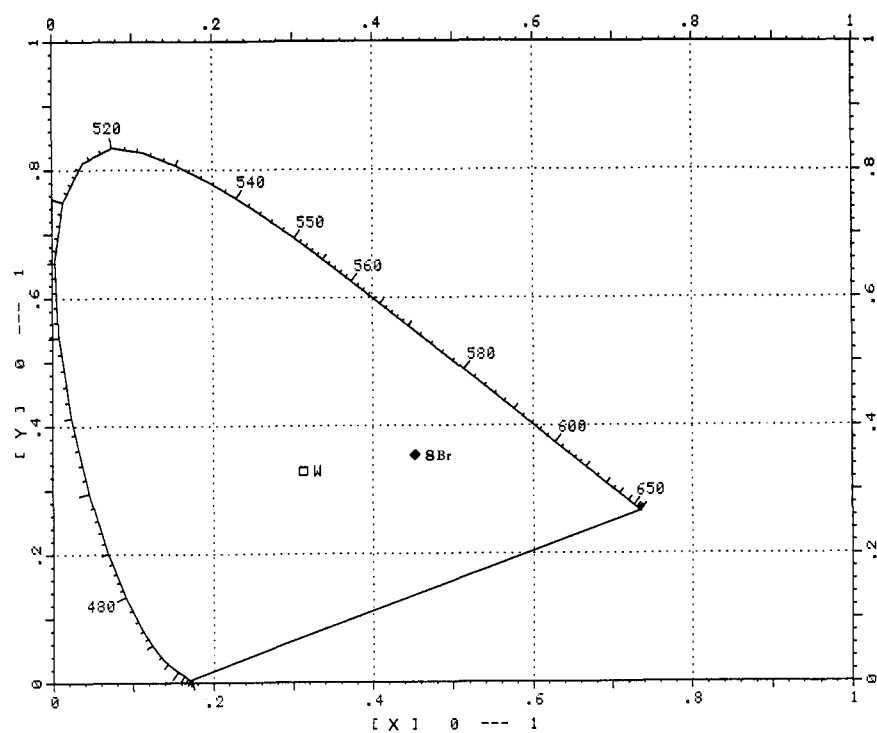
2-5 (5)経錦裂(裏面)の赤(5R), 黄(5Y), 緑(5G), 青(5Bl)



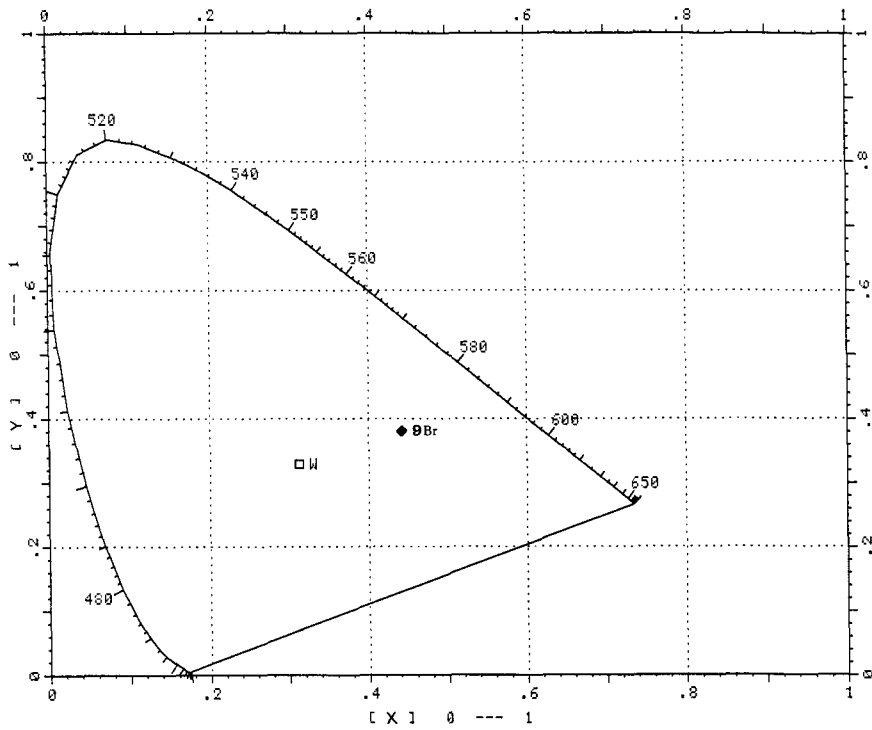
2-6 (6)淡茶地夾纈羅裂の茶(6Br), 緑(6G)



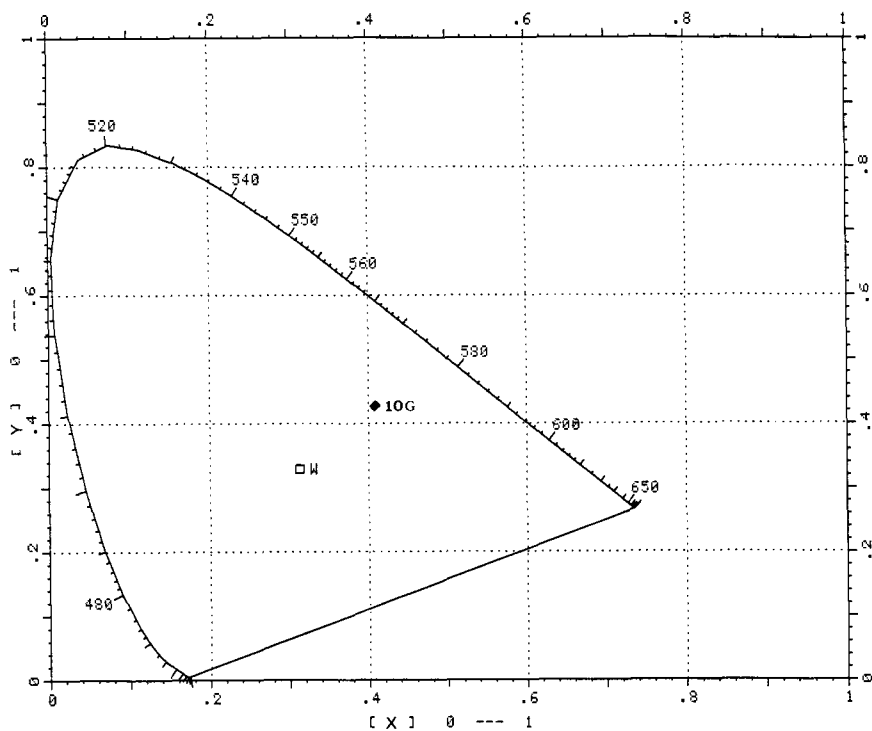
2-7 (7)深茶地朽木形文広東錦裂の赤 (7R), 茶 (7Br)



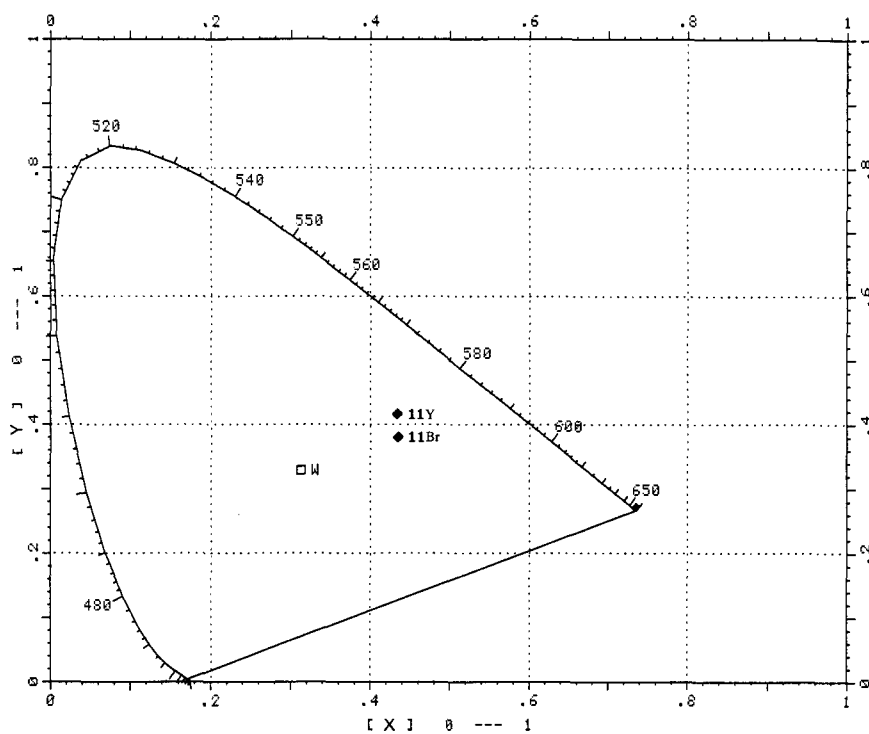
2-8 (8)紫地破裂の茶 (8Br)



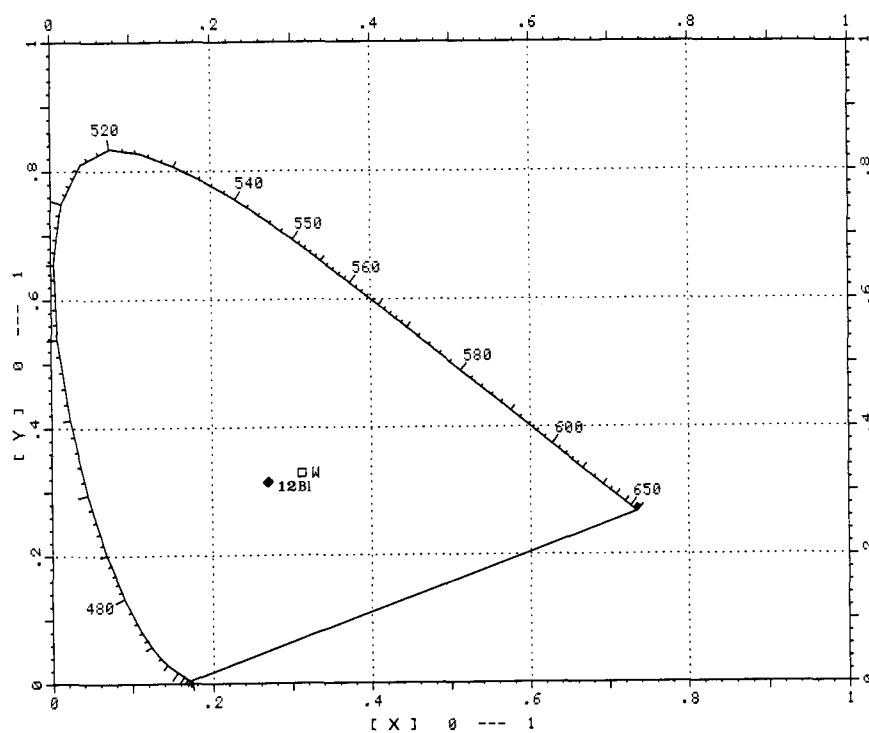
2-9 (9)紫地平絹裂の茶 (9Br)



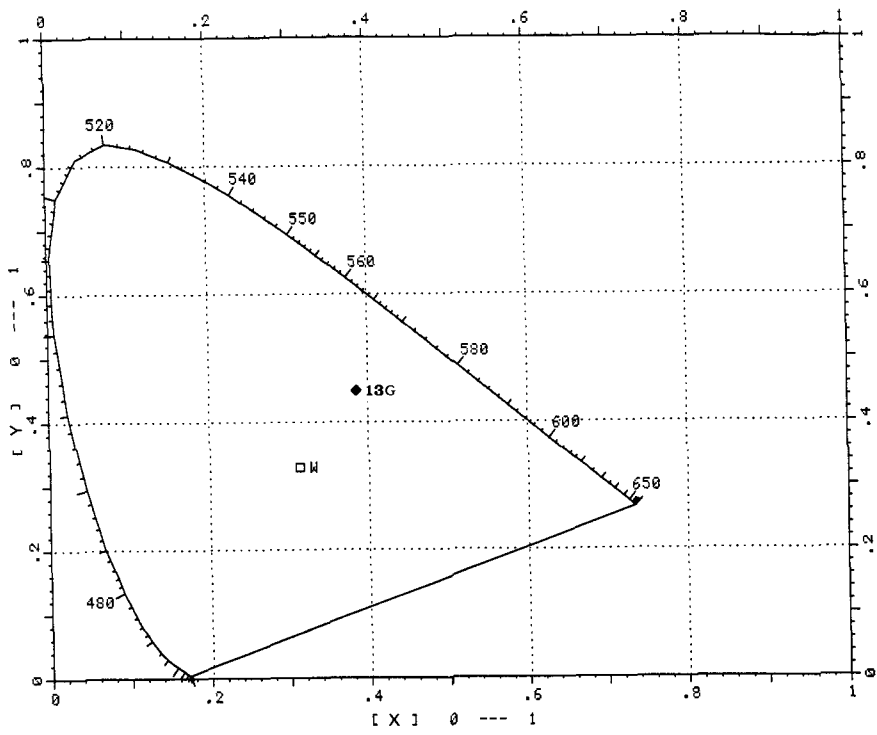
2-10 (10)紫地花唐草文錦裂の緑 (10G)



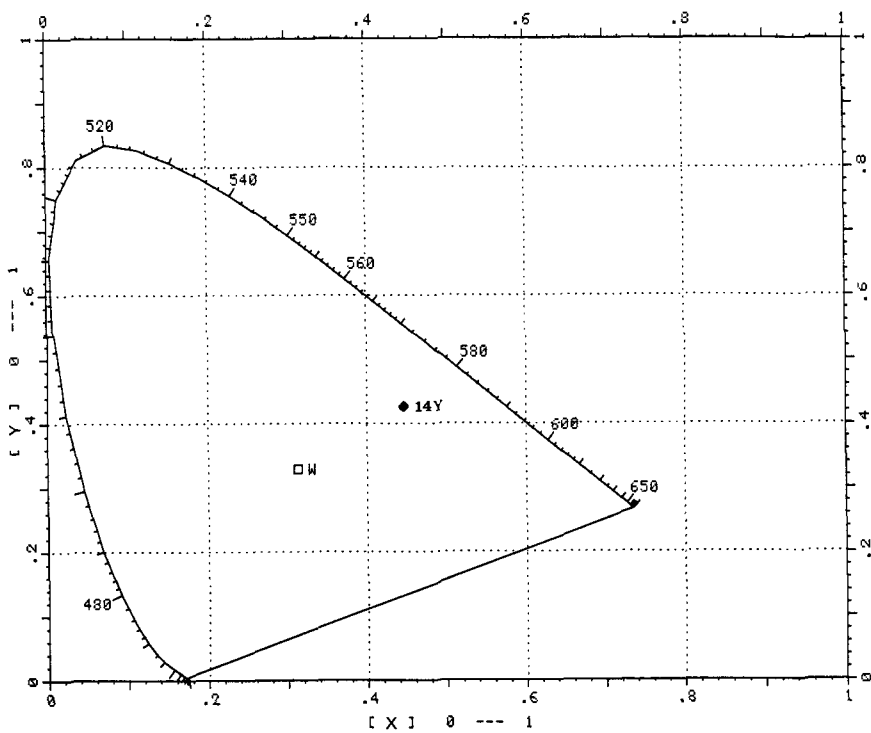
2-11 (1)茶地錦裂(裏面)の茶(11Br), 青(11Bl)



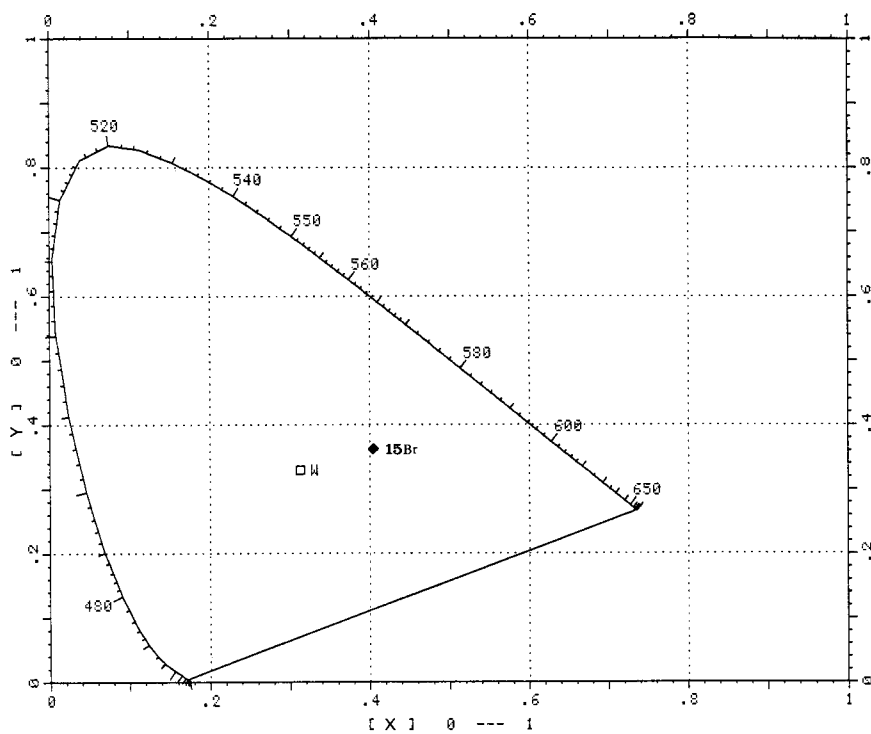
2-12 (1)青地綾裂の青(12Bl)



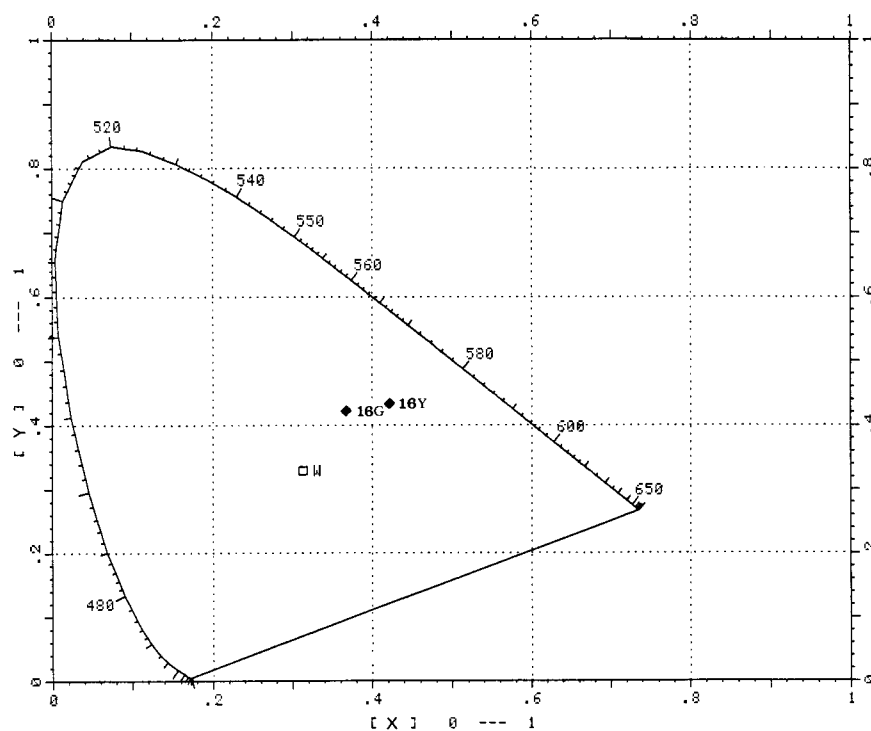
2-13 (13)萌葱地綾裂の緑 (13G)



2-14 (14)黄地平絹裂の黄 (14Y)

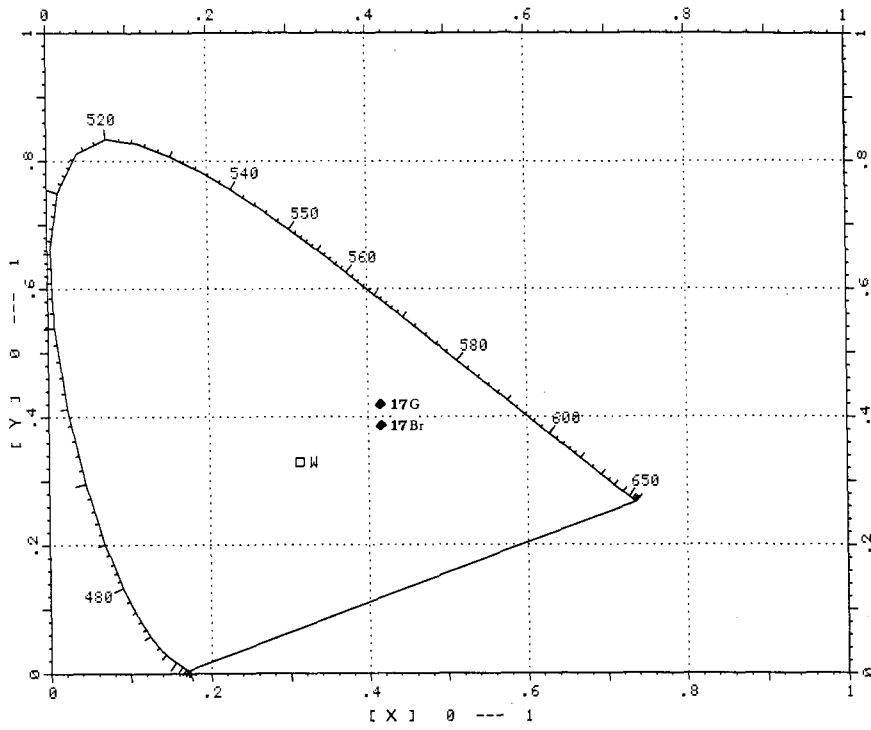


2-15 (15紫地綾裂の茶 (15Br))

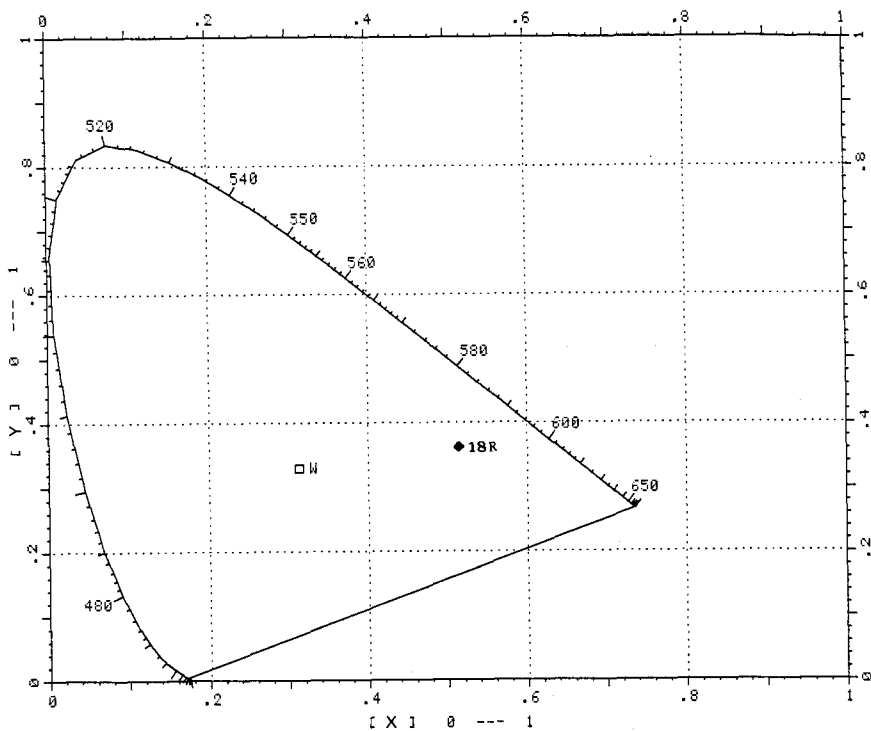


2-16 (16緑地緯錦裂の黄 (16Y), 緑 (16G))



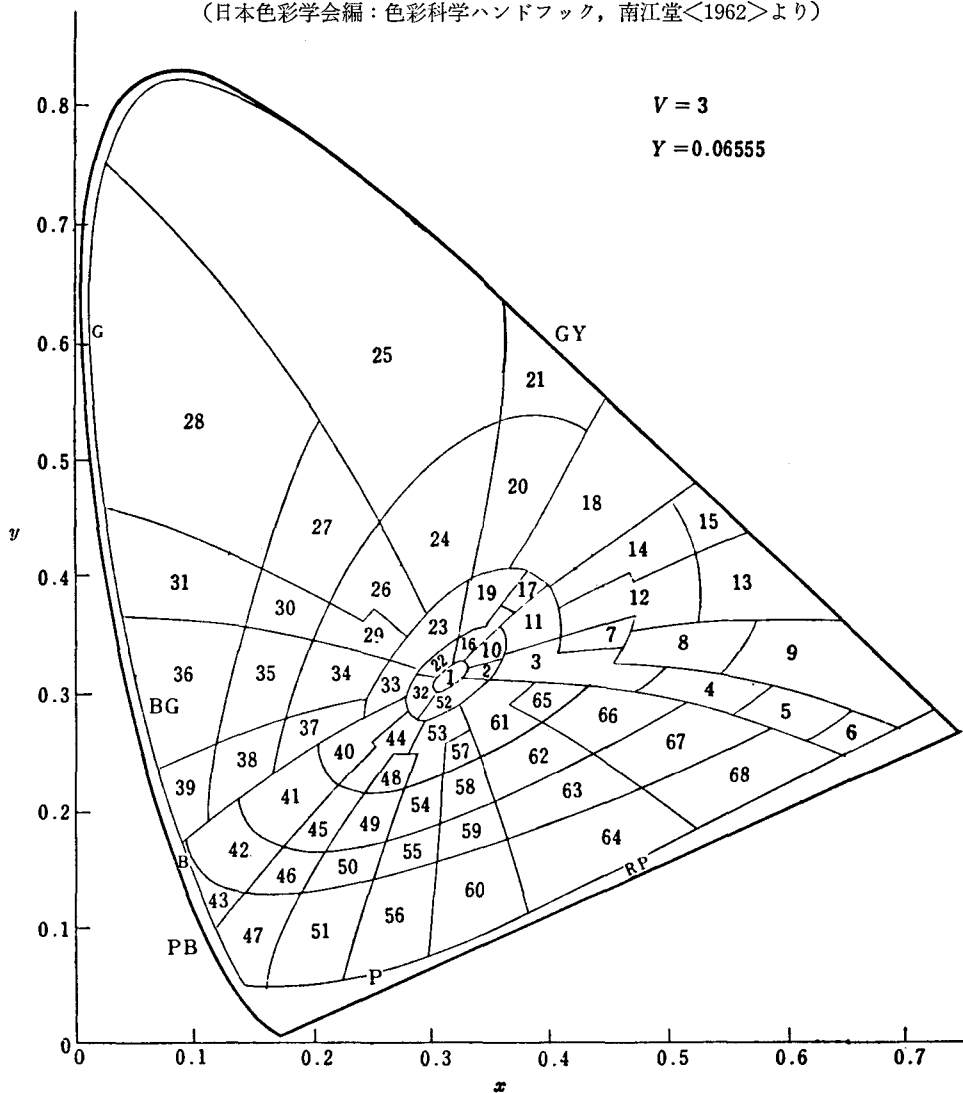


2-17 (17茶地錦裂の茶 (17Br), 緑 (17G))



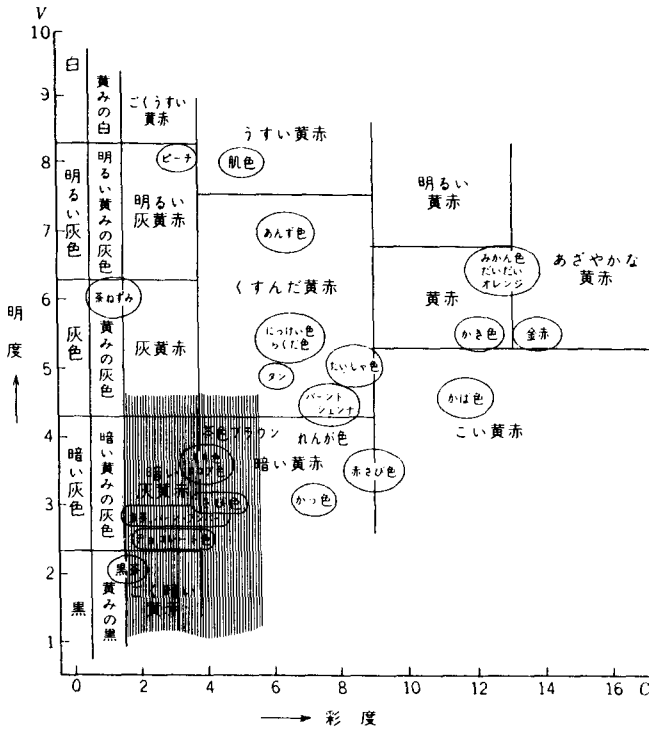
2-18 (18赤地葡萄唐草文綾裂の赤 (18R))

図3 Y=6.555% (明度V=3) の場合の色度図と色度図上の系統色名  
(日本色彩学会編: 色彩科学ハンドブック, 南江堂<1962>より)

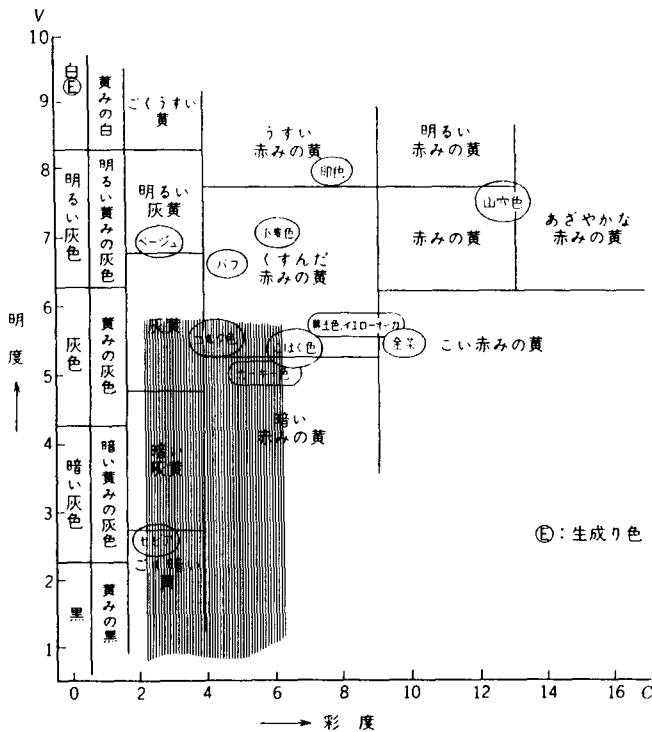


- 1 dark Gray 2 dark reddish Gray 3 dusky Red 4 dark Red 5 deep Red 6 vivid Red  
7 weak reddish Brown 8 moderate reddish Brown 9 strong reddish Brown 10 brownish Gray  
11 weak Brown 12 moderate Brown 13 strong Brown 14 dark yellowish Brown 15 deep yellowish Brown 16 olive Gray 17 weak Olive 18 moderate Olive 19 weak olive Green 20 moderate olive Green 21 strong olive Green 22 strong greenish Gray 23 dusky Green 24 very dark yellowish Green 25 very deep yellowish Green 26 dark Green 27 deep Green 28 vivid Green 29 dark bluish Green 30 deep bluish Green 31 vivid bluish Green 32 dark bluish Gray 33 dusky Blue Green 34 dark Blue Green 35 deep Blue Green 36 vivid Blue Green 37 dark greenish Blue 38 deep greenish Blue 39 vivid greenish Blue 40 dusky Blue 41 dark Blue 42 deep Blue 43 vivid Blue 44 weak purplish Blue 45 moderate purplish Blue 46 strong purplish Blue 47 vivid purplish Blue 48 weak bluish Purple 49 moderate bluish Purple 50 strong bluish Purple 51 vivid bluish Purple 52 dark purplish Gray 53 dusky Purple 54 dark Purple 55 deep Purple 56 vivid Purple 57 dusky reddish Purple 58 dark reddish Purple 59 deep reddish Purple 60 vivid reddish Purple 61 dusky Red Purple 62 dark Red purple 63 deep Red Purple 64 vivid Red Purple 65 dusky purplish Red 66 dark purplish Red 67 deep purplish Red 68 vivid purplish Red

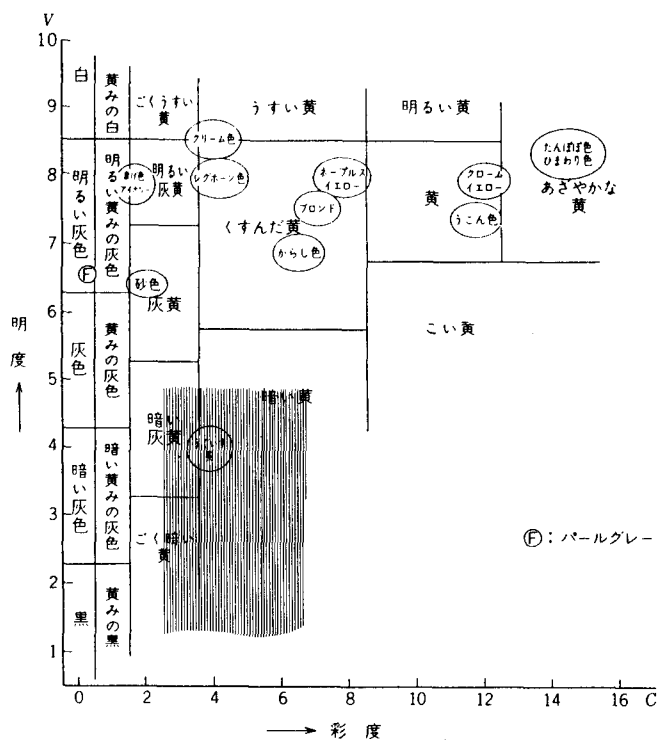
図4 マンセル表色系における物体色名のおおよその位置と上代製の色彩の関係。(JIS Z 8102の付図を使用。伝統色名はおおよその位置が楕円で表示してある。)



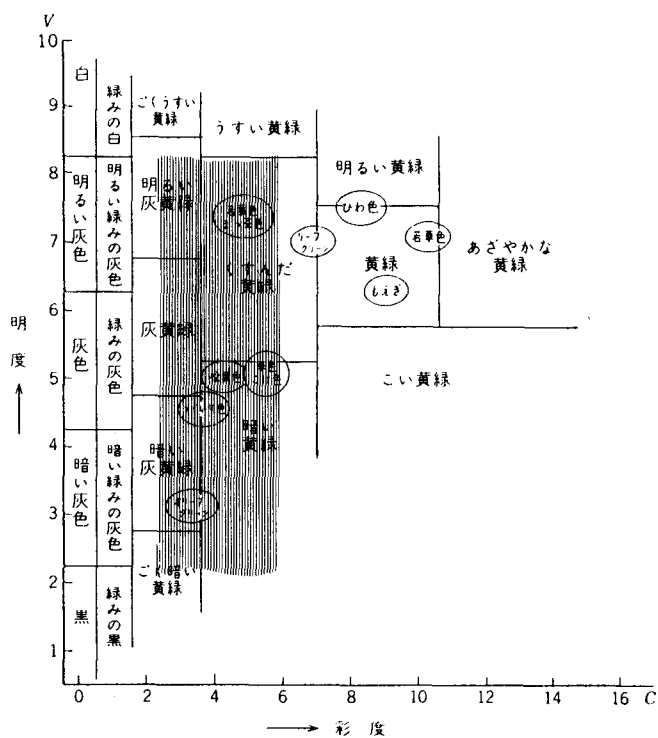
4-1 黄赤 (9R~7YR未満)。斜線の部分に赤および茶系の色彩が位置する。



4-2 赤みの黄 (7YR~2Y未満)。斜線の部分に黄 (1Y), 黄 (4Y) などの比較的に明るい黄が位置する。



4—3 黄(2Y~6Y未満)。斜線部分にその他の黄が位置する。



4—4 黄緑(9Y~8GY未満)。斜線部分に緑が位置する。

Systematic Colour Names Found in “Jōdai Kire (remaining pieces of  
textiles made in and around Nara Period)”  
Kept by the National Museum of Japanese History

KAMBA Nobuyuki

Classification was made into the “Jōdai Kire” kept by the National Museum of Japanese History in terms of systematic color names by the spectroscopic measurement to the colours remaining in “Kire” using the spectro photometer combined with a microscope. Most of the samples’ colours can be described by one of two basic colour names such as “Brown” and “Olive”. Regarding blue samples however, all of them corresponded to the basic colour name “Gray” except one sample. As they clearly looked blue to naked eyes and there might have been problems with the measuring system: further consideration about this will be needed.

Classifying in terms of systematic colour names, it is clear that most of the colours of “Jōdai Kire” have a rather yellowish hue. Because more than a thousand years have passed since they were dyed, it is possible that the dyestuffs and fibers might be greatly deteriorated resulted in fading and colour changes. The basic colour names such as “Brown” and “Olive”, therefore, be the result of colour change and fading of degraded textiles.

Images of the original colour of textiles depend on individual experiences of observers. Therefore, it naturally may happen that the real colours were different even if the same conventional colour names were used. It is impossible to decide the colourimetric relationships between the colours to which were referred by the traditional terminology in current use and the original colours in “Jōdai Kire”. Further consideration to some of these problems should be given to estimate the original colours coming from the past.

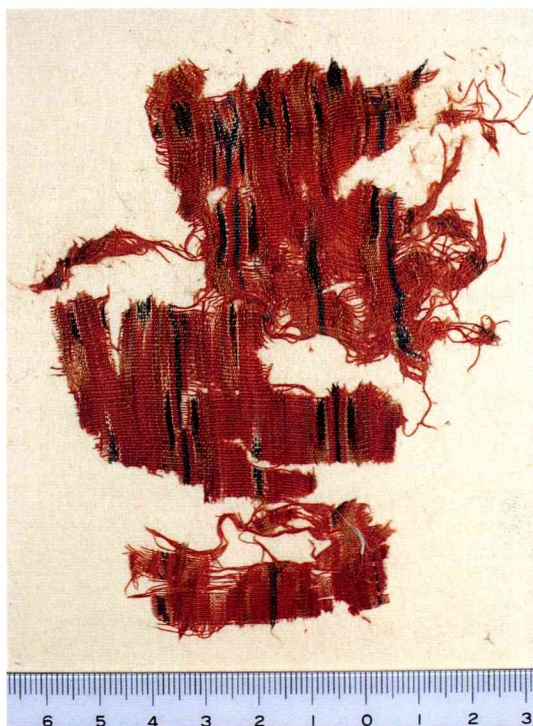


写真1 赤地広東裂

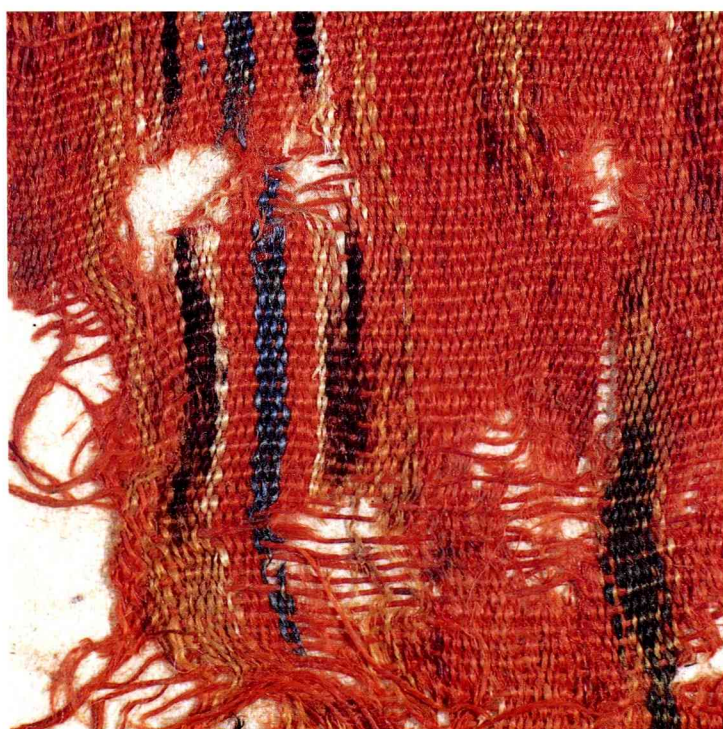


写真2 赤地広東裂部分



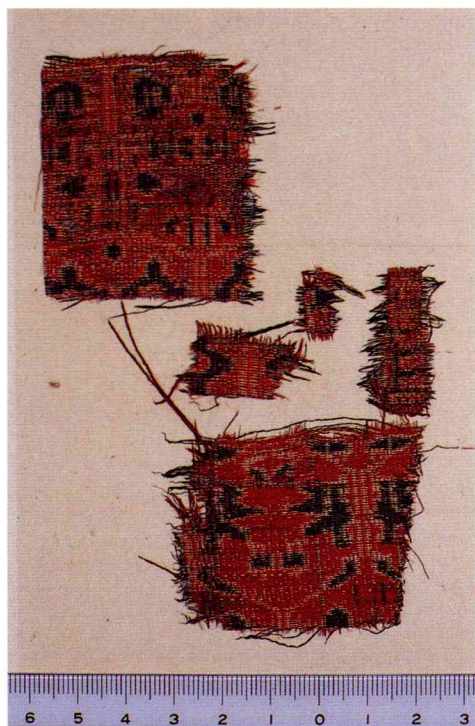


写真3 紅地亀甲花葉文錦裂



写真4 紅地亀甲花葉文錦裂部分



写真5 淡茶地夾纈羅裂



写真6 淡茶地夾纈羅裂部分



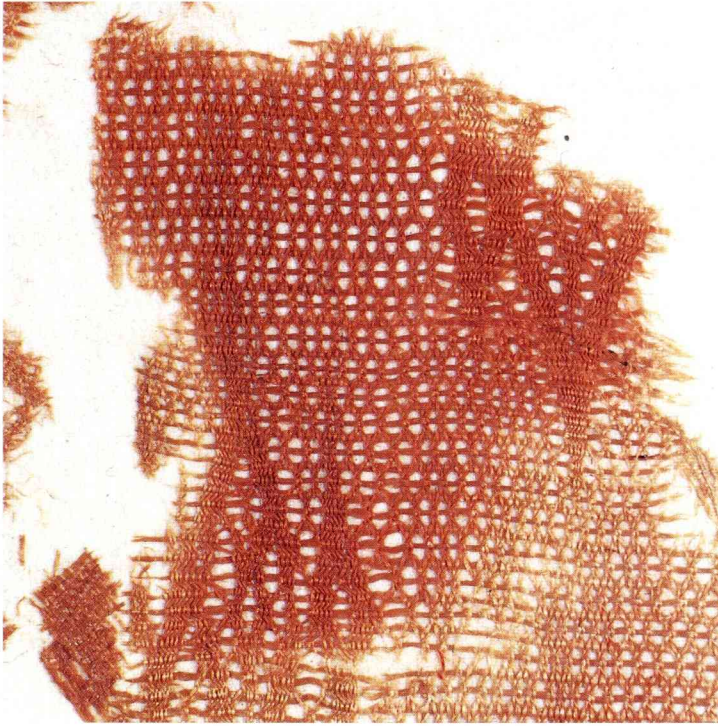


写真7 淡茶地夾纈羅裂部分



写真8 赤地格子蓮花文錦裂



写真9 赤地格子蓮花文錦裂部分

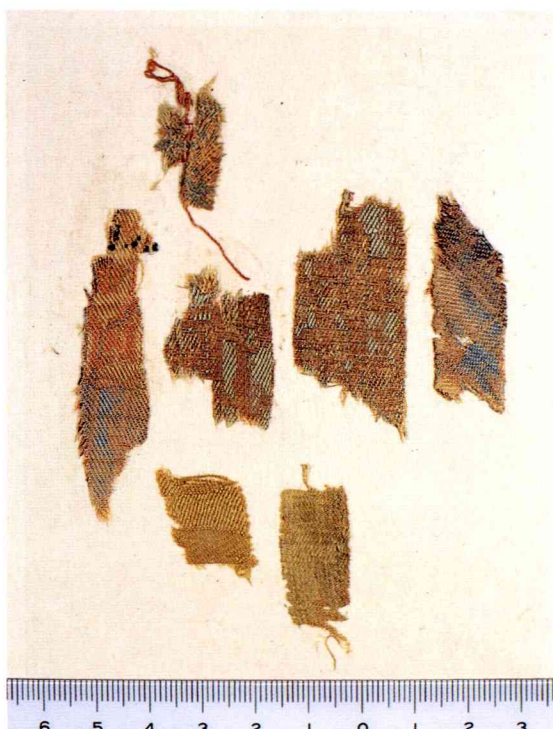


写真10 経錦裂（裏面）



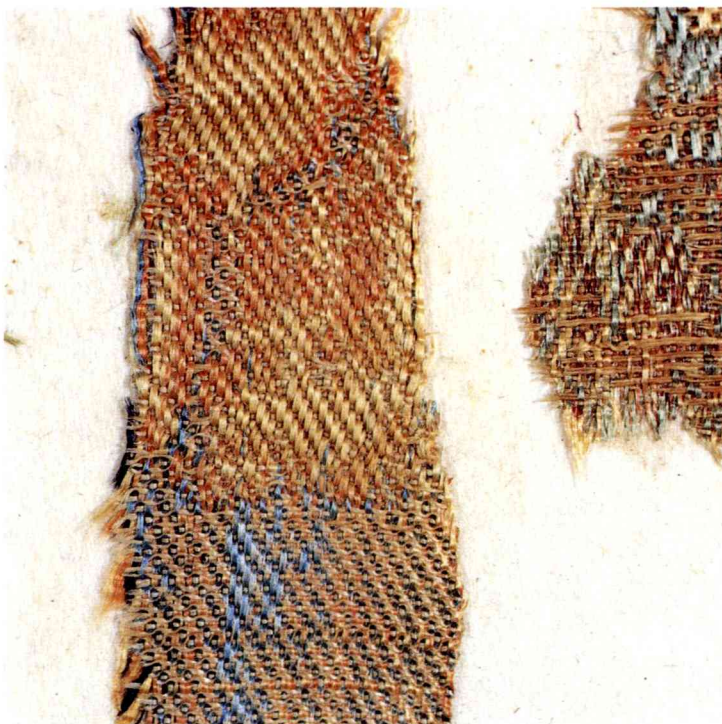


写真11 経錦裂（裏面）部分

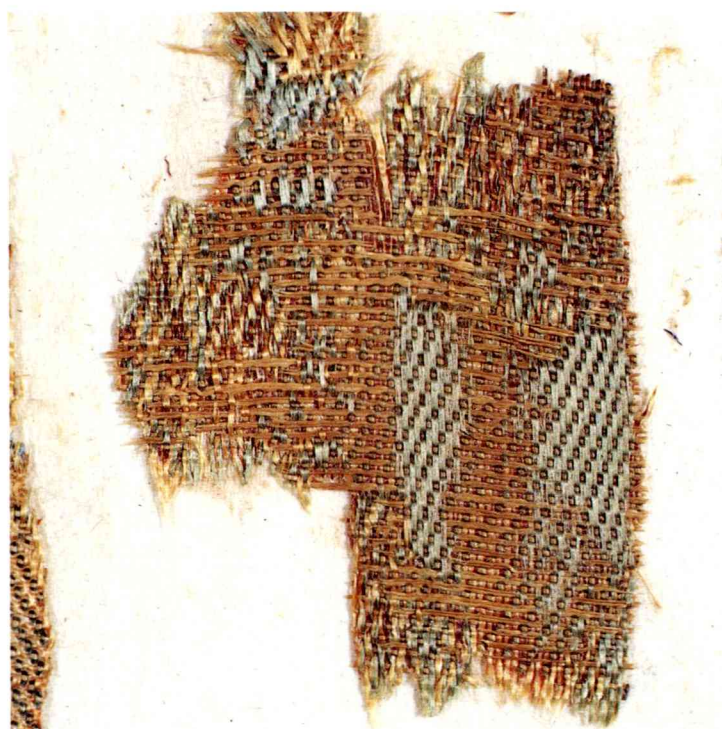


写真12 経錦裂（裏面）部分



写真13 経錦裂（裏面）部分



写真14 経錦裂（裏面）部分



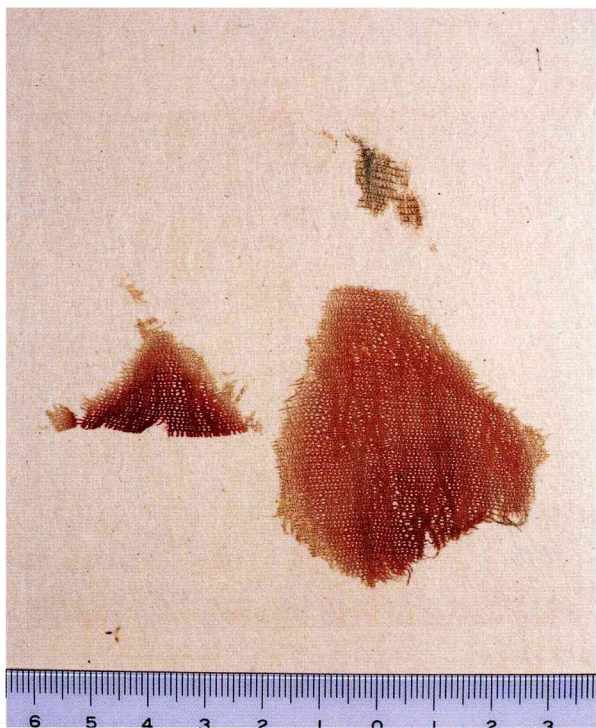


写真15 淡茶地夾纈羅裂

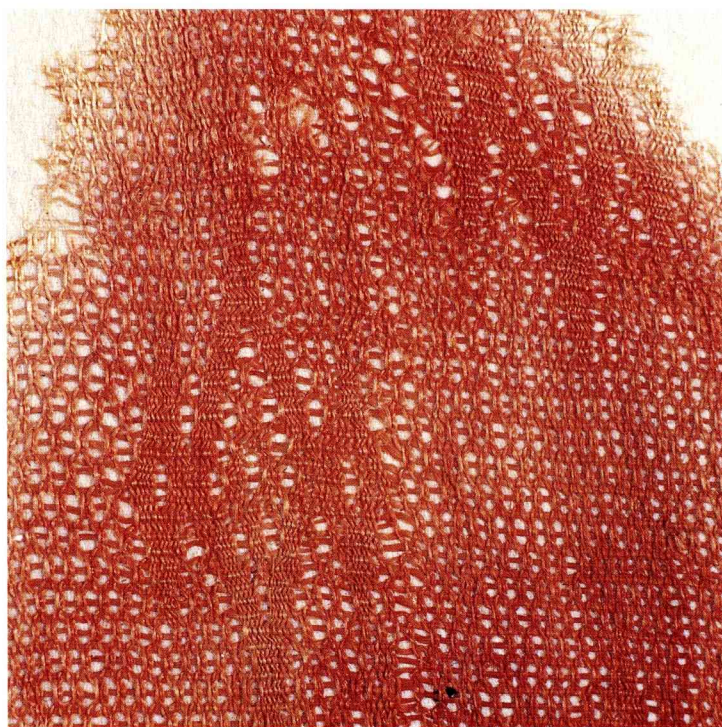


写真16 淡茶地夾纈羅裂部分

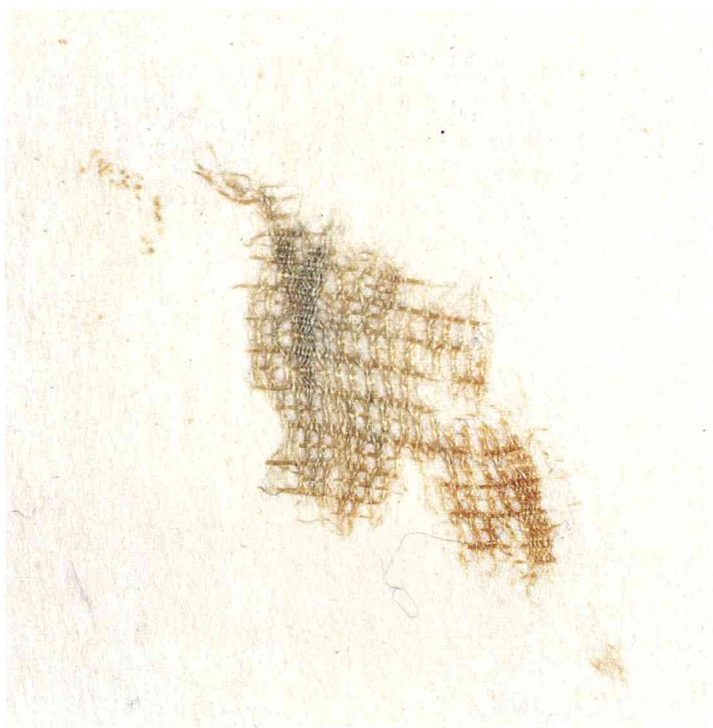


写真17 淡茶地夾纈羅裂部分

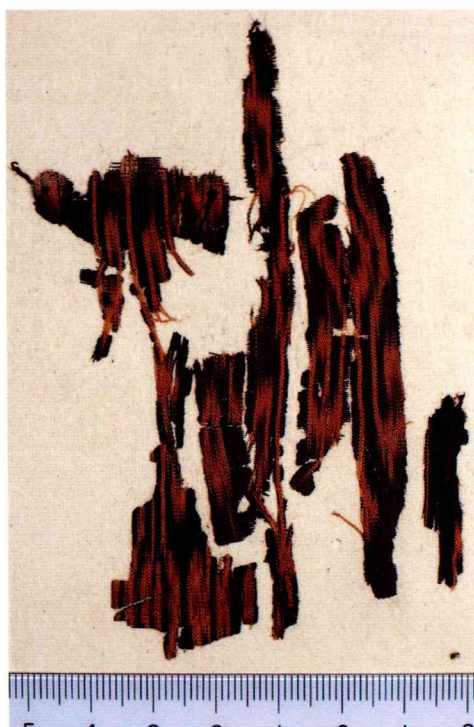


写真18 深茶地朽木形文広東錦裂



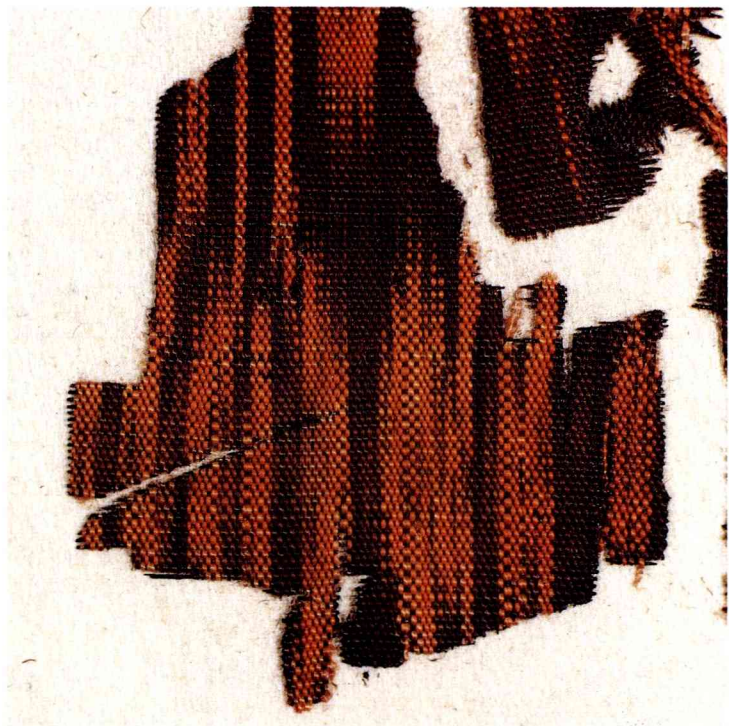


写真19 深茶地朽木形文広東錦裂部分



写真20 紫地絨裂



写真21 紫地絨裂部分

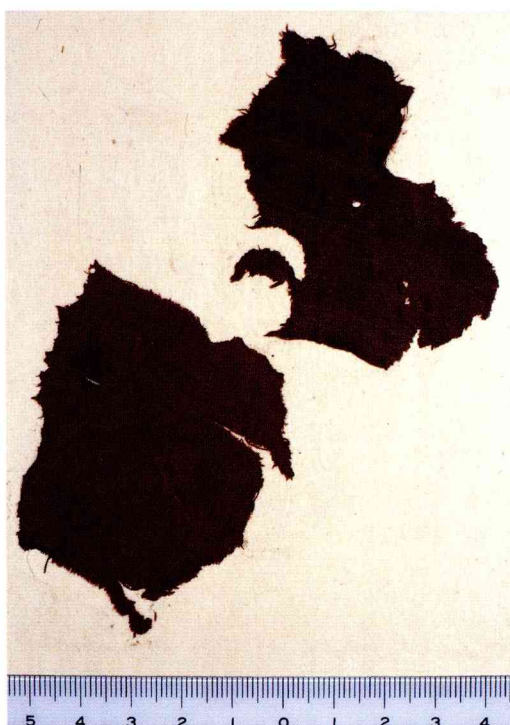


写真22 紫地平絹裂





写真23 紫地平絹裂部分



写真24 紫地花唐草文錦裂



写真25 紫地花唐草文錦裂部分

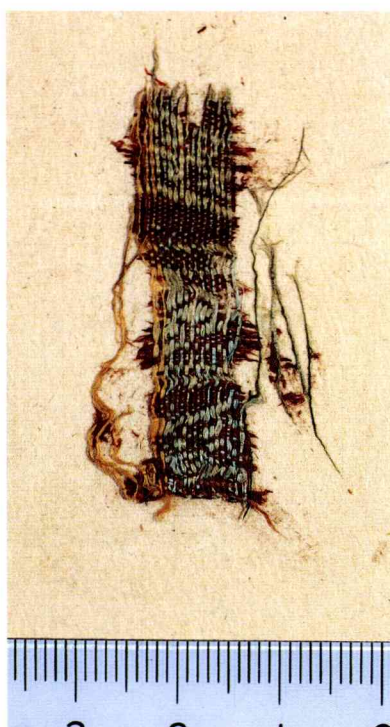


写真26 茶地錦裂（裏面）



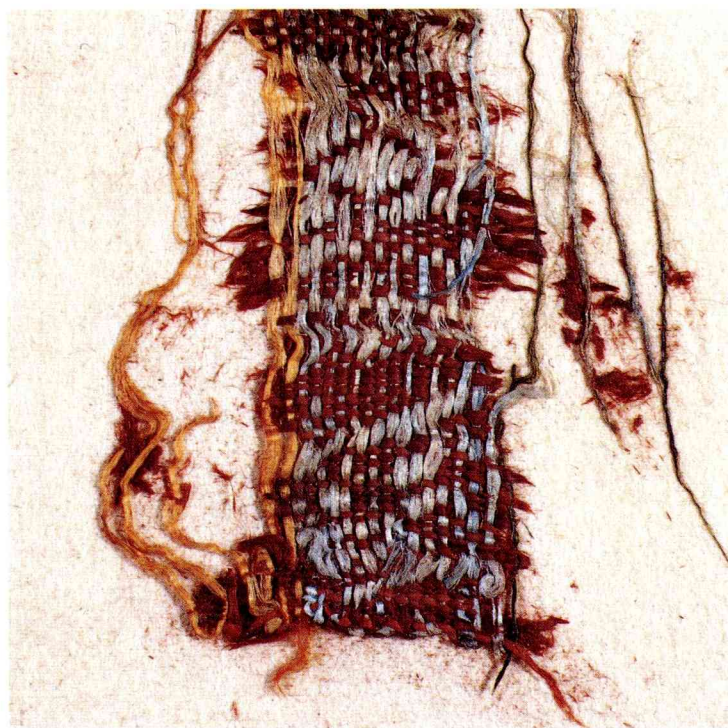


写真27 茶地錦裂（裏面）部分



写真28 青地綾裂

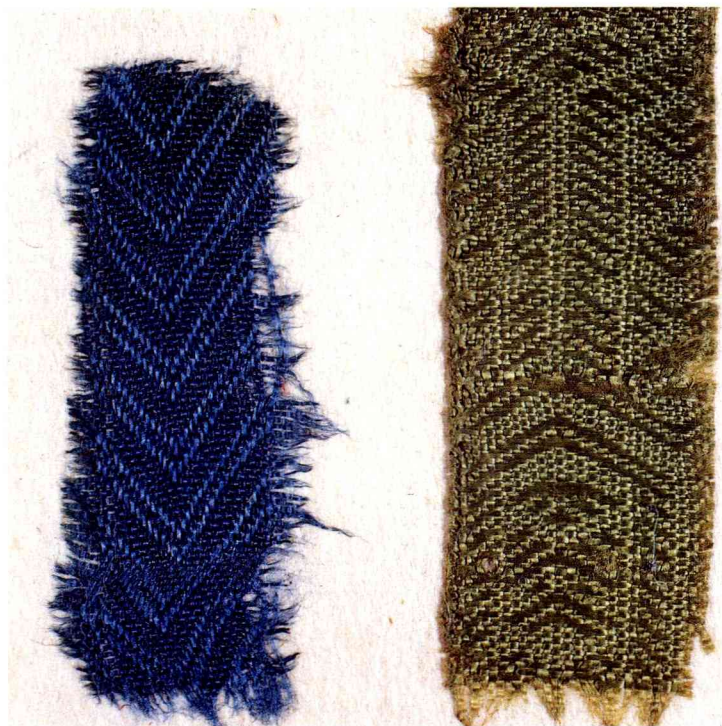


写真29 萌葱地綾裂部分



写真30 黄地平絹裂



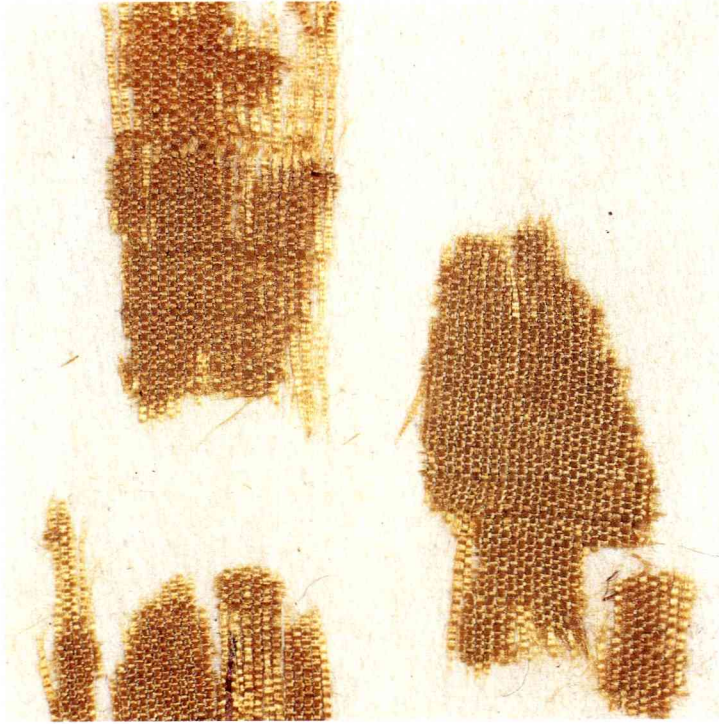


写真31 黄地平絹裂部分

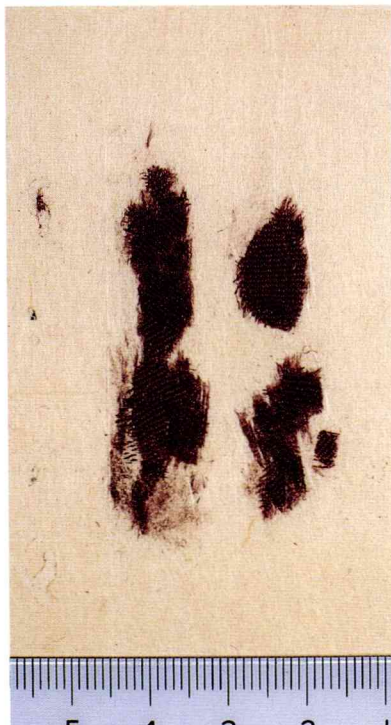


写真32 紫地綾裂



写真33 紫地綾裂部分



写真34 緑地緯錦裂





写真35 緑地緯錦裂部分

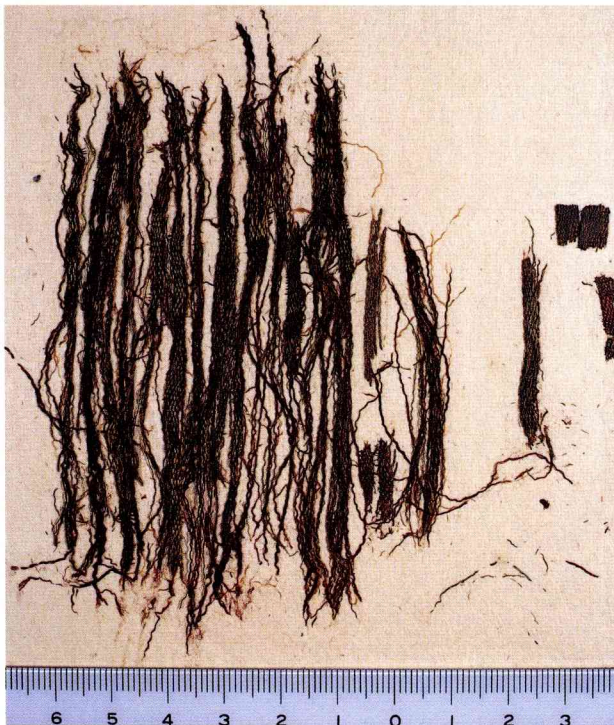


写真36 茶地錦裂

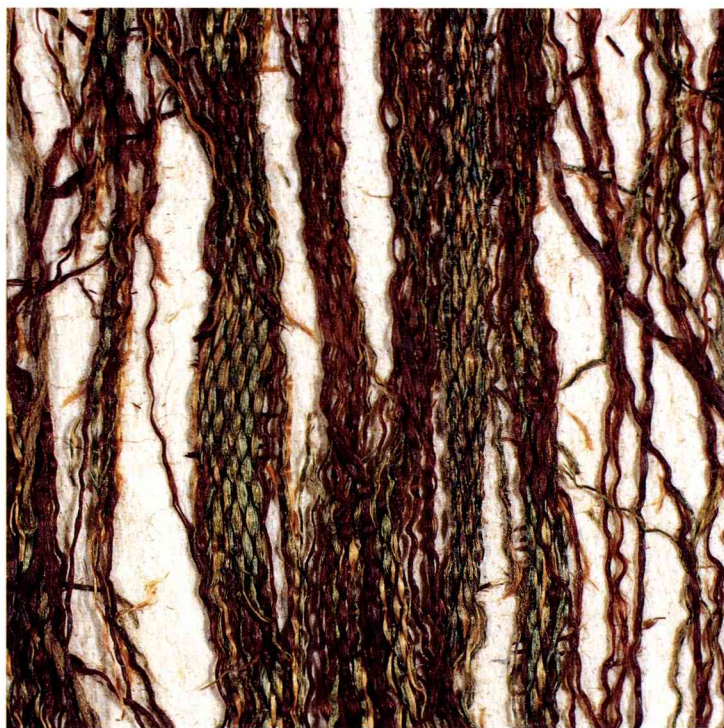


写真37 茶地錦裂部分



写真38 赤地葡萄唐草文綾裂



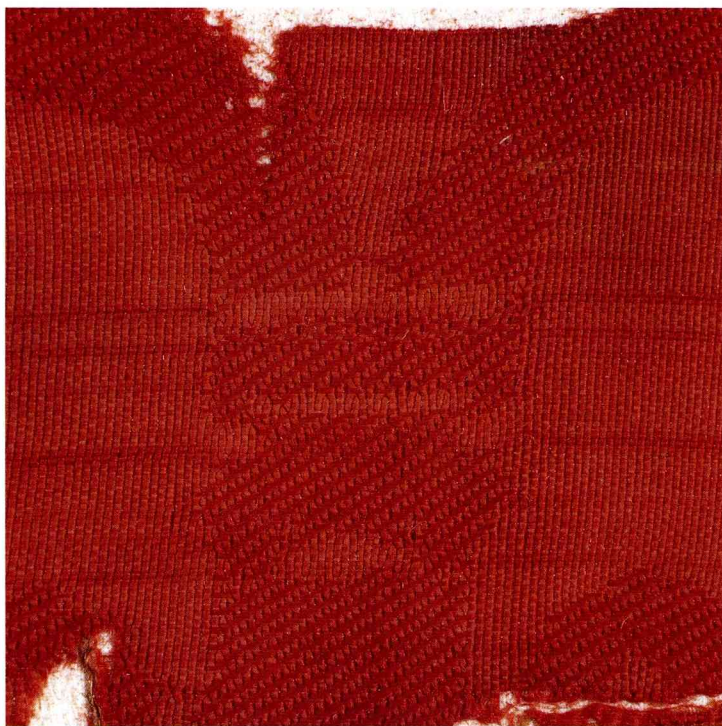


写真39 赤地葡萄唐草文綾裂

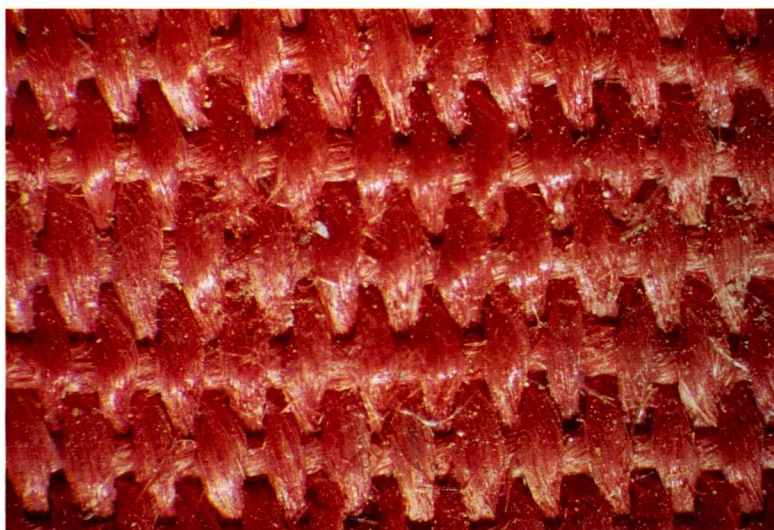


写真40 赤地広東裂、赤(R) (フィルム上で8倍、以下同様)

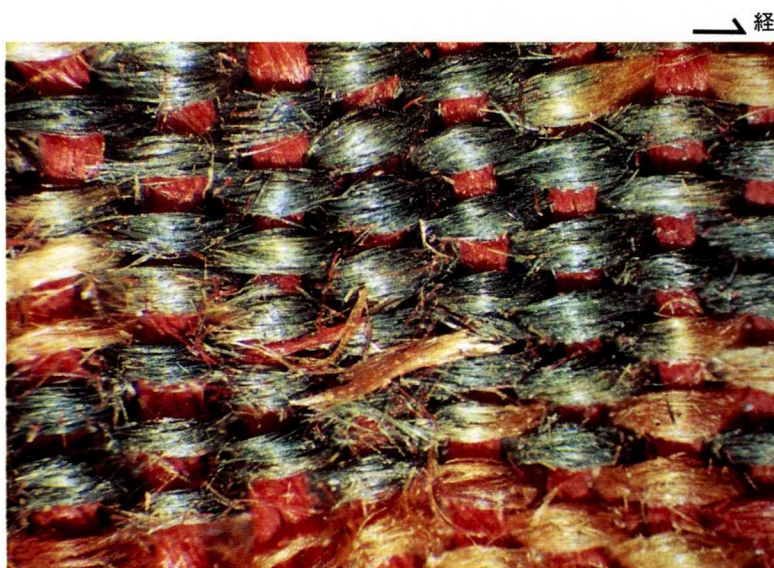


写真41 赤地広東裂、緑(G)

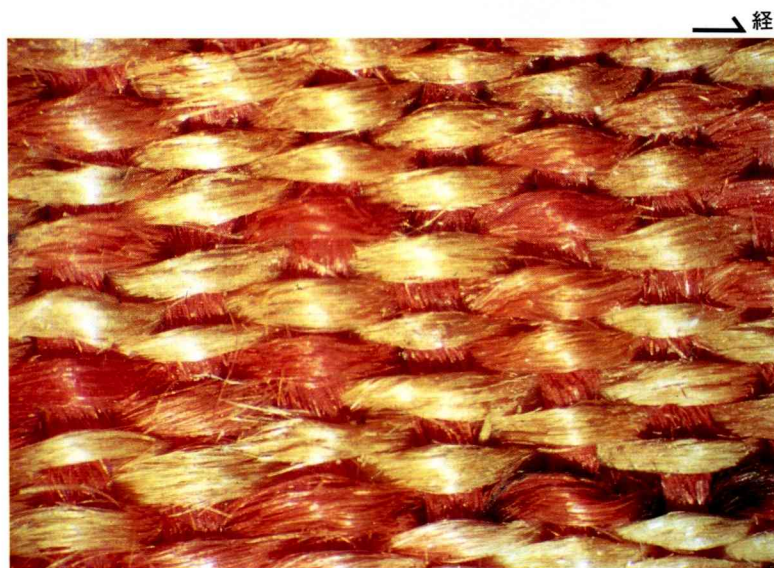


写真42 赤地広東裂、黄(Y)



└ 経

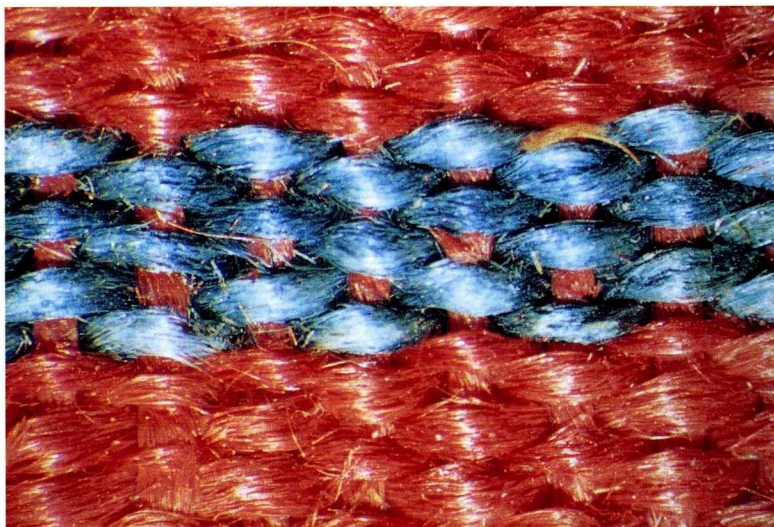


写真43 赤地広東裂、青(BI)

└ 経

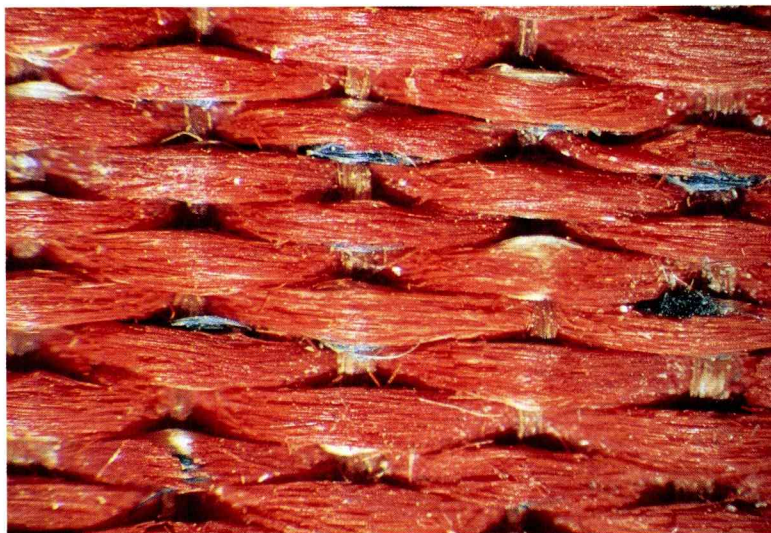


写真44 紅地亀甲花葉文錦裂、赤(R)

└ 経

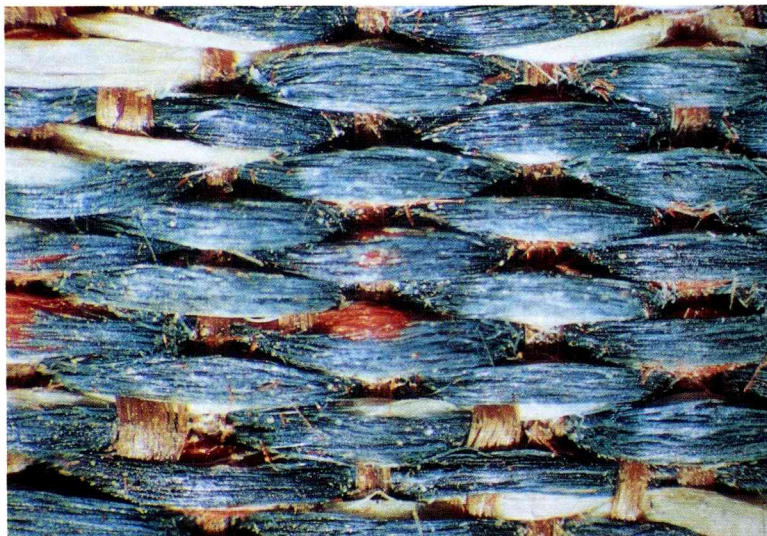


写真45 紅地亀甲花葉文錦裂、青(BI)



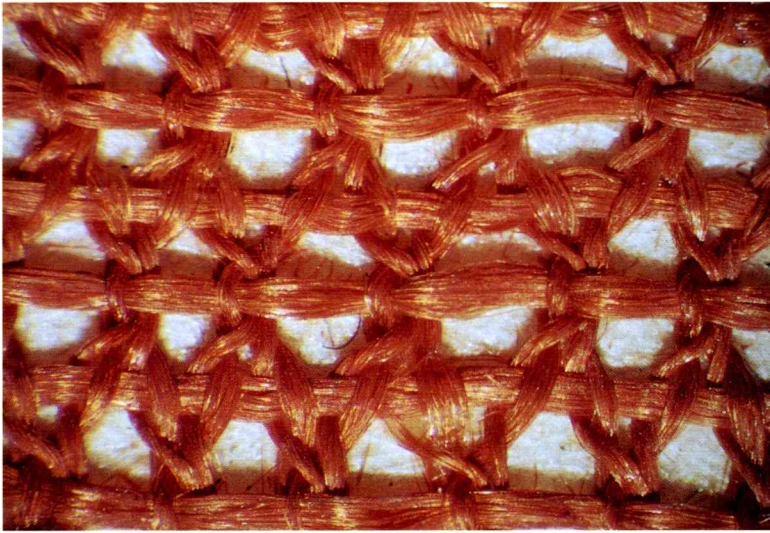


写真46 淡茶地夾纈羅裂、茶(Br)

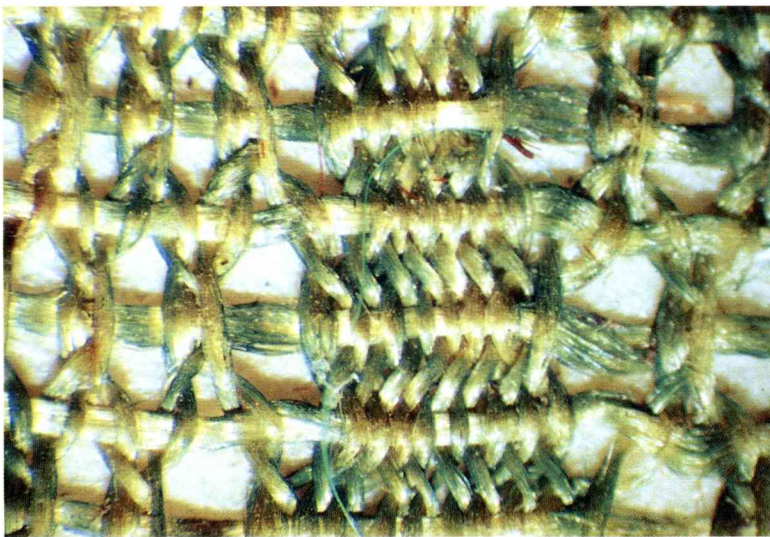


写真47 淡茶地夾纈羅裂、緑(G)

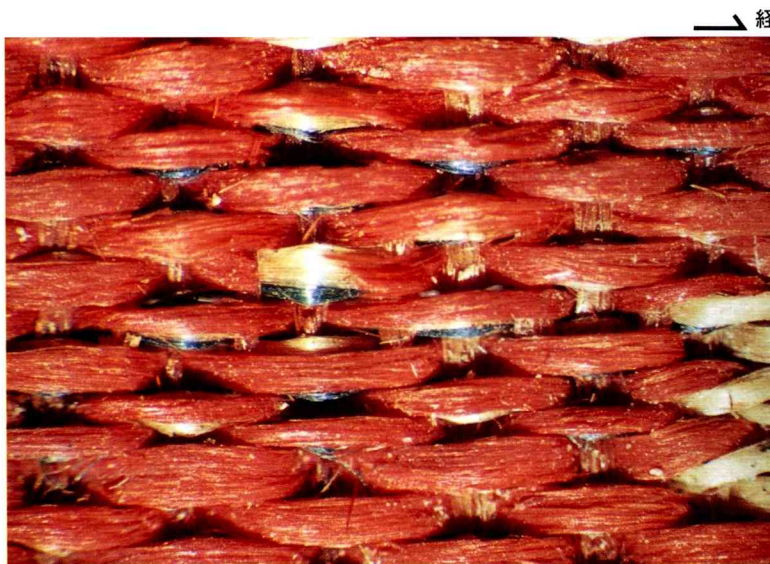


写真48 赤地格子蓮花文錦裂、赤(R)



→ 経

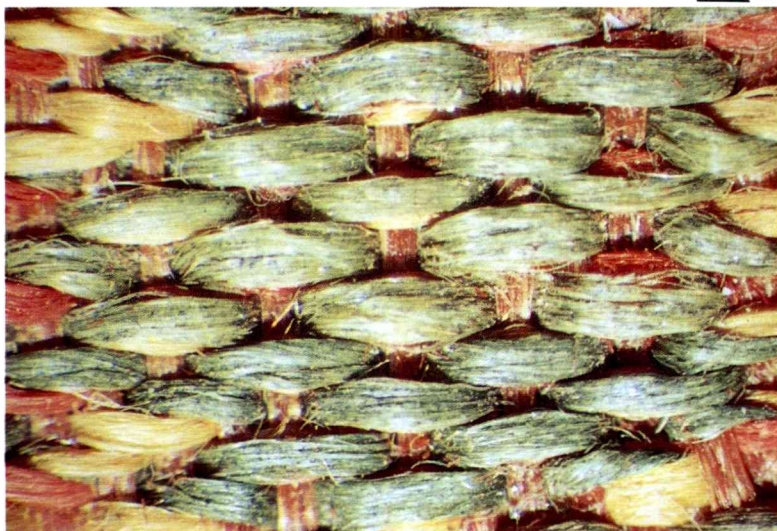


写真49 赤地格子蓮花文錦裂、緑(G)

→ 経



写真50 赤地格子蓮花文錦裂、黄(Y)

→ 経

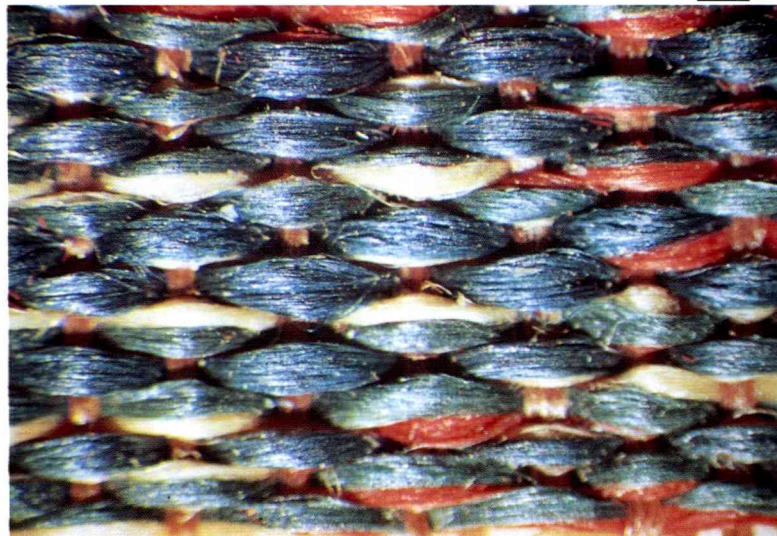


写真51 赤地格子蓮花文錦裂、青(BI)





写真52 経錦裂（裏面）、赤(R)

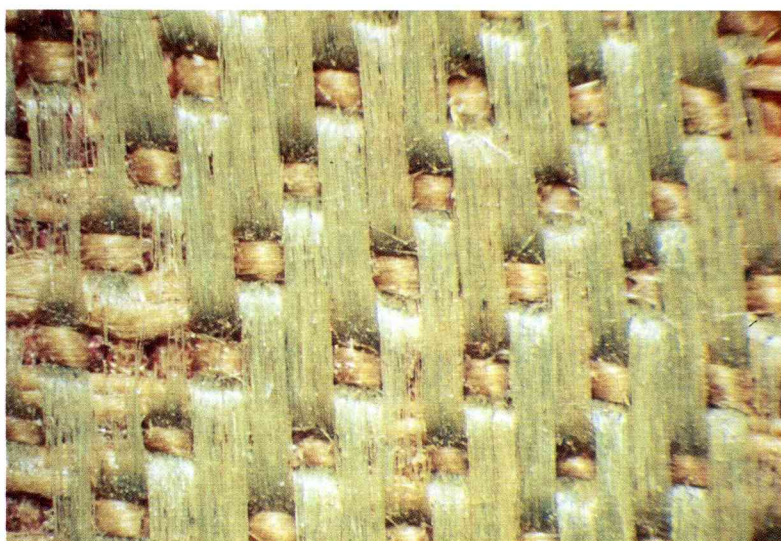


写真53 経錦裂（裏面）、緑(G)



写真54 経錦裂（裏面）、黄(Y)



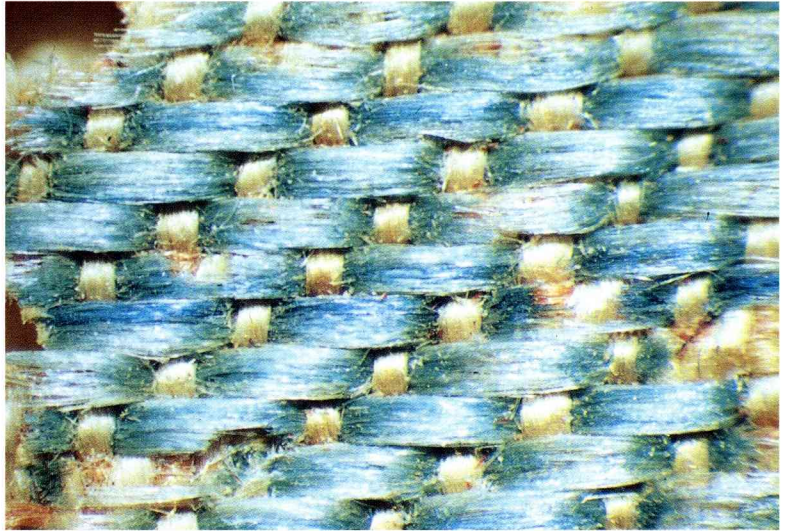


写真55 経錦裂 (裏面)、青(B1)

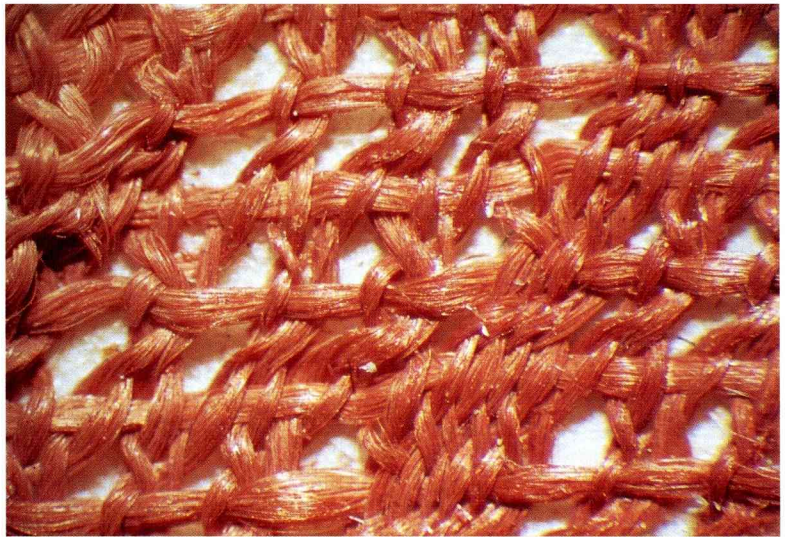


写真56 淡茶地夾纈羅裂、茶(Br)

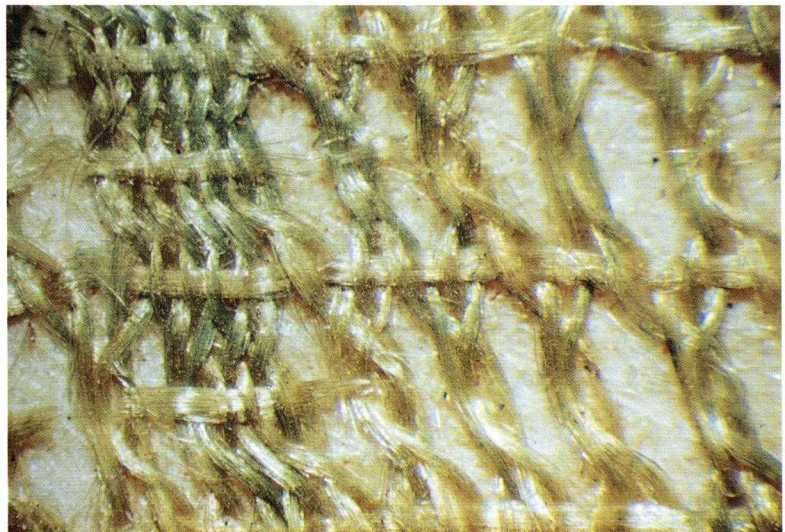


写真57 淡茶地夾纈羅裂、緑(G)



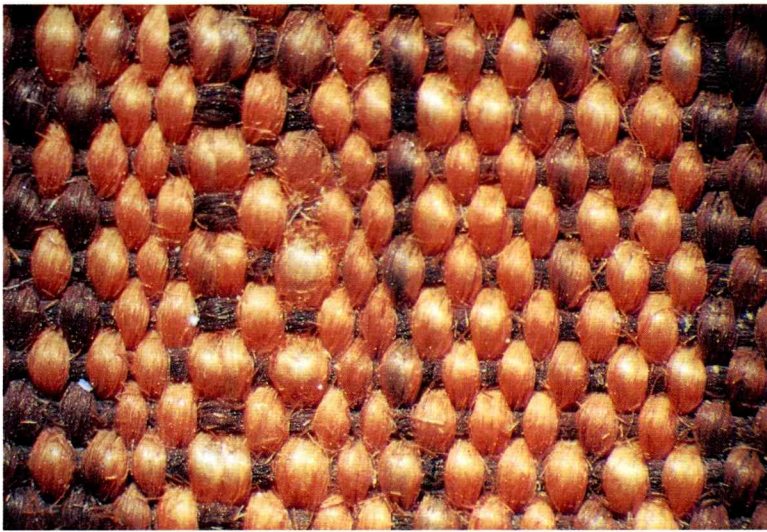


写真58 深茶地朽木形文広東錦裂、赤(R)

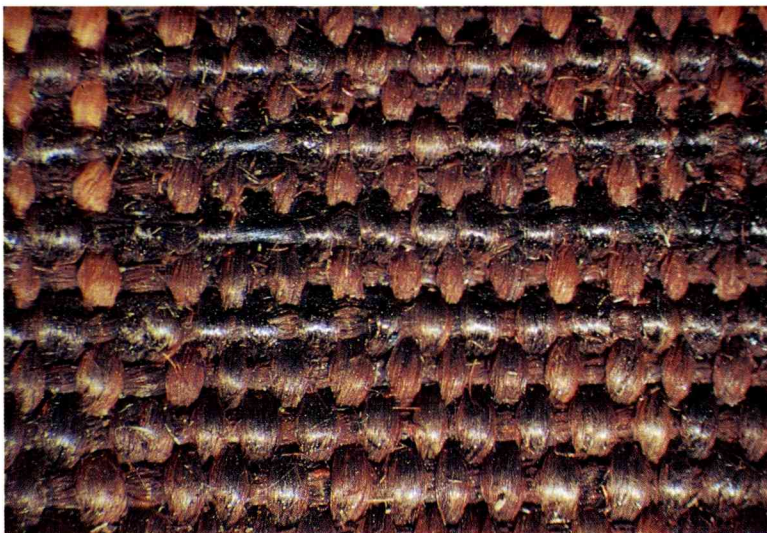


写真59 深茶地朽木形文広東錦裂、茶(Br)



写真60 紫地緞裂、茶(Br)



→ 経



写真61 紫地平絹裂、茶(Br)

→ 経

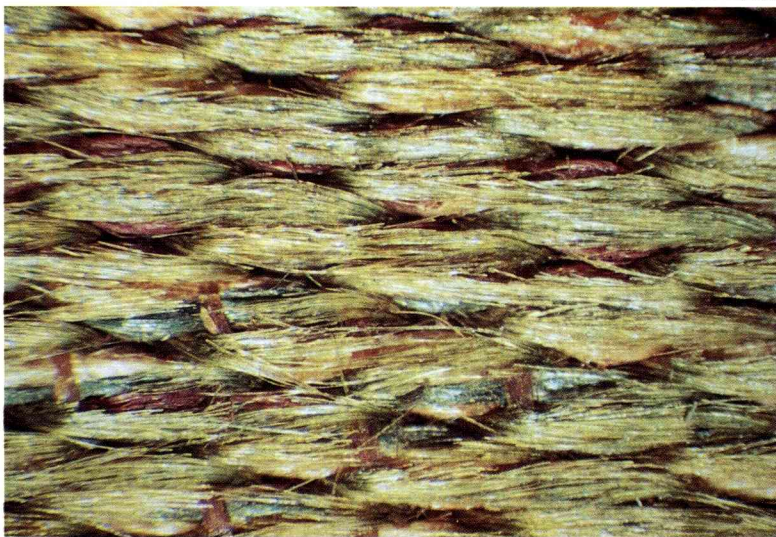


写真62 紫地花唐草文錦裂、緑(G)

→ 経

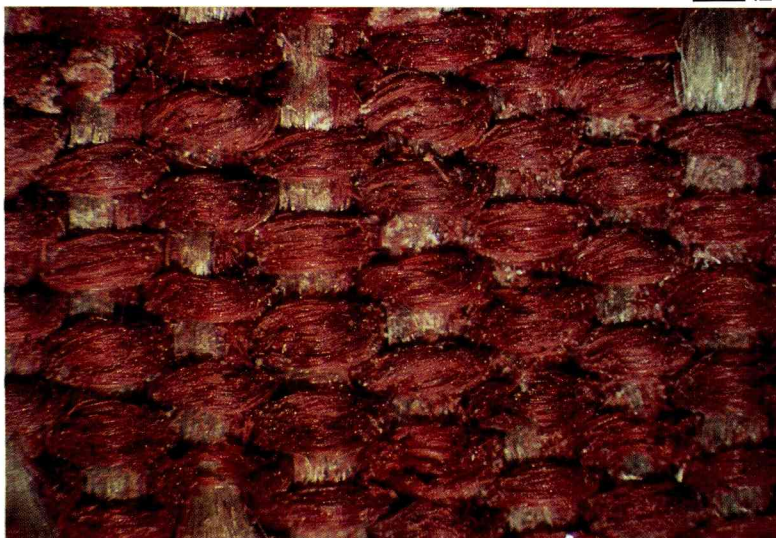


写真63 茶地錦裂(裏面)、茶(Br)





写真64 茶地錦裂（裏面）、黄(Y)

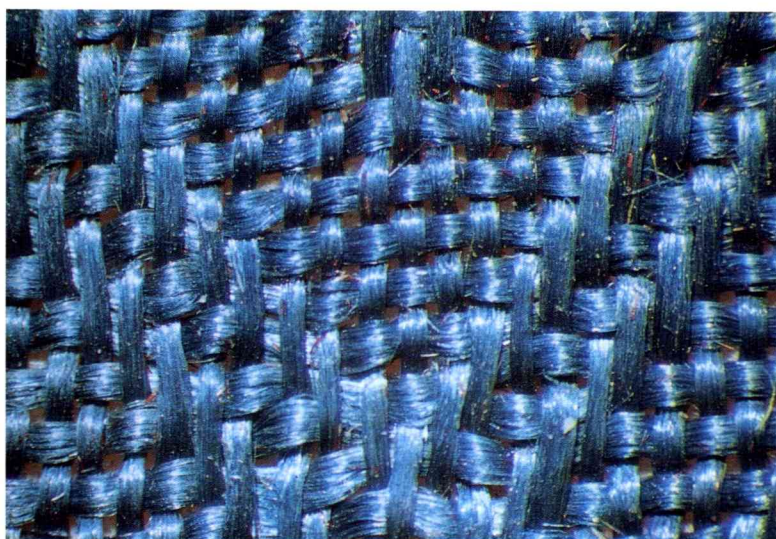


写真65 青地綾裂、青(BI)

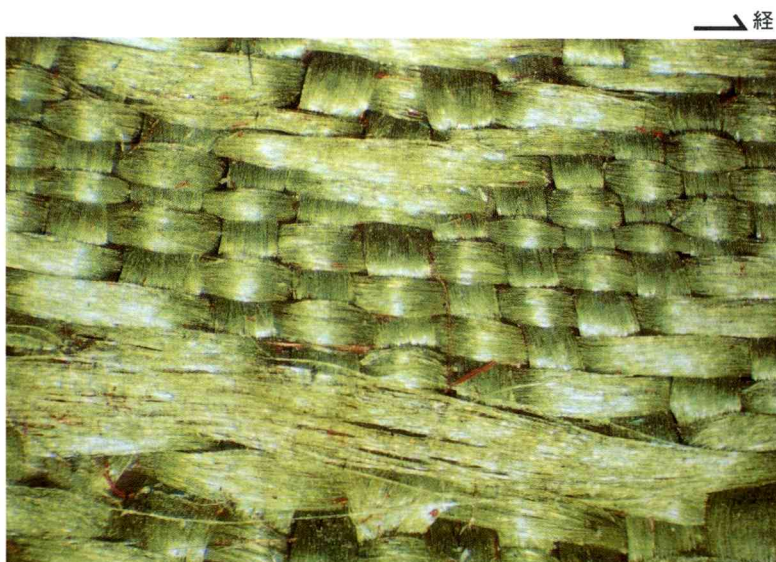


写真66 萌葱地綾裂、緑(G)





写真67 黄地平絹裂、黄(Y)

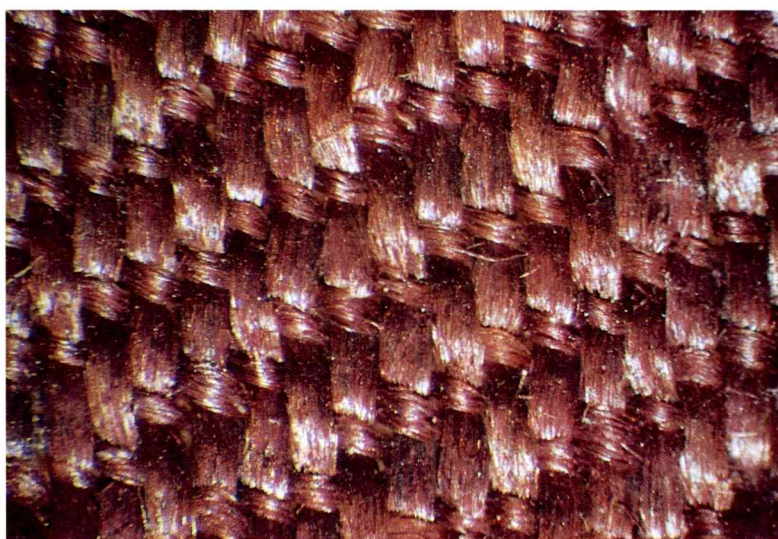


写真68 紫地綾裂、茶(Br)



写真69 緑地緯錦裂、緑(G)





写真70 緑地緯錦裂、黄(Y)

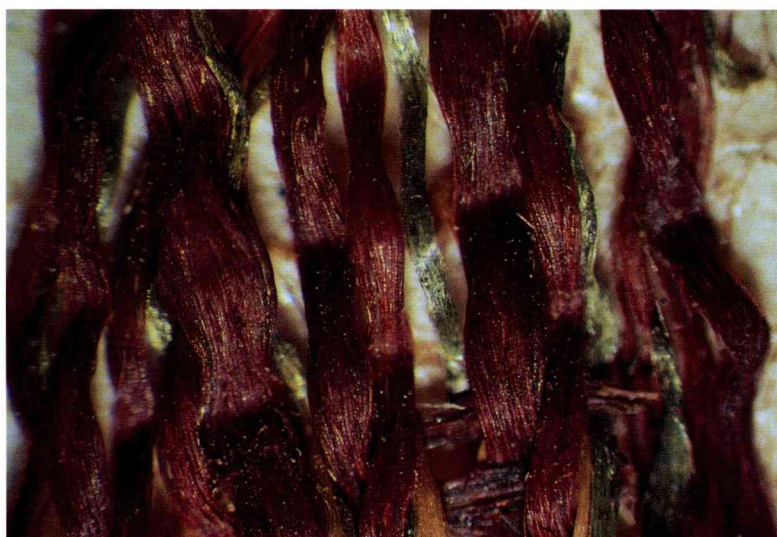


写真71 茶地錦裂、茶(Br)



写真72 茶地錦裂、緑(G)

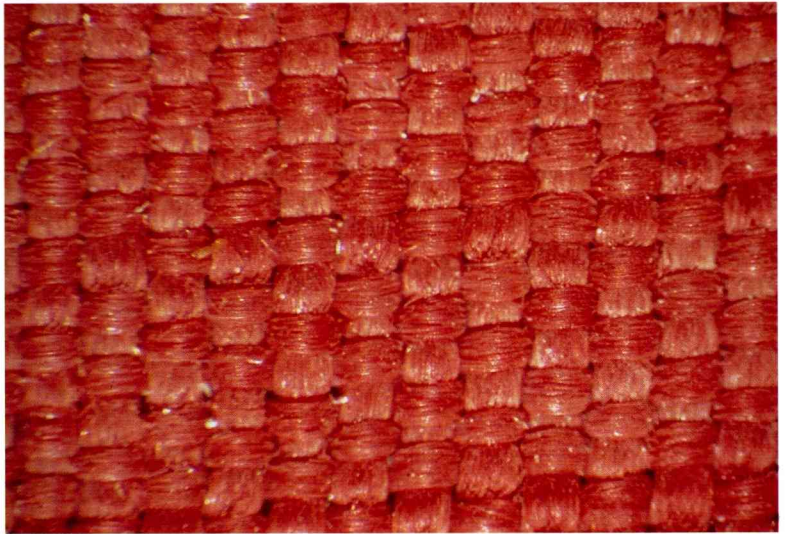


写真73 赤地葡萄唐草文綾裂、赤(R)